# 俺、不器用ですから

上条信者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺、不器用ですから

【Ｎコード】
Ｎ９２３０Ｕ

【作者名】
上条信者

【あらすじ】
ファンタジー物を書いてみたくて・・・・・。
主人公は変人。ヒロインは気弱。

この小説は、作者が習作として好き勝手書きまくる小説です。
できれば色んな意見がほしいので罵倒もバッチコーイですが、それにはそれなりの態度で返すのであしからず。
喧嘩し合えながら意見が出せるといいなぁと思っています。

## 飛ばして行きましょう（前書き）

衝動的に始めてみた。

## 飛ばして行きましょう

「はじめようかぁてぇんたぁいかぁんそくっ！にふんごにきみがこおなぁくともぉ！イマというほぉきぼしぃっいまぁもふたぁりおいかぁけてぇるっ！」

「あ、あのもうすぐ謁見の間ですからし、静かにしてください」

「お前・・・・空気読もうぜ・・・・・」

「ええ！？私のセリフじゃないですかそれっ！？」

「しょーがねーなー。あれだろ？ここは何か偉い人に顔見せときゃいいんだろ？」

「ええ、そうですけど・・・・」

「なら問題ない、任せとけ」

「不安だなぁ・・・・」

やぁ、こんな会話から冒頭とは、読者の君達に失礼なことをした。
俺の名前は間部（まなべ）　功刀（くとう）、限りない伏臭（アンリミデッド・キング・フレーバー）と周りからは呼ばれている。
高校一年生という、小説とかじゃ色々目覚めて世界の危機を救ったり、ロボット乗ったりする夢あふれる世代だ。
現在、俺は大理石かなんかは知らんがピカピカ光る石床の上を歩いている。
隣にはオロオロと身丈似合わぬ大きな杖を持った少女が付き添って

いる。
彼女の名前はルカトエーゼ・モン・ヴァルスニオ、王宮上級魔導管理官というものらしい。
実に俺の魂を震わせてならない名前だ。
ちなみ俺は日本人だ。名前の通りな。
そして、日本には王宮上級魔導管理官なんて役職は存在していない。
イギリスは分からんが、あるといいな。
遡れば今日の放課後、いつも通りに帰り道を歩いている時だった。
地面に空く、光り輝く何か。
その穴が突然現れた為に、予期せず足を突っ込んでしまった俺の抵抗も空しく、ズプズプと沼に沈んでいくような感覚の他に何かが身体を這いまわるような触感を味わいながら俺は穴に落ちた。若干気持ちよかった事は秘密だ。
そんな普通とは言えない超常的な現象をへて、俺は今デカイ門の前に居る。
この先に国王と呼ばれる奴がいるらしい。

「いいですか、くれぐれも言葉づかいは気を付けてくださいよ」

「合点承知」

向こう返事も待たずに門を蹴り飛ばす。
ほほぉ、これが世界の修正か。ただの高校生である俺がまさかクソ重そうな石門を蹴って開けるなんて芸当ができるとは。
隣のルカトエーゼはもちろん中に居た大体の人物は呆気を取られてポカンと口を開けていた。

「こんにちわ、俺が神だ」

「な、な、」

ルカトエーゼ・・・・長いなルカちゃんでいいか。
いや、待てよ?それだと某飛べよぉおおおおおおお！の男の娘と被るな・・・。
でもルートに入ったら女の子になるしいいのか?
話が逸れたな、閑話休題。
ルカ子が驚きと憤怒に目を見開いている。
あら、こんな顔もできたのね。

「やだ・・・このチミッコ・・・可愛い・・・」

「何わけのわからない事を言ってやがりますか！！姫様の前でなんて無礼な！！」

「まぁ落ちつけよ、それよりトイレ行きたいんだけど」

「むぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜、こんな奴が救世主なんて絶対嘘です！！少なくても私が絶対認めません！！」

「はは、照れるぜ」

「ぬがぁあああぁぁぁぁあぁぁあああああああああああああ！！！」

「彼の言う通りよ、ルカトエーゼ。少し落ち着きなさい」

「ひ、姫様?!」

今まで椅子に座って黙っていた姫様と呼ばれる人物が怒りに身体を震わすルカ子に声をかけた。
わぁー金髪でおメメパッチリしててお人形さん見たーい。
すげぇ美幼女だ。大体１３歳くらいか?

「初めまして救世主様、ユリィーナ・ベルジェ・バルクグルエです。役に立たないバカ親の代わりにこの国を切り盛りしている国王代理です」

「うーす、君可愛いな。アメちゃんをあげよう」

「飴細工ですか?わー見たこと無い飴だー」

ポッケに入っていたアメちゃんを壇上を上がって姫様に手渡す。
後の大臣とかそんな奴らがざわついた気がする。どうでもいいが。
俺には先に聞かなければならない事があった。

「ところで姫様、一つお聞きしたい事があるんですよ」

「・・・!ふふ、何かしら?」

「いえいえ、大したことではありませんよ〜」

俺はドン、と大きく振り上げた足を姫様の目の前に叩きつけた。

「ここから元の世界に帰る方法を教えろ」

「あら、事情はルカトエーゼがお話ししたでしょう」

ギロリと睨みつけてやるが、姫様は気にした風もなく二コリと作り笑いを浮かべる。
この年でここまでヤれる奴ってことは、相当な実力者であろうことがその笑みから窺えた。

「海に今まで無かった大陸が現れてそこから謎の軍勢が侵攻、抵抗も空しく押され始めた。神託に従って救世主を呼びだす儀式をそれぞれの国で行使、結果俺以外にも大量に救世主がその軍勢を押し返したが未だに膠着状態。被害を受けていなかった為救世主を召喚していなかったお前らは諸外国の要請というか圧力によって召喚に踏み切った。で、召喚されたのが俺と」

「説明御苦労さま。で、貴方が元の世界に帰る件だけど。正直何とも言えないとしか、ね・・・」

「ふうん、やっぱ神託ってぇのはお前らの意思は絡んでない訳か」

「当り前よ、何よ神って。私は生まれてこの型自分の力と親しい人間しか信用したこと無いわ。でも、この世界の仕組みとしてはそういう力が実在するのも事実、従っとかないと何があるか分かったもんじゃないし」

「・・・・・気にいらねーな」

「ホントよね」

俺達の怒涛の情報交換に付いていけなかったのか、今度こそ俺と姫様以外は呆けている。

「お前さんのとこの人材大丈夫かよ？老害ばっかじゃねぇーの？」

「ちょっと、確かに小国で有能とは言い難い人達だけどみんな私に尽くしてくれることを一人一人丁寧にオネガイして回って確約を得た私の臣下なのよ？いきなり来た部外者のくせに随分な事じゃない」

「おおっと、いや、すまんね。いきなり異世界に放り出されたのと理不尽な要求にイライラしてたんだべよ。許してちょ」

「いいわよ？ただし、私に忠誠を誓ってもらうわ」

「国ってめんどくせー・・・・。ま、仕方ねーべな」

周りを置いてけぼりにして、まるで友人同士の世間話のような軽い口調で次々とやる事をやっていく。

「で？忠誠ってどう誓えばいいわけよ？」

「ちょっと待ってね？ルカトエーゼ！いつまでもボーッとしてないでこちらに来なさい！」

「あ、ははははい！すぐに！」

慌ててルカ子がこちらに近寄り懐から何か奇怪な文字やら記号の書かれた布を広げた。
すると、姫様は立ち上がりこちらの手を握って引っ張りその布の上に招きいれた。

「さーて、詔は省略していいわよね？長いし」

「そんな適当でいいのか」

「いいのいいの。要は結果付いてくればいいの」

「お前実は子供じゃねーだろ」

「あら、失礼ね」

「あ、あの、姫様」

準備ができたのか、躊躇いがちに話しかけるルカ子。
それに姫様は頷き返し、俺にしゃがむ様に要求した。
何が起きるか分からなかったが、腰ほどの身長しかない姫様の視線に合わせる為に膝を折った。
ニヤッ、と姫様が笑った瞬間、俺は嫌な予感が走った。

「貴方は私の国の安全の為に忠誠を以下略」

そう言って、姫様は俺の唇に己のソレを重ねた。
所存、キスである。
なん・・・だと・・・。
頭が混乱で満たされた時だった。

「な、何だぁ？！」

足元の魔法陣っぽいのが光を放った。
その時、頭の中でカチリっと鍵がかかったような音が響いた。

「ふう・・・。はい、これで終わりよ」
「おう・・・・つーか事前に言えよ」
「ファーストキスって言うのが恥かしかったのよ」
「そこら辺はちゃんと子供なんだな」
「当り前でしょ」

少し恥ずかしそうに眼を逸らすその仕草はかなり萌えだった。

イライラが少しは和らいだ。

「部屋はルカトエーゼが案内してくれるわ。あなたの用事はまた追って伝えます」

「ん、りょーかいボス」

「さーて、この後はこのまま会議なのよねー」

「わけーのに大変だな・・・」

「貴方もその内死ぬほど忙しくなるわよ」

「藪蛇でした」

そう言いながらヒラヒラと手を振り謁見の間を後にした。

「ちょ、ちょっと待てください！なんで私を置いて行くんですか！待ちなさいってばぁ！！」

「むげぇーんだぁーいなーゆーめのあとのぉーなにもないよのなかじゃあー」

「ま、待ち無さ〜ぃ・・・ぜぇ・・・ぜぇ・・・お願い・・止まっ・・・・」

あれから親切に部屋に案内しようとするルカトエーゼから走って逃げる俺。
追いかけてくる様子が犬みたいで可愛いから、つい。
因みに俺の身長は１７０ちょうどだ。彼女は１４０後半ぐらいに見える。

「あ〜もうっ！いい加減に」

焦れたのか、ルカ子が懐から一枚の紙を取り出した。
奇怪な紋様が描かれているので、先の魔方陣類と当たりを付ける。

しかし・・・魔法か。実にすばらしいな。

「しなさい！」

「おおっ！？」

魔方陣が発光したかと思うと、薄く緑に光る鎖のようなものが身体に巻きついた。
抵抗より魔法への関心の方がウェイトを占めたのであっさり拘束される。

「や、やっと・・・捕まえましたよ・・・」

「おーすげー魔法すげー、ていうかルカ子すげー」

「何ですかルカ子って・・・。それに凄いのは当たり前ですよ。上級魔導管理官なんて私を含めて3人しかいませんからね」

「そこら辺の情報はまだ聞いてねーんだよなー」

「その説明もしながら部屋に案内する予定だったのに・・・・」

「いや、追いかけられると逃げたくなるじゃん」

「はぁ・・・もういいです・・・」

しょぼん・・・と落ち込むルカ子。
人生楽しまにゃそんだぜー。

「んじゃ遊んだしそろそろ行こうぜ」

ついでに動くのに邪魔になりそうな拘束具をフンッ！と吹き飛ばしてみる。
おお、意外と出来るもんだな。

「どうしたー置いてくぞー」

「・・・・・・・・・もうヤダあの救世主」

「つまりですね。このフィールメト王国は特別な樹海の中に存在するが故に攻めにくく、かと言って自国を富国し難いという良くも悪くも停滞の続く国なのです」

「せんせーい質もーん。特別な樹海ってどう特別なんですか？」

「うーんと、詳しい話は長くなるので避けますけど、ようは資源はあるけど手を出すには微妙な変な森ですかね」

「ふむふむ。それじゃ、魔法とかは？」

「魔法と言うのは一種の学問です。大気の中に存在するマナの運用を研究することが講義となっています。学問なので学べば皆さんある程度はできるようになりますよ」

「へー魔法って学問なのか」

「分野も多岐になりますが、私はその中で魔方陣を研究しています。魔方陣はその名の通り陣ですから、結界や機関としての役割を予め記して置くんです。要事に合わせて使い分けのできる便利で一番人気の高い魔法です」

様々な質問を交わしながら部屋に向かう俺とルカ子。
完全にここが異世界である事を実感する。
その事を理不尽に思うと同時に、この状況に俺の中の厨二病が歓喜

する。
自分でもこの理性と本能が拮抗して存在する性格を難儀に思った。
常識的に考えればこの世界の事情なんざ知ったことではないし、おそらくこのままだと沢山の人々がくっそたれな人生を歩む事に関してもなんら感慨も無い。
そう俺の理性が決定づけるのに対して、厄介のなのは本能の方だ。
ヒーロー、男なら誰もが憧れる存在。それに俺はなれる。
人が傷つくなんて事を黙って見過ごすなんざ、日本人の俺には少々荷が重い。
力があるだけの幼稚な正義心だ、なんてどこかの妙に斜に構えたＴＳ物のならそういうだろう。
現実の悲劇を知らずに目を逸らす愚かな奴だと。
括弧つけた男ならもっと辛辣であんまりな言葉を送ってくれるはずだ。
嗤える。実に滑稽だなお前ら。

そ　れ　が　ど　う　し　た。

隣に泣いている人がいる。どうした？と声をかける事は当然だろう。
もしそいつが零崎一賊みてーに突然襲い掛かってきても、俺には関係ない。
俺がヒーローになることに、何の揺らぎも無い。
俺は、俺はもう無力ではないのだから・・・・・・・・・・。
だから、こんな理不尽なファッキンリアルなんざ敵じゃねぇ。
俺が助けなきゃ、な。

「・・・・・・・・・・」

「あの、救世主様。着きましたよ」

ハッ、と我に返る。
どうやらいつの間にか俺の部屋に到着したらしい。

「明日からはこの世界に付いて詳しい事の説明と貴方の力の確認をするつもりなので、早めに呼びに着ます」

「ねぇねぇ、ご飯とトイレは？」

「時間になったら侍女が運んできます。トイレは部屋に付いているのでご自由に」

「アザース」

「はぁ・・・あなたが救世主なんて信じられません」

「俺は神でヒーローだからな」

返事なくドアが閉められた。
反応、しろよ。

「さあて、どうしたもんかねぇ？」

備えつけのベッドに寝っ転がって天井を見上げる。
考える。
俺がこの世界でどうするべきか。
帰還は前提として、当面の行動はどうしたものか。

「魔法・・・・いんじゃね？」

理性的に考えるのは疲れるので、とりあえず思った事を口に出してみる。
魔法、うん、カッコよかったな。
ピカーッてなって、あれが自在に使えるようになったらさぞ気持ちいいだろう。
サブカルチャーから培った知識を使えばいろいろ凄いものになりそうだ。
理不尽な状況を、取りあえず楽しんでみるのもいいかもしれない。
ここのトップもどうやら悪い奴ではないようだし。

「よーし、がんばるぞー・・・・明日から」

好き勝手動こうにも情報も足りない。
そうだな、正義の味方のキメ台詞とか決めておこう。
そうして、異世界に放り出されて最初の夜が過ぎていった。

## 飛ばして行きましょう（後書き）

どうも、作者です

「間部功刀でーす」

始めちゃいましたね

「始まっちゃいましたな」

いやーどないしょう

「いやいや、それはお前の仕事だろう」

そうは言ってもね。この後の展開なんて一切考えてないよ。設定はあるけどね。

「それなら俺が勝手に動くだけだけどな」

ああ、そっちの方が楽

「次回はいつごろになるのよ」

気分次第かな？気長にお待ちして欲しい

「こんな作者ですまん」

## 俺の力、変態的だったらしい（前書き）

いえー、2話目っす

## 俺の力、変態的だったらしい

「ちーす、救世主でーす」

異世界生活二日目、結局徹夜した俺はパンツ一丁でポージングを考えていると、起こしに着たルカ子がそれを目撃。
昨日は見てなかったが攻撃用の魔方陣もあったらしくパンツを燃やし尽くされた。
ついでにベッドの上にあった学生服まで被害にあった為、仕方なく全裸で指定された訓練場とやらに赴いた。
不思議と身体は無傷だった。

「な、な、なな、」

「およ？あんさん誰よ」

一足早く訓練場に到着すると広い広場の真中に線が引いてあり、その中に鎧を着た人が一人だけ立っていた。
兜まで被る完全戦闘態勢だったので性別が判断できない。
何やら激しく動揺しているのか、その鎧がカタカタ音を立てている。

「き、貴様なぜ裸なのだ？！」

「人に裸見られると興奮するよね」

「変態か！？」

「いいや、救世主だ」

「貴様のような救世主がいてたまるか！」

「やめろよ、照れるぜ」

「褒めてない！！」

どうやらこの声は女っぽいな。わからんけど。
妙に高いし女だろう。
女だといいな。

「ちょ・・・待って・・・・服を着てくださ・・・・」

ようやくルカ子がフラフラになりながら到着した。
手には見慣れない造りの服が抱えられている。
それにしても疲れ過ぎじゃないか？
魔法って学問らしいからやっぱ管理官とかも研究員気質でインドア派なのだろうか？

「ルカトエーゼ！なんなんだこいつは！？」

「はひっ・・・、えと・・・・此度召喚された救世主様です」

「はあっ！？この変態がか？！冗談だろう！？」

「えと・・・大いに残念ですけど、事実です」

「・・・・・・本当にか？」

「おいおい、確かに俺のマグナムは救世主どころか神様級だが」

「・・・・・・これを私は鍛えないといけないのか？」

「・・・・・・はい、がんばってください」

今鍛えるという単語が聞こえた気が。

「なぁ、何処鍛えるの？股間？」

「ルカトエーゼ、こいつ殺しちゃダメなのか？」

「落ち着いてください、同感ですけどダメです」

そういえば、この鎧の人の名前を聞いていなかった。
お世話になるらしいから名前くらい聞いとかんとな。

「しつもーん。お名前を教えてくださいなー」

「・・・・・・王国軍指導隊第２位、クネール・イ・モンキュール

だ。貴様に戦いの基礎を叩きこむのが仕事になる」

「姦計は？」

「ない」

「えー、なら俺魔法の方が習いたいんだけど」

「それは私が受け持つことになってますけど、あなたに適性があるか分からないので保留です」

「そっすか」

「分かったなら訓練を始める・・・・・前に服を着ろ」

「え、俺はこのままでも大丈夫ですけど」

「急所を狙う事も立派な戦術だからな、私もやりやすいしいいだろう」

「すいません」

「わかったならとっとと服を着ろ」

おとなしくルカ子が持ってきた服を着込んだ。
道着のような熱い布地を感じさせる着心地がした。

「お前、武器を扱った事は？」

「ない」

「そうか。なら手加減してやるから避け続けろ。なに、救世主として召喚された者は身体能力が跳ね上がるらしいからな、死ぬことはあるまい」

いきなり真剣を突き付けられた。
わぉ。マジかよ。

「しっかり避けろよ、っと」

「おおおおおおおお！？」

訓練と言う名のデスゲームが始まった。
いや、ちょ、まっ、あぶっ、ひっ、すいません、ちょう、しに、乗って、まっ・・・・・・・。

「ほう、よく避けるじゃないか。変態の割にはよくやるな」

「おおおおおおおおおおおおっ！？」

こわっ、真剣こわっ！
綺羅☆って光って迫ってくるぞ！よく切れそうだぞ！
そんな物騒なものを避け続けて早・・・・何分かなんて数えてる暇ねぇよバーカ！
しかし大分避け続けた気がする。
なのに目が慣れる、とか。相手の間合いが掴める、なんて都合のいい事が起きる気配がない。
一体どういう事なの。
あ、髪切られた。

「ふむ、この調子ならもう少し本気をだしても良さそうだな」

「え、ちょっと」

風を切る、真剣。
そこには殺気もなにも無い。感じることなど素人の俺ではできない。
しかし、俺に迫るその物体を心底恐怖した。

「・・・・・・」

「おしゃべりはどうした？」

心臓が大きく鼓動する。
そうか、これが現実か。
こええ、超こええ。
これが俺の身体を傷つけた時、どんな痛みが俺を襲うのだろう。
血はどんな色だ？赤か？赤黒いと聞いたこともあるな。
そうか、俺は恐いのか。
ただの高校生だ、ただのガキだから恐いのか。

ふざけるな。

俺はヒーローだ。
ヒーローは逃げない。恐くても、痛くても、傷ついても、なお立ち続ける。
恐くねぇ、恐くねぇんだよ。

「そらっ！」

「・・・恐くねぇ・・・・・・恐くねぇ」

目の前に剣が迫る。
当ったら死ぬかな。だが、避けない。
ヒーローは、避けない。

「・・・・・避け続けろと言ったはずだが」

「うるせぇよ、俺はヒーローなんだ。だから避けねぇんだ」

剣はピタリ、と俺の頭を叩き割る寸前で止まった。
底冷えするような低い声に、足元から震えあがりそうになる。
だが、睨みつける事だけはやめない。

「・・・・・避け続けろと言ったが、撤回だ。このまま眠ってろ」

刃の返し、腹の部分を俺に向けたまま大きく振り上げられる。
足が動かない。恐怖か、それとも避けるのに疲れたのか。
俺は振り下ろされるそれを睨みつけたまま、意識を落とした。

～おまけ～

「クネールさん・・・、あの・・・」

「ああ、分かっている。こいつ存外溜めこんでいるらしいな。舵取りが難しくなるぞ」

「はい、それにしても・・・・驚きました」

「何がだ？」

「クネールさん、最後の方は乗り気でしたよね」

「・・・・・まぁ、反骨精神のある奴は育てがいがあるしな」

「へー・・・・」

「・・・何だその顔は」

「い、いえ・・・・ただちょっと嬉しそうだなぁ～って」

「・・・・そういえば、ルカトエーゼ。貴様ここに来るまでに随分バテていたようだな」

「・・・・へ？」

「ちょっと運動していかないか？何、明日筋肉痛で動けなくなるだろうが平気だ」

「え！？いや、あのっ！？」

「ふふふ、そんなに遠慮するな」

「い、いやぁあああああああああああああああああああああ？！」

## 俺の力、変態的だったらしい（後書き）

主人公の心の闇っぽいのを書いてみました。

## お勉強会（前書き）

フィールメト王国は立地的に生きていくのが難しい為に横も縦も非常に仲のいい穏やか～な人達でいっぱいです。
殺伐としている部分も見受けられますが、基本的に外敵より国土に出没するモンスターの方が恐いので人間には甘い面があります。
その為外交ベタと取られがちですが、一般人でも狩猟が主な生活主体というどこぞの戦闘民族顔負けな精強な人種です。もし戦争を始めたらあまりの戦闘力の違いに各国はすぐさま撤退を余儀なくされるでしょう。
戦争してる暇なんてないんですよ、だから早く死んでください。とは、昔起きた隣国グムルドリアとの戦争の際に付きつけられた宣戦布告の返答だそうです。
もちろん領土に入った途端にグルムドリアはフルボッコにされたそうです。
え？なんでこんな森ばっかな小国で戦争が起きるのかって？
実はこの森、森であるがゆえに生命の源となるマナが豊富なんです。作物も育ちやすいし、希少な鉱物や植物も採れやすいといったまさに天然の宝物庫のような場所なんですよ。
作ったら作っただけ、掘ったら掘っただけ資源が出てくるなんてそりゃ各国が欲しがるわけです。
それだけマナがあるってことは生物も生まれやすいってことでモンスターもわんさか出没するんですけどね。
そういう立地条件が重なって、最近まで外交なんて隣国と細々交流を行ってた程度だったんですが、謎の大陸、私達はグリムリバーなんて呼んでますが、それが現れてから急に世界全体の情勢が変わっちゃいまして。
精強と噂されてるらしい私達にも対策を練るようにお鉢が回ってきたんです。

今までどれだけ私達が田舎者だったか思い知りましたよ。
各国の実情なんて全く興味ありませんでしたからね。それよりモンスター被害の対策ですよ。
しかしその会議の席で現在の大陸の情報を聞いた時は愕然としましたね。
救世主なんてものに頼らなければいけない程、切迫した状態だった訳ですよ。
そこら辺はまた別の話です。
これが大体のフィールメト王国の概要でしょうか。
・・・・・・・・・聞いてます？
頭が痛くて聞いてなかった？
・・・・・・・・・それより魔法のことを知りたい？
・・・・・・・・・もうやだこの救世主。

## お勉強会

「ルカ子の簡単魔法教室～わ～」

「・・・・・・・わかりましたからおとなしく席に座ってください」

「俺のテンションはレボリューションなんだ」

「・・・・・あんまり邪魔しないでくださいね」

あれからしばらくして目覚めた俺は、いつの間にか俺の部屋のベッドに寝かされておりルカ子が椅子に座って本を読んでいた。
よくわからん文字で書かれていた為、本の概要などまったく伝わってこなかった。
そこで疑問。あれ？何で言葉は通じるんだ？
ファンタジーの中でそれに付いて考えたら負けの気がしたので流した。

「オホン、それでは未熟な身ながら教鞭を執らせていただきます」

「ん？そういやルカ子っていくつだ？十代っぽいけど」

「孤児なので正確な年齢はわかりませんけど、一応１６歳です」

「お、同い年なん」

「え？そうなんですか？」

「へ～、俺と同い年で偉い地位に付いてるのか～。どうやったらそうなるんだ」

「私もどう育ったら貴方のような人間が生まれるのか疑問です」

「俺はヒーローだからな」

「はいはい・・・」

なんか反応が雑になってきた気がする・・・・。
少しさびしく思いながら大人しくベッドに座った。

「まず魔法に付いてですが、これは昨日もお話しした通りこの世界に満ちるマナを運用する為の技術の総称です。運用についての方法は人それぞれです。己のマナを魔力とし、自分の自身を術式と見立て魔法を発動するオーソドックスな魔術師。私のようにマナの運用、効果などを予め記し汎用性の広い用途が測れる魔方陣を生成し使用する魔導師。他にも様々タイプに分かれ研究されています」

「はー、土木建築と似たような感じだな。自然のものを利用しようとするところとか」

「はい、そのような理解の仕方で構いません」

「技術ってことは学ぶことができる訳だ」

「はい、私達の国では教育の一環として国民は魔法を習う事を義務

付けられます」

「就学率のいい国なのか・・・意外だぜ・・・・」

「まぁ、この国は魔法への依存度が高いですからね。マナが他の国とは段違いに濃いですから、自然とそれをコントロールする技術も高まるわけですよ」

「なるほどなぁ。ところで魔法を習うってことは学校もあるのか？俺は何でそこで習わないんだ？」

「学校はありますよ。姫様の意向で私も講師としてたまに教えに行きます。それとあなたは救世主ですから、特別英才教育で短期修学を目指してもらえます。こちらの事情も切迫してますから」

「えーめんどくさ。ん？じゃあさ、今日俺の戦術の訓練してくれたクルーネ・・・？だったか？あいつは魔術師なのか？」

「ああ、クルーネさんは魔導騎士ですね。魔術と魔導の大まかな違いなんですが、魔術は個人の力量を高める格闘術って感じです。魔導は必要な目的に合わせて道具を作る職人って感じです。魔導騎士は、己の武器や鎧に魔法を付加させることでその戦闘力を底上げするんです」

「なるほど、魔術師は格闘家で魔導師は技術士か」

よくできたものだ。
ここまで魔法と言うものが利便性があるなら、俺の世界の文化とは大分違うだろうな・・・。

そこで一抹の不安が過る。
今まで見えた部分は中世ヨーロッパ並みの文化レベルように思えた。
中世ヨーロッパって衛生観念とか無いに等しいと聞いたことがある。
いや、でもトイレはあったな。てことは下水とかはあるのか？

「なぁ、トイレはあったが風呂はあるのか？」

「？そんなの当たり前じゃないですか」

「あ、そうなのか」

ちょっと安心した。
風呂はあるのか、さすがに身体を流すぐらいはしたいからな。

「あ、もしかして衛生観念とかの心配してます？」

「道端にウンコ落ちてたらトラウマものだな」

「む、舐めないでください。フィールメトの衛生観念は各国一です。
いいですか？まず――――――」

そこから長々と文化面に関する説明を受けることになった。
結果から言うと、俺もそこまで下水とかにくわしい訳じゃないので
比較することはできなかったが、少なくとも現代日本にも劣らない
文化レベルを誇っている事がわかった。
すげぇ、改めて魔法すげぇ。

異世界すげぇ。
そうして時間は過ぎていった。

「本格的な魔法のお勉強は明日からです。今日はこれで終わりです」

「おっけぇーありやたしたー」

むむ、なんかすごく素直に聞いてましたねこの人。
今までの態度の分なんか恐ろしいですね。
隣で頭を悩ませる救世主さんは、ハッキリ言えば変態です。

『お待ちしておりました、救世主様』

『すいません、ここはどこでしょうか』

『ここはあなたの世界とは違う世界です。勝手ながら、力をお借りしたくて召喚させてもらいました』

『あ、そうなんですか。結婚してください』

『・・・・・・・んんんんん？』

『ニコニコ』

『は？いえ、その・・・・。すいません、なんて言いましたか？』

『俺と結婚しようぜ』

『あなたは何を言っているんですか』

『いーじゃーん結婚しようよー』

『・・・・ちなみに理由をお聞きしてもいいですか？』

『え？面』

『・・・・ふざけてます？』

『おい間違えるな・・・・・緊張して漏らしちまっただけだ・・・』

『・・・・・・・・・うぇえええ！？』

『いや・・・何か穴に落ちて視界が開けてみたら美人がいるんだもんよ・・・そりゃ緊張するわ・・・』

『だからって普通漏らしますか？！』

『ちょっと水っぽいな』

『聞いてませんよ！？』

『お陰でカッコ付け過ぎだぜ、下半身がカッコつかねぇからな・・・・！』

『本当にこの人を召喚してよかったんでしょうか・・・？』

あの後は着替えなどに余計な時間を食わされた上に、謁見の間では姫様の前でとんでもない醜態をみせてしまった。
本当に、なぜこの人が救世主として世界に選ばれたのか疑問だ。

「は、大事なことを聞き忘れていた」

「え？何でしょうか？」

「魔導師って変身とかする時脱がないの？」

「脱ぎません」

「魔術師は？」

「脱ぎません」

「なん・・・だと・・・・！」

・・・・・・・・・本当に何故なんでしょうか。
この人の言動を聞いていると本気で頭痛がします。

「ふざけるなよっっ！！！！」

そうやって私がため息をつきながら頭を抱えていると、突然救世主さんが大声を出し立ち上がりました。
本当に唐突だったので思わず杖をギュッと握ってしまいました。

「ど、どうかしたんですか？」

「どうしたもこうしたもあるかっ！間違っている、この世界は間違っているぞ！！！」

む、まだこの世界に来て2日も経っていない異邦人だというのに、ここまで強く否定される筋合いはありません。
少し、お灸据えないといけないようですね。

「あなたに――――」

「いいかよく聞けルカ子！！！」

「ひゃあぁあああ！？」

か、肩を抱かれて引き寄せられました！？
ししししししししししかも顔ちかかかかかかかかかかかかかか！！？？？！
なんですか？！
なんでこうなってるんですか！？
しかも・・・はっきり見ると救世主さんの顔って結構・・・・。

「魔法少女は変身する時裸になるだろうがっっっっっっっっっ！！！！！！！！！！！！！！」

「・・・・・・は？」

・・・・・そのとき、空気が死んだ気がします。
この人の頭の中は本当にどうなっているんでしょうか。

「というわけ脱いでくれよ」

「焼き尽くしますよ」

「いいぜぇ・・・俺の身体は何故か燃えなかったからな・・・その

程度の抵抗で俺を止められるか・・・？」

「最終的にはこれで刺します」

そういって私は懐から召喚用魔方陣の時に使うナイフを取り出します。
召喚獣は魔導師にとって必要不可欠です。陣を刻んでる間に襲われでもしたら目も当てられません。
しかし召喚には対価として血を使いますからね。だから傷つける為にはナイフは必須です。
ナイフを見て少し冷静になったのか、救世主さんは大人しく引き下がり頭を下げました。

「すいませんでした」

「いえ、私もちょっとムキになりました。すいません救世主様」

「・・・・・・それやめねぇ？」

「え？」

下げた頭をあげた救世主さんは不満げな顔でこちらを見ています。

「だぁらさ、その救世主様ってやつよ」

「・・・しかし」

「俺はよ、この前まで普通にガキだったんだよ。世界つまんねー学校つまんねーっつってバカやってたガキだったんだ」

ベッドに腰掛け、今度こそ真面目な、どこか遠くを見つめるような顔した救世主さんが言いました。

自分は、ガキだったと。

・・・・そうでした。

今まで彼の態度で気にする余裕もありませんでしたが、彼は突然私の手によってこの世界に連れてこられた少年でした。

私はその事実を、彼の表情を見てようやく思い出したのです。

「だけどよ、俺この世界に来た時、正直舞い上がってた。本当はとっとと帰って飯でも食って、妹の愚痴を早く聞いてやらなきゃいけねぇってのによ。俺は嬉しかったんだ」

彼の居た世界に家族がいた事を初めて知りました。

考えてみれば当然のこと、他国の救世主によると向こうの世界は戦争は存在するものの、ほとんどの国は平和に暮らしているらしい。

彼の事情を憚らず、勝手にこちらに呼び寄せた事に罪悪感が沸き上がった。

「俺は特別な何かを求めてたんだ。俺達には親がいなかったから、いつも虐められたり理不尽な目にあったりもした。だから、そんな物を吹き飛ばせるような特別が欲しかったんだ」

彼が語る想いを、私はただ静かに彼の傍で聞いていました。
私は、この人を呼び寄せた責任がある。
そうせざる得なかった、なんて理由で割り切って切り捨てるほど、
私の精神は弱くないと信じたい。
妹を残してきた彼の眼は、今まで辛いことを経験してきた彼の眼は、
とても悲しそうに、虚ろに見えた。

「ここに呼ばれた時、確かに俺は特別になれたはずだった。憧れてきた、ヒーローになれたはずだった。でも、今日のあの騎士さんとの訓練で分かったんだ。恐かった。あの剣がすげぇ恐かった。だから俺は、ヒーローじゃねぇ。救世主なんて大それたもんじゃない。もっと、弱くて、情けない、そういう奴だったんだ」

「・・・・・・・」

私は、この人になんて言ってあげればいいんでしょうか？
たった二日しか過ごした事のない彼に、私の言葉なんて届くんでしょうか？
召喚から見てきた姿とは、まるで似つかない彼を私はどうしてあげればいいんでしょう？

「だからよ、俺の事は救世主なんて呼ぶな」

「・・・・・・・では、クトウと呼びます」

答えはわからないままだったが、私は彼の手をそっと握った。
彼の目を見て、必死に言葉を探して絞り出した。

「もっとも簡単で難しい魔法は言葉だと、お師匠様から習ったことがあります。言葉は意志を伝え理解を促す為に、魂が宿るそうです」

「・・・・・・・」

彼は不思議そうに、私の手を見ました。
彼の手から伝わる体温を感じると、なんだか心が温まりました。
しかし、言葉を紡ごうにも思いつきで話している為、この続きをどう話していいかわかりません。
ど、どうしよう。

「で、ですからですね。私はクトウという名前に、特別な意味を持たせる為に貴方に魔法を教えるんです。こちらの事をまだ何にも知らない貴方にできる事がないなんて百も承知です。だから、貴方が落ち込む必要なんてなくてですね・・・えっと・・・」

ああ！？
もうなにを言ってるんだか訳がわかりません！？
うう、実は人と喋るのはあんまり得意じゃありません・・・・・。

「く、くはは、はっはははははははははは！！！」

救世主さんがおかしそうに笑いだしました。
うう・・・恥ずかしい・・・。
自分の頬が赤くなっているのがわかります。
ひとしきり笑った後、救世主さんは私の頭をクシャリと撫でまわしました。

「あんがとよ、楽になったわ。うん、だな。俺はまだダメだな」

そう言って、私の手を取って立ち上がる救世主さん。
あ、あれ？なんだか妙なことになってます。

「俺、ダメだけどさ、がんばるからよ。よかったら、俺が強くなるまで俺の傍にいてほしい」

「あ、あの、救世主様」

「おい、自分で言ったろ？俺はクトウだってよ。救世主なんて呼ぶな」

「あの、えっと」

その微笑んだ顔を、私は何故かまともに見る事が出来なかった。
だけど、催促するように手を握る力を強めるので、顔を見ないまま口をゆっくり動かした。

「わかりました。・・・・・・クトウさん」

「おっす。よろしく頼むな、ルカ子」

「・・・ルカ子はやめてください。私の名前はルカトエーゼです」

「いいじゃん。言葉には魂が宿るんだろ？なら、俺はルカ子って言葉に特別な意味を持たせてんの」

「むー・・・」

そう言われると、ちょっと否定しづらい。
あんまり納得できませんけど。
ふと窓を見ると、いつの間にか夕暮れも過ぎ夜の星が空を覆っていた。

「お、もうこんな時間か・・・・」

「そうですね。明日は実習も兼ねて外に出ますから、しっかり休んでください」

私は握られた手を離し、肩に掛った杖を持ち直しながら口早にそう告げた。
そのまま部屋を出ようとすると、後ろから声がかかった。

「おやすみ、ルカ子」

「・・・・・・・おやすみなさい、クトウさん」

振り返る事無くそう言って、私は部屋を出た。

「・・・・・・はぁ」

握られた手の感触を思い出し、ついでに彼の真面目な顔を思い出す。少し高鳴った鼓動に戸惑いながら、自分の部屋に戻ってベッドの上で今日の事を振り返っていた。

「・・・クトウ、さん」

自分と同い年である異世界から来た少年の名前を呼びながら、ゆっくり眼を閉じた。

## お勉強会（後書き）

なんか調子よく書けたな。

## 初めてのモンスター。保護者同伴（前書き）

始まるよ～

## 初めてのモンスター。保護者同伴

今日は楽しいモンスター見学会。
ようやく城の外に出られることに俺のテンションはウナギ登りだった。

「なぁなぁ！お菓子は何円までオーケーなんだ？バナナはおやつに含む？あ、シートがねぇじゃん。上着でいいか？」

「・・・・・・・あの」

「え？なに？あ、お前はちゃんと動きやすい服装にしろよ。じゃないと歩く時不便だから」

「いえ、そうじゃなくてですね。クトウさん、準備は昨日段階で頼んでありますから終わってます」

「なら早く行かないと！外出たい！外出たい！」

「・・・・・・欲求と目的が逆になってる」

レッツモンスターピックニック！

「・・・・・・」

あの後何故か見送りに来ていたお姫さんからお弁当を受け取り「死ななないでね」なる励ましの言葉を受け取って城下街へ出た。
意外と人が多い事に驚いたり、ルカ子が街のアイドルのように可愛がられている事を知って驚いたり、見上げるほど大きな壁がぐるっと街を覆っていて、それを作ることを提案して実地したのがルカ子のお師匠様らしいことに驚いたり、・・・・・・驚いてばっかだな。
とにかく新鮮な事がたくさんだった。
門が開かれ、外の景色が目の前に広がるともう絶句した。
ここまで壮大な森を、日本では見たことが無かった。
富士の樹海とか行けば別なんだろうが、あいにく俺はシティー育ち

だ。
街の外に出た記憶なんて遠い昔母にディズニーランドに連れて行ってもらったくらいだ。
俺の母が元気だった最後の記憶でもある。
・・・・・・・やべ、ちょっと汗が。
さて、長々と回想してみたが現在の状況を確認してみる。

「・・・・・・・」

グルルルル・・・・・・
フゥゥゥ・・・・・・・・

周りを囲む狼っぽいけどそれよりもちょっとデカくてエグい顔をしたモンスターの団体。

「オーケーオーケー・・・・・」

・・・・やべぇ。命が。
あれ？なんでこうなったんだっけ？
・・・・ああ、わかってるよ。ちょっとテンション上がり過ぎて勝手に先行して行動してたらいつの間にか一人になって迷っちゃったんだ。

『ひゃーはー！緑がいっぱいフゥ～～～～～～！！！』

『ちょ！？勝手に動き回らない出くださ～い！』

バカッ！俺のバカッ！
お陰で狼っぽいモンスターの群れに囲まれちゃったじゃないか！

ゴフゥ・・・ゴフゥ・・・
ハッハッハッハッハッ・・・・・・

みなさん今にも襲いかかってきそうなほど興奮していらっしゃいます。

「・・・・どうしよう。森に入った瞬間レベルを無視した強モンスターが現れて死亡とかクソゲーくさいな」

・・・・・抵抗できそうな武器はさっきそこで拾った腐って倒れていた標識。

「くそっ、いいぜぇ・・・こいよ犬っころぉ！全員去勢してやらぁ！」

恐怖が燻り身体が震えるのを大声をだして振り切り、とにかく近づけさせないようにメチャクチャに標識を振り回した。

「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

パクッ

「おっ？」

バキッ！ペッ！

背後から近寄っていた狼モンスターの一体が、振り回していた標識を器用に噛みつき、あっさりへし折って捨てた。
手元に残ったのは手首程の長さも無い苔の手触りのする木の破片。

ガゥアァアアアアアアアアアアアアア！！！

「あ、これ死んだ」

俺の冒険結構早く終わったなー美衣泣かなきゃいいけどなー、と脳裏でそんなことを考えていると、

「伏せてください！！」

ここ2日ずっと聞いてきた声が聞こえた。
迷わず手の木片を放り捨てて地面に頭を抱えて伏せた。
頭上からモンスターたちの甲高い悲鳴が聞こえる。
だが、俺は目を瞑って、頭を抱えてそれが過ぎ去るのをすたすら待った。
爆発音や、強風が上がるたびに、モンスターたちの声が確実に減っていった。

「大丈夫ですか、クトウさん」

こちらを気遣う声に俺は頭をあげると、杖を持つ典型的な俺の魔法使い像を裏切らないその姿に、俺は、俺は、情けないけど、安心した。
黙って立ち上がると、ルカ子も黙って俺の服に付いた土を払ってくれた。
当たりを見まわすと、焦げたり切り裂かれたりした狼モンスターの死体の山。
道路で引かれたネコの死骸くらいは観た事あるけど、これはまた別の意味で胸糞悪くなった。

「・・・・・やだ、肉の焼ける匂いがする。ジュースィー・・・」

「クトウさん」

ルカ子がこちらを見上げている。
俺はそれを気まずくなりながら見返した。

「これが、私達の世界の日常です。他の国はここほど頻度高くありませんけど、モンスターの被害は少なくありません」

「俺もまさか歩いて十分で死亡フラグ建つとは思わんかったわ」

「勝手に行っちゃうからです」

「はーんーせーいーしーてまーす」

「本当に、心配しましたよ」

今度はこちらの手を握って、その意思を訴えてくる。
う、これはガチで反省だ。流石に俺が悪い。

「それに、あなたは分かっていますか？救世主の、その意味を」

「・・・・・・」

「私達国家魔導師や魔術師は、己の人生を、命をかけて国を守護することを義務としています。この世界に居れば、大小違わず、業種に関わらず命の危険が付きまといます。その危険から命をかけ人々を守ることを、私は選んで納得しています。だけど、救世主は違い

ます」

握る力が強まった。
どんな表情をしているのか、俯いているので分からない。
しかし心成しか、その声は震えているように思えた。

「勝手に連れてこられた時点でその存在は確定します。事情も心構えも関係なく、世界の脅威を排除する為に存在を使い潰される。あなたは、それを覚悟できますか？」

溜まっていた何かを吐き出すような、その苦しそうな声。
必死で訴えてくる彼女の姿を、俺は黙って見下ろす。
そして、考えた。
俺は、命を、人生を掛けられるだろうか？
妹を残してきた状態で？まだ、こんなに戦う事にビビってるガキなのに？
考えて考えて考えて考えて、めんどくさくなった。

「もし帰る方法があるのら、私は全力であなたを――――――――」

「スットプ」

「むぐっ！？」

取りあえずその口を塞いでみた。

これ以上聞いてるとなんか悪いことした気分になるからな。

「おめ、俺の事を勝手に決めようとしてんじゃねーよ。それによ、昨日言ったろ。俺を強くしてくれって」

「でも、いい事なんてないですよ？モンスターよりも恐ろしくて辛い目に会うんですよ？」

「んな理由でｗｗｗｗ今さらｗｗｗｗビビんねーよｗｗｗｗ」

驚いたように見上げるルカ子の頭を、俺はグシャグシャに撫でた。撫でるというより掻きまわした。

「おらおら、とっとと魔法教えろよ。じゃねーとこのまま猫可愛がるぞごらぁ」

「うにゃぁあああああああ！？痛いです痛いです！」

ドン、と俺を突き飛ばして警戒するように離れるルカ子。若干涙目で俺を睨んでいる。

「もう、心配して損しました」

「ハハ、照れるぜ」

「褒めてません、呆れてるんです」

はぁ、と大きくため息をついたルカ子。

「モンスターの処理、手伝ってくださいね。このまま放置しておくと疫病が出ちゃいますしね」

「りょうかーい」

始めての異世界ピクニックは、ちょっと成長したように思います、まる

おまけ

「あれが救世主か・・・顔はいいけど・・・。なんか田舎者っぽいな」

「ああ、あちこちの店に突撃して回っては奇声をあげて喜んでるからな」

「ルカトエーゼちゃんも大変だなぁ、救世主の教育係に任命されたんだろ？」

「姫様の意向だそうだ。確かにルカちゃんは面倒見いいしなぁ。くそ、うらやましいぜ！」

「我々『ルカトエーゼを見守る会』としては目を瞑れない問題だな」

「ガハッ！！！」

「どうしたサム！？」

「あ、あれを見ろ・・・・・」

「あれ・・・・？なっ・・・・・！？」

「あの男、ルカちゃんの手を握ってやがる・・・！？」

「しかもルカちゃんも振り払わない・・・、つまり満更でもないっ

てことか・・・！」

「そんなバカな？！あの口下手なルカちゃんがこちらに来て数日しかたっていない救世主に気を許しているというのか！！！」

「くそっ、あの野郎・・・。どんな姑息な手を使ってルカちゃんを誑かしやがった・・・！」

「許せねぇ・・・、これは許されざるぞ・・・！」

「今日はたまたま実習らしいからな、街を自由に行き来できるようになるにはまだしばらくかかるだろう・・・」

「く、待つ時間は辛い・・・！あんなクソ野郎を長い時間ルカちゃんと一緒にいることを許容しなくちゃいけないのか・・・？！」

「くそっ・・・殺してやる・・・救世主・・・貴様は許さない。絶対に、だ」

「そうです！ルカトエーゼ様にあんなゴミクズ野郎と四六時中一緒なんて私が許しません！」

「ネリアちゃん！」

「ネリアちゃんキタコレ！これでかつる！」

「私は王宮魔術師ですからね、奴のいる王宮への出入りはお茶の子さいさいです！」

「頼めるか、同志よ」

「やらいでか！」

「任せたぜネリアちゃん！」

「ふふふふふふふふ・・・・・待ってやがるです救世主・・・・」

「あれ？なんか寒気がする？裸で寝たからかなぁ・・・・？」

## 初めてのモンスター。保護者同伴（後書き）

毎日更新できるとは、調子いいな俺。

## これは俺のヒロインイベントだろう！（前書き）

いろいろ暴走してきた作者です。
当初の予定を見失ってるｗｗｗ

**これは俺のヒロインイベントだろう！**

「おるぁああああああああああああ！！！」

「ふん、大ぶりだな」

今日も今日とて訓練の日々。
半ば強制的とはいえ、今のところ不満に思う事は無い。
どうやら俺は頭を使うより身体を動かした方が性に合っているようだ。
なんせ学校なんてサボりまくってたからな！
仕方ないんだよ！生活費稼ぐためにはバイト増やすしかねーの！
それはそうとクネール姐さんから棒貰って振り回してるけど、当たる気がしねぇ。
フルボッコにされないだけマシかもしれんが、避けられるたびに一回ぶん殴られる。

「ほれ、授業料だ」

「ごはっ！！？」

数メートルほど転がる。
喧嘩はしたことあっけど、ここまで痛いのもボコボコにされんのも初めてだ。
だが、俺はここで止まるわけにはいかねぇ。
負けるのは、俺が負けるのは美衣の涙と我儘だけだ！

何と張り合っているのかはわからんが、とにかく俺はがむしゃらにクネール姐さんに齧り付いた。

「ま・・だまだぁあああああ！ぜぇええい！！」

「・・・！ほう、今のは中々いいぞ。ご褒美に貰っとけ」

「があっ！？」

くそっ、せめて、一発！
一発でいいから防がせるか、当てる！

「ふむ、もうこんな時間か。よし、次最後だ。本気でやるから防ぐなり避けるなりしろ」

「・・・！」

クネール姐さんが力みなく木刀を上段に構えた。
その威圧感に痛みも忘れ膝に活を入れて、タイミングを待つ。
ぜってぇええええ倒す。必ずカウンター入れてやる。
もう腕も上がらねぇからな。受けるしかない。
上等だ、やってやる。

「・・・・カウンターか。おもしろいやってみろ」

「吠え面かかしてやんよ」

言葉と同時に、ちょっとだけクネール姐さんの腕が揺れた気がした。
それを俺が理解する頃には、身体が動いていた。

バシィィイイン・・・・！

乾いた音が鳴り響き、俺とクネール姐さんの動きが止まった。
俺の棒はクネール姐さんの顔の隣に付きだされていたが、姐さんの木刀は寸分違わず俺の肩を打ち抜いていた。

「が・・・あ・・・・・」

「・・・・・・」

棒を取り落とし、右肩を抑えながら前のめりに崩れ落ちる。
痛いには痛いが、もはや痛がる体力も無くただ深呼吸を繰り返す。

「お疲れ様です、クトウさん」

「ぜぇ・・・ありやとっうっぷ・・・げほ・・・」

「喋らないでください。相変わらず、無茶し過ぎですよ」

「・・・・早く強くなんねーとヒーローになれねーじゃん」
「それでも、です。身体が資本なんですから、大切にしてください」
ルカ子にそう言いながら頭を撫でられつつ、身体のあちこちに魔方陣の描かれた紙をペタペタ貼られた。
訓練が終わるといつも貼られるのだがこれまたすごい回復効果がある。
湿布っぽいが嫌な臭いがしないので重宝される回復魔法陣らしい。
むぅ、なんだか情けないぜ。

「あー・・・なんだ、その・・・良い雰囲気の所悪いんだが」
「ッ！？」

クルーネ姐さんの申し訳なさそうな声に、ルカ子は全力で距離をとった。
杖で顔を隠すように俯いていたが、耳を見ると赤くなっているのが丸わかりだった。
そう、最近ルカ子の態度が当初より軟化しているのだ。
親しくなれた事は嬉しいし、通い妻的な面倒見の良さで不慣れな異世界生活を楽しませてもらっている。
だがここで俺は思った。
あれ？俺って今リア充じゃね？っと。
そう、可愛い女の子と仲良く異世界生活を満喫している俺はフラグ建ってんじゃないか？と。
考えてみれば、今までの人生の苦労やこの前の死亡フラグもこの為

にあったのではないか？と。
俺の時代か。ついに俺の時代が来たか。
ならば善は急げ。

「ルカ子ー聞いてくれー」
「は、はい。なんでしょう？」
「俺がヒーローになったら結婚しようぜ」
「え？いやですけど・・・・」
「えっ」
「えっ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
あれ？普通に断られたぞ？
おかしいな？フラグが建っていたらここはオーケーするはずなんだが。
あ、言い方が悪かったかな？

「俺と・・・ベッドでにゃんにゃんしてください・・・・！」
「言い直してなんでそんな言い回しになるんですか？！そして嫌です！」

「バカな!?実は貴様ビッチだったのか?!」

「それ、もう一度言ったら殺しますよ」

「あ、すいません」

ここまで言われると、フラグはどうやら俺の勘違いだったようだ。
なーんでー、期待して損しちまったぜ。
力を込めてみると動ける程度に回復していた。

「んじゃ、次は魔法のお勉強かー」

「・・・・全くもう、動けるならさっさと行きますよ」

「ゴホンッ!おいお前ら私を無視するんじゃない。まだ評価が終わって無いぞ」

お勉強室兼俺の部屋に引っ込もうとすると、クネール姐さんが大きな咳払いと共に俺達を呼びとめる。
あ、すっかり忘れてたぜ。

「・・・・全くはこいつらは・・・適齢期が来てる私へのあてつけか・・・・?」

「す、すいませんクネールさん!うっかりしてました!」

「・・・・あーいやいいんだ。しかし、お前が誰かとそんなにハキハキ喋るなんて驚いたぞ」

「え？私そんなに、え？」

「なんだ、無自覚か。まあいい、おい坊主」

「なんすか姐さん」

「痛みに身体が慣れてきたからか怯んだり恐怖したりすることはなくなったが、考えもせず突っ込みすぎだ」

「考えるのって得意じゃないっす」

「それにしてもがむしゃら過ぎると言ってるんだバカ者。もうちょっとペース配分や相手との間合いを考えろ」

「うーっす・・・・」

訓練が始まってから続くこの辛辣な評価。
自分がまだまだなのだと実感する。

「だがしかし、最後のアレは良かったぞ」

「！」

そう言って兜を脱ぐクネール姐さん。

おお、姐さんの鎧の下の素顔始めてみた！
やべぇ！すげぇ美人だ！ピシッと空気が張り詰めるほどの氷の美女って感じ！
少し汗ばんだ感じがまた大人の女の色気っぽくてすげぇ！

「身体が意識せず動いたようだが、まさかここまで早く私の達筋に馴れるとは思わなかった」

「・・・・・・」

ルカ子は赤髪で眼がブルーっていう対照的な色の違いが映える幼さの残る可愛らしい顔してたが、クルーネ姐さんは金色の髪にエメラルドっていう美人の代表格のような外国人の人形のような造形もまた・・・・いい！

「センスに任せて動く事を否定はしない。経験が技を凌駕することもな。だが戦術や戦法は、安全や利便性があるからこそ学ばれている物だ。だからお前が短期間で強くなる為の最低限の戦術を身体に教え込ませようとしている、しかしお前が憶えようとしなければ私の努力が無駄だろう。今回のカウンターもまぐれで反応できたようなものだ。これからはこちらの言う事をちゃんと聞いてやれよ。わかったか？」

「つまりここは固定ルートではなくハーレムルートを目指せという事か」

「お前は一体何を聞いていたんだ！？」

「男の夢はハーレムって決まっているだろうがっっっっっっ！！！！！！！！」

「知るか！！！！」

木刀でぶん殴られて怒られた。

ルカ子に頼んだけど回復魔方陣は貼って貰えなかった。

魔法授業の為にルカ子と共に部屋へ戻ろうとしていた時だった。

「ようやく、ようやく見つけましたですこのインポ野郎！！！」

頭上からかなり失礼な声が聞こえた。

「・・・・・・・・」

「む、黙ってないでなんとかいうのです！」

「あ、俺なん」

「お前以外に誰がいるというのですか！！」

石造りの屋根に仁王立ちしている紫髪のツインテールの少女は、どうやら俺に用があるようだ。

「ここであったが百年目です！！ルカ様から離れやがるですこの顔面性器！！」

「誰が顔面性器だ、パンツ脱いでテメェのぬんこ曝せ。つーか犯らせろ」

「なな！？なんて卑猥な・・・・！ルカ様を誑かしているのは本当のようですね・・・！」

「誑かしている？何の話だ」

まったく心当たりがない。
言掛りも大概にしろってんだ。

「うるさいです！お前がルカ様に色目使っている事なんてお見通しです！」

「俺はお前のパンツしかお見通しじゃねーわ」

この高さと角度でスカートなら丸見えだよね。
ふむ、レースの黒、か。

「ッ！！！！！・・・・・・座ったら見えませんか？」

「どうせなら降りてこいよバカ」

「くっ・・・！お前の言う事を聞くのは灼ですが、今は従ってやるのです！そこで待ってるのです！」

そう言って少女は屋根から姿を消した。
ルカ子の名前を呼んでいたってことは、ルカ子の知り合いだろうか？

「なぁルカ子、あのバカは誰だ」

「ネリアちゃんです。私の後輩の魔術師なんですけど・・・・えっと」

「はーん、後輩ねぇ」

道理でチッコイ訳だ。
ルカ子と同じぐらいしか身長がなかったからな。
ま、どうでもいいな。
早く魔法使えるようになりてぇし、とっとと部屋に戻って勉強しなくちゃな。

「じゃ、部屋に戻ろうぜ」

「え？でもネリアちゃんが・・・」

「ほっとけよ、それより私の魔法の習得の方が重要です」

「えっと・・・分かりました」

ルカ子が頷き、今度こそ部屋に帰ろうとした時だった。

「むぅぁあああああぁぁぁあつっっっうううってぇえええええええええええ！！！！」

前方の廊下から全速力でこちらへ向かってくるツインテール少女。ち、先を越されたか。

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・・！く、油断も隙もならねぇ奴です！」

「心配するな、俺のケツ穴は緊張するとすぐ緩くなるからな」

「誰もんなくだらねぇー話なんて聞いてねぇーです！！」

「んだとガキコルァ・・・てめぇの穴もユルユルにしてやろうか！？」

「わっ！て、手をワキワキさせながら近づいてくるです？！気持ち悪い、不気味です！」

「ちなみにこの手は昨日賢者タイムしてから一度も洗ってないぜぇ・・・・？」

「本格的にこの男最低です！？イヤーーーーーーーー！！！！！ちょ、こっちくんなですーーーーーーーーーーーーーー？！！！？？！」

手を突き出してツインテールを犯そうと迫ると、ツインテールは手早く何か紋様の刻まれた手袋を嵌め、俺に強烈なリバーブローを放った。

「死ねっ！女の敵っ！！！」

「ごふぉっ！！？」

少女のモノとは思えない俺を呻かせるほど威力を持った拳が、続けて顔面を抉った。
何とか倒れる事だけは避けると、距離をとる為一旦後ろに転がるように下がる。

「フー！フー！」

「オーケー！分かった落ち着けって！ルカ子！何とかして！」

「・・・・・いや、ちょっと近づかないでください」

「ジーザス！！！」

唯一の味方に裏切られた。しかも道端に転がる石のように無感情なフラットが消えた目でこちらを見ていた。ひでぇ。

「粉々になりやがれです！！」

世界の理不尽を嘆いていると、ツインテールが大きく跳び上がって向かってくる！
避ける事ができるほど、訓練のダメージは抜けきっていない！
せめてもの防御に腕を交差させる。

そしてツインテールが落下の勢いを利用した拳が激突しようとした時、

「そこまでです」

「なっ！？」

空中に描かれた魔方陣が、ツインテールの拳を防いだ。
驚いたように後退するツインテール。

「ルカ様？！何故です？！何故そのゴミムシ野郎を庇うんですか！！」

「ネリアちゃん、わかってるでしょう？この人は救世主なんですよ？余計な怪我をされる訳にはいかないんです」

「そんな・・・！でも変態なんですよ！！」

「ええ・・・それはまぁ・・・・」

なんだか歯切れの悪くなるルカ子。
おい！がんばれよ！そこは否定して頑張れよ！
変態だけどさ！女の子大好きだけどさ！
仕方ないじゃん！俺もお年頃なんだよ！

「なら！救世主なんていらないくらい、私が頑張りますから！！そんなゴミムシの教育係なんてやめてください！！」

「はぁ・・・。ネリア・ブロン・クイッシュローゼ、身の程を弁えなさい」

「っ！！」

底冷えするような事務口調へ変貌するルカ子に、怯んだように身を引くツインテール。
お、形勢逆転か？

「此度のグリムリバーより現れた魔物特性、忘れたわけではないでしょう？あの情報が本当なら、魔法を根幹とする我が国にとって転覆もありえる脅威ですよ？」

「しかし・・・！」

「あなたの一個人の感情で、国を危機にさらすことはできません。それに・・・・・」

チラッとこちらをみてすぐさま視線をツインテールに戻すルカ子。
え、何？俺なんか話し合いの邪魔になるようなことした？

「救世主・・・・、クトウさんは私の生徒です。いつかの貴女と同じように」

「っ！？」

「だから、私が彼の教育係を辞めるなんて事はできません」

「うっ・・・！」

そのハッキリとした言葉に、ツインテールは俯き肩を震わせながら後ずさる。
反論しようと顔を上げるもその強い視線に何も言えず、再び顔を俯かせた。
しばらくすると、肩の震えも大きくなり、遂にはボロボロと涙が零れ始めた。

「ふっ・・・う・・・うう・・・うわぁあああああああああああああああああんんん！！！お、おぼえっ、おぼえとけですぅぅぅうううううううううううううううう！！！」

「おとといこいよ～っと」

泣きながら去っていくツインテールの背中に、世界のフィンガー・ファックユーをくれてやった。
しかしちょっとかわいそうな気がしないでもないな。
今度会ったらセクハラは控えてやろう。

「では行きましょうか」

「・・・・俺が言うのも変だが、あれほっといていいのか？」

「・・・・仕方ないじゃないですか」

「いや、まあそうなんだけどよ・・・・」

「あの子はいい子ですから、分かってくれますよ。・・・・・・・・
それに、私はあなたに魔法を教える事をやめたくないです」

「えっ」

今すげぇ嬉しいこと言われた気がする。

「なぁ今――――」

「い・き・ま・す・よ・？」

「――――――はい・・・・」

しかしぎもんはもくさつされてしまった！
・・・・・照れてるってことはさっきと同じように隠しきれてない耳が真っ赤だから分かるんだけどさ。
ま、いっか。
地道にこの世界に馴染んでいってる自分は、少しは変わっているだろうか？
ツインテールにも負けちまったしなぁ。

だが、目の前を早歩きする照れ屋で口下手な教育係の下でなら、俺は変わっていける気がした。

おまけ

「今日からお前の魔法戦闘の教師をすることになったネリア・ブロン・クイッシュローゼです。足腰立たなくなるまでビシバシ鍛えてやるので感謝するです！」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・はぁ」

「うぉらぁ！返事しやがれＥＤ！」

「ふざけるなよペチャパイがぁ・・・。ルカ子の後輩を名乗るならせめて貧乳程度の胸を養いやがれ」

「なっ！？ネリアはペチャパイではないです！」

「あぁ？いいか？貧乳と寸銅はちげぇぞ？わかるか？」

「こ、この変態は・・・・！そこに直れです！魔法戦の真髄をボコボコにして教え込んでやるです！」

「上等だツインテールゴラァ！月に代わっておしおきしてやんよぉおおおおおおおおおお！！」

「パ、パンツ一丁で突っ込んできやがるなです！！？」

「・・・・・・・・これも姫様の策略なんですか？私には楽しんでる様にしか思えません・・・・」

「まぁあああああああああああああてぇえええええええええええええええ！！！止まれぇ！レイプすんぞゴラァ！！！」

「いやぁあああああああああああああああああああああああルカ様ぁあああああああああああああああああああああああああ！？？！」

「・・・・・・はぁ」

## これは俺のヒロインイベントだろう！（後書き）

しばらくこっちの更新が続くかも

## 修行イベントとかはサクサク省かせていただく！（前書き）

いきなり強くなるのはおかしいという理屈があるけど、チマチマした描写だけ綴ってもおもんないよね。
だからこその、キンクリだ。
一気に二ヶ月後まで飛ばさせていただく！
ドタバタした日常もいいけどしつこいと空きるしな！
別にめんどくさくなったわけじゃないよ！

## 修行イベントとかはサクサク省かせていただく！

「さて、俺がこの世界に来て2ヶ月経った訳だが」

「正確には1ヶ月半ですけどね」

「もうそんなに経ったのか。・・・・・そんだけありゃあ、一回くらい勝てると思ったんだけどなぁ」

どうも、間部功刀です。
現在王宮備えつけの訓練場に大の字になって寝そべっております。
具体的にはあちこち焼け焦げたり切り刻まれたりしたデコボコになった焦土のような場所に倒れこんでいます。
思い返せば異世界に来てからの日々は修行ばっかだった。
戦術訓練の度にクネール姐さんにボコられ、
魔法戦闘訓練の度にクソツインテールにボコられ、
魔法授業で問題を間違えるたびにルカ子に予想以上なスパルタなお仕置きにボコられ、
後半の総合戦闘訓練では、剣に、拳に、魔法に、ありとあらゆる攻撃でボコられた。
というか、流石に3対1は虐めじゃないかと思う。

「舐めすぎですね。クトウさんに負けてあげるほど、私達の修練は甘くありません」

「ちくせう・・・・」

「はっ！無様です、変態！」

「黙れ寸銅、いつかお前を犯す」

「やれるもんならやってみろです！プ～スクスクス・・・！」

クソツインテールが動けない事をいいことに指先でほっぺをつついてくる、殺してぇ。
くっそー、執拗にこいつだけ狙ってたから一発ぐらいはぶん殴れると思ったんだが、他二人の援護の壁が厚かった。

「ふぅ、よく動くようになった。お前に教えられることはもうないな」

「マジすか」

「ああ、お前人の言う事は聞かないが見た事は覚えるからな。ようやく叩きこめたよ」

褒めてくれるのはクネール姐さんだけっす。
俺、この二人の中で結婚するとしたらクネール姐さんだと思うんだ。
美人だし。お姉さまだし。
ツインテール？あれは女ではない。
この前知ったことだが、こいつの食事は保存食品だけらしい。
何でも俺がルカ子に手を出さないように監視する為に動きながら食べられるものを選んだそうだ。
しかし胡坐かきながらカップラーメンのような物体をすする姿を窓

から目撃した時は、こいつ女捨て過ぎだろと思った。
仕方ないから厨房借りて料理作って持って行ってやった。
最初は頑なに拒否していたが、目の前で嘲りながら食ってやったら意外と食い付き、それ以来夜になったら俺の部屋に来て料理を作ることを要求するようになった。
毎日罵倒されながらボコられてる奴に黙って健康に気遣った料理を作っていた俺は偉いと思う。

「さて、言ってなかったが今日の訓練は卒業認定試験の試験資格があるかどうかを確かめてたんだ」

「マジすか」

けど負けちゃったしなぁ。
次まで持ち越しかなぁ。

「私は及第点だと思うが？」

「ええ、調子に乗ると行使が甘くなりますけど、概ね魔術の方は安定していました」

「・・・・・もぉうのすごぉーく納得できませんけど、危うく一発貰いそうになりましたからね。合格にしといてやるです」

なんだと。
クソツインまでもが俺を試験資格ありと認めやがった。

一体どういうことだ。

「自分で言うのもなんだが、俺クソ弱いぞ。戦術はヤられた事をやり返そうとしてただけだし、魔法は考えるのがめんどくさいからクソツインの技で勝てれば気持ちよさそうだな～って適当に魔術にしただけだし、それを使った戦闘だって俺はクソツインに一度も勝てちゃいないし、それにだな、俺は・・・・・、俺はまだお前らに触れたことすらないし」

「くどい。とにかく、お前は私の自慢の弟子だ。よくぞここまで耐えたなってことだよ」

「そうですよ。あなたに合った魔法を教える方が貴方の為になりますしね。展開の速さだけなら私よりも早くなってます」

「私が直々に鍛えてやったのに情けねーこと言うんじゃねーです。くっ、確かに地力はお前が上です」

やだ、べた褒めやん。
昨日まで、『下がるなっ！お前逃げ腰になると途端に動きが悪くなるんだから攻めろ攻めろ！』とか、『ダメです。魔術の基本は己のイメージと周囲のマナをどれだけ意識できるか。どんな状況でもそれができるようにならなければあなたの魔術は存在を持ちません』とか、『魔術師を語りたいなら空気のようにマナをコントロールするです！ああもうっ！そうじゃないです！意識し過ぎて足止めんなこのグズ虫！』とかばっかだったのに。
やった、ついに俺の時代が！

「「「だけど、」」」

「ひょっ？」

「まだ合格試験が残っています」

「それを乗り越えられなかったならばっ！」

「訓練濃度数十倍アップサービスを敢行してやろうっ！！」

・・・・先走りし過ぎたっぽい。
うーわー、凄いやりたそうな顔してやがる。
クソツインとクネール姐さんはわかるんだが・・・・・、おい、ルカ子。
何故そんなに満面の笑顔なんだ。
初めてみたぞ、お前の嬉しそうな顔。
・・・・・・・これは死ぬ気で合格しなければ。

「はっ！必要無いな。余裕で合格して今度こそテメーらに一撃入れてやる」

痛む身体を軋ませながら、ゆっくりと立ち上がる。
魔術を本格的に使い始めてから、当初のようにルカ子にペタペタ回復魔方陣を貼ってもらえなくなったため、自己治癒を高める魔術を教わってソレを使うようにした。
イメージとしてはなんだ、血管にマナを循環させるというか、深呼

吸する度に嫌な物を吐き出す感じというか、“己を新しくする”というイメージが必要なのだそうだ。
これを会得するまでロクに動く事も出来ず苦労したぜ。

「せいぜい頑張るのですね、あるいは届くかもしれないですよ？」

「ああ・・・！テメェハカナラズオカシテヤル・・・！」

「ひぃ・・・・！？」

「クトウさん、試験内容は明日姫様が直接謁見の間で発表するそうです」

「あん？姫さんが？」

そういやあの子のあんましあってないなぁ。
ちょくちょく様子を見には来るんだけど、結構忙しそうだしすぐ帰っちゃうんだよなぁ。

「ええ、ですから今日はこれで訓練はお終いなので、部屋に戻ってゆっくり休んでください」

「え？マジで？訓練もうねーの？やったー」

普段はこの後みっちりお勉強だったからな。
いや、マジで助かる。

だって疲れて寝たら焦がされるんだもんよ。

「もう帰っていい？正直フラフラ」

「はい、お疲れさまでしたクトウさん」

「う～すっ。じゃあなールカ子ー、姐さんー、死ねクソツイン」

「上等です！特別訓練補修今から組んで実地してやりますですっ！！！」

全力で逃げた。

おまけ

「・・・・・・行ったな」

「はい・・・・・」

「で？実のところどうだ？」

「どう、とは？」

「おいおい、無駄な問答は好きじゃないのは知っているだろう？坊主の急成長ぶりに付いてだよ」

「・・・・・・正直すえ恐ろしいですね」

「ああ、天狗にならないように徹底的に叩き潰してやってきたが、もはや我々と一対一の時はこうはいくまい」

「奥の手は使ってませんし、負ける気はしませんけど圧倒するのは難しいですかね」

「正にセンスの塊のような奴だからな、思い付きが足付いて歩いているとも言えるが」

「確かに、そうですね」

「おや、最近はよく笑うようになったじゃないか。教え子が育って嬉しいのか？それとも・・・」

「ありえませんですっっっ！！！」

「ネリア、お前坊主を追いかけってたんじゃなかったのか？」

「あの野郎、逃げ脚ばかり速くなりやがるです！挙句の果てには部屋に妨害魔方陣まで刻んでやがったです！めんどくさがりの癖にああゆう小細工ばかり熟卓していきやがるですよ腹立たしいっ！！」

「ははっ、やるようになったな坊主も」

「笑い事じゃなーいでーすー！」

「それよりネリア。お前坊主の成長の度合いをどう思うよ？この中で一番訓練時間が長いお前に聞いてみたい」

「むっ、さっきも言った通り、成長期の男ですからね。地力ではもう私より上です。でも、まだまだ集中力も魔術の組も足りませんから私の方が強いです！」

「それもそうだが、奴の実力は我が軍の中でもかなりのモノになっているからな」

「そうですね、他の人達と訓練させなかったのは正解でしたね」

「すぐ調子に乗るからな」

「です！」

「まぁ、あれだけ鍛えれば明日の試験が無茶な内容で無い限り大丈夫でしょう」

## 修行イベントとかはサクサク省かせていただく！（後書き）

クネール姐さん「お前が弱いのではない。私達が強いのだ」

## 思えば遠くに来たもんだ（前書き）

本当にどうしたんだ俺？
ここまで毎日投稿できるなんて初めてじゃないか？
格言を使ってみたいと思った。

## 思えば遠くに来たもんだ

馬で行くことも、車で行くことも、２人で行くことも、３人も行くこともできる。だが、最後の一歩は自分一人で歩かなければならない。――――――――ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

「・・・・・コクン・・・コクン」

「・・・・・・・・・」

今日は待ちに待った卒業試験！
こいつを合格できれば晴れてあの鬼教官共の手を離れることができるという、俺にとっては是が非でも通過したい門である。
気合いを入れて昨日言われた通り姫様に試験内容を聞きに召喚された日から一度も訪れてない謁見の間のドアを蹴り飛ばしてやってきた訳だが、

「・・・・姫さま！・・・・起きてください姫様！・・・・・」

「ん～・・・・やーのぉー・・・・う・・・ん・・・・・・」

「・・・・・・・・」

お姫様、おネムである。
王様とかが座ってる椅子に丸まって眠っているのを、ルカ子が小声で必死に起こそうとしているがムズがるだけで一向に目を覚ます気配がない。
お疲れだったのかなぁ。

「・・・・ダメです。起きてくれません」

「マンマン弄ってやれば起きんじゃねーの？」

「その時は私が責任もって貴方を殺します」

「サーセン」

でもこのままってのもなぁ。
しかし直接手を出すとルカ子に殺されそうだし、どうしたものか？

「あ、もしかして」

「どうしたルカ子」

ルカ子が懐から一枚の紙を取り出した。

「昨日就寝前に姫様に渡されたんですけど、謁見の間以外では開かないように言われてたんですよ」

「なんですと、して中身は？」

「・・・・・・なん、ですって？」

中身を確認したルカ子がガタガタと震え始めた。
え、何？すげぇこええんだけど。
固まったルカ子の手から紙を拝借し、その内容を確かめた。
そこにはまるで眠る寸前に書いたようなミミズ文字で、

『グリムリバーのモンスターが近隣に現れたのでその処理をお願いします』

「ぐりむ、り、します、しょり、？」

魔方陣を刻む時にこの世界の文字を習ったのだが、お世辞にもそこら辺の成績がいいとは言えない俺では残念ながら紙に書かれた文字を読むことは出来なかった。
グリムって単語は最近聞いたな。
それを処理？
モンスターでも狩ってこいってか？

「姫様！起きてください！これは一体どういう事ですか！？」

「あおっおっおっおっおっおっおっおっおっ」

「あ、そんなに振ったら危な・・・」

ルカ子が寝ている姫さんの肩を持って大きく前後に振る。
この暴挙を許してていいのかと周りの臣下たちを見まわしてみると、皆さん器用に立ったまま眠っていた。どうやら連日の会議に皆さんダウンしたらしい。

「うぁー？んもぉーあーによー？きょーはきゅーせーししゃんおくりだしたらおやしゅみってーいっられしょー？」

「やだ、この娘可愛い」

「言ってる場合ですか！？姫様、クトウさんにグリムリバーより現れたモンスターの処理を任せるとはどういう事ですか？！」

「え、グリムリバーってラスボスっぽい奴がいるとこだっけ。いきなりそんなとこ行かされんの俺？」

「本地へは行きませんがそこから漏れたモンスターを倒してほしいって事です！確かに太鼓判は押しましたけどこんな内容だったんなんて・・・！」

「あーんたたーちがくんりぇんしてるあいにゃにー・・・ついにここにくりゅまでおされてたのー・・・ぐりゅむどりゃーのばかどももしぶってたわりにちゅいにきゅうしぇいしゅをしょうかんしたみりゃい・・・くぁ・・ふぅん・・・」

「グルムドリアが！？そこまで事態が動いていたのですか・・・」

「しょれでーむこうからえんごよーせーがきちゃったんだけど・・・とうとちゅだったからじゅんびがととにょってなかったにょよ・・・きにょうまでかんてつのとっこぉーさぎょーだったんだけど、きげんまでにまにあいしょーにないよのー」

もごもごと話すその姿は非常に萌えだが、可愛い口から飛び出る内容がヤバい。

マジッすか。

修行に励んでいたらいつの間にか世界が滅びかけてたでござる。

あっれぇー？俺以外に救世主っていっぱいいるんじゃなかったっけ？

「皆さん自分達の主要都市を守るのに躍起になってて、大陸全土に広がる侵攻事態を防げてる訳じゃないんです」

「あー・・・自分可愛さに閉じこもっちゃったわけね」

「んでー・・・あともうぉーちょ・・・っとでじゅんびがしゅむからー・・・きゅうせいしゅさんにはしぇんこうしてもりゃってーじかんかせぎけんそつぎょーしけんをうけともらいたいのー・・・もうねたい・・・」

「くっ、相談してくれればもう少し引き延ばせませたのに・・・！」

「それはだめだよー・・・あんたにわ・・げんきゃいまできゅうしぇーしゅのりきりょーをひきのばしてもらわなきゃいけにゃかったわけだしぃ・・・」

「ならせめて私も彼と同行をっ！」

「しょれもむりー・・・いましろではたりゃいてるのってあんたらきょーいくぐみとぉわかいしたっぱしゅうだけにゃのー・・・だかりゃーあんたにはここでじゅーぐんのさいしゅーかくにんとかいろいりょやってもらわにゃいといけないこともおーいしぃ・・・にゃんたってこんかいがはじめてのぐりむばーとのしぇんとうだから、じゅんびだけはしっかりしとかにゃいと・・・」

「・・・・・！」

眠りこけながらも応答を返す姫様に、その本気を感じ取ったルカ子は反論を探すも結局見つからなかったようだ。

うわー・・・この作品始まって以来のドシリアスな展開・・・・。
あんまこういう雰囲気好きくないんだよなぁ・・・・。

「了解、んじゃ先行ってるわ」

「クトウさんっ！？」

「しーんぱいすんなって、お前らがくる頃には終わらせとくからよー」

「そんな話じゃすみません！！教え子をみすみす見殺すような真似をできる訳ないじゃないですかっ！！」

えっ、そんなヤバい話だったの？
いや、ヤバいはヤバいと分かってたけどよ。
どうしよう、いきなり行きたくなくなっちゃったぞ。

（しかし、な。このままこいつにおんぶ抱っこってのも面白くねぇ）

こちらを真剣な眼差しで見ている少女。
心配してくれている、異邦人でクソったれな俺を心配してくれている。
それがハッキリ分かったからこそ、俺は前に踏み出すことを決めた。
俺は強くなったと虚勢を張る為に、俺は守られるだけの存在じゃない事を証明する為に、ここまでの修行の締めくらいは、自分の手で終わらせる為に。

俺は、

「ルカ子、それより重要なのはだ」

「？」

「向こうの国の魔法少女達が変身時に裸になるのかという事だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

この場の空気を、殺した。

ピッ！チュドーンッ！！

「・・・・・・・・・・・・・・スタスタ」

「・・・・・・・・・・・・・・ブスブス」

無言の爆破魔方陣でこんがりウェルダンされた俺は、そのままルカ子が歩き去っていく足音を黙って聞いていた。
というか痛みでそれどころじゃなかった。

「結局見送りにも来なかったなぁ・・・・そっちの方が気が楽だけど」

という訳で隣国グルムドリアへその日の内に出発し、現在要人用の馬車っぽいもので移動中。
馬車っぽいってのは、馬がいなくて一人でにこの馬車が動いているためだ。最初見た時はビビった。
現在森の中を疾走しているんだが、これが以外と揺れないで快適な乗り心地だ。
小国の弱点である人材不足を、こうした無人化によって補う技術は地球でもそうお目にかかれまい。
さぁーて、今回の詳しい試験内容を改めて思い出してみる。

『一つ、フィールメト全軍の到着までの時間を稼ぐことが最大の目的。
二つ、無理をする必要はなく、自分のできる範囲での仕事をこなすこと。
三つ、嫌々ながら隣国という間柄、最も素早く同盟が可能になるグルムドリアの関係が悪化するような行為は控える事。無理なら恐喝かゴリ押しでなんとかするのでこれもできる範囲で。
四つ、向こうの救世主はまだ召喚されて数日と経ってないので仲良くしてあげる事』

・・・・・かなり良心的な国だよなフィールメト王国。
最後の当たりとか姫様に伝えられた時思わず「いい子ッ！！」って撫でそうになったからね。
俺、修行はマジキチだと思うけど、あの国に召喚されて良かったと思うよ。
がんばろう。メッチャ頑張ろう。
じゃねぇと流石に申し訳ねぇよ、命に値するよこれ。
だって他作のＴＳモノとか見ると胸糞悪くなるぐらいエグい展開とか、もうやめたげてぇッ！！と言いたくなるようなヒロイン虐めとかあるんだもん。
しばらくしてから気付いたけど俺の待遇アレらと比べたら天国だよ。

「男としてプライドは完全に粉々だったけどな」

自分より年下の女の子にボコられるって予想以上にＳＡＮ値をガリガリ削ってくれた。
卑屈になったりしたけど、それすら通り越してボコられた。

これはこれでキツイものがあるな・・・・。
そんな事を考えている内に森を抜けたのか、乗り心地が更に緩やかになった。
外の景色を見ようと、窓を覗いてみる。
・・・・・何か窓が赤く染まってる。
えっ、何これ恐い。
フィールメトに戻った後知ったことだけど、この馬車って要人用だから特別頑丈に造られていて、ちょっとやそっとの追突ではビクともしないらしい。
・・・・・・・・・フィールメトこええええええええええ。

「着いた着いた」

グリムリバーモンスター、略してグリモン。可愛くねぇ。
到着した頃には既に月が夜を照らしていた。

「で、俺はどこに向かえばいいんだ？」

グリモンの出現場所から一番近い街に着いたには着いたが、誰も出迎えに来てないのでポツンっと突っ立っているしかない。
おいおい、他国の使者に対してこれは不味くね？
出迎えが遅れるって、時間が守れないってことは信用問題とか以前に人としての問題だろｊｋ。

「あのデカイ塔っぽいとこに行けば偉い奴いそうだな、ムカつくから出逢い頭泥投げつけてやろう」

ジッとしてても仕方ないので、責任者がいそうな場所を適当に探すことにした。
深夜なので街は静まり返り、誰も起きている者はいない。
しかし、人が生きる場所である。
俺が守る場所である。
そう思うと、不思議と何でも無い街並みが、少しだけいい景色に思えた。

「へっ、救世主様のお通りですよ～っと」

ニッ、と月を見上げて笑う。
明日には本物の生死のやりとり行う戦場にいるというのに。
向こうに居た頃には無かった闘争心が、疼いている。
やっべ、テンション上がってきたんですけど。
よし、今からピンポンダッシュならぬトントンダッシュ＆砂かけでもやろう。
そうして俺は、明日命を預かることになる街の住民に深夜にも拘らず迷惑行為を働くのであった。

「もう・・やだよぉ・・・助けてよぉ・・・お兄ちゃん・・・・」

## 思えば遠くに来たもんだ（後書き）

ま、まさかこんな登場のしかたがあるなんて・・・！
俺も今日思い付いたよ。
王道でテンプレっぽいけど、それが一番燃えるよね。

**以外とヤバい状況だったのよ**

「将軍様！グラハム将軍様！」

「どうしたパレム。奴等に動きがあったのか？」

「いえ、それとは全く別の・・・！」

「何・・・？話してくれ」

「それが、謎の人物がこの街に襲撃をしかけたとの情報が・・・！」

「・・・・まったく、誰かは知らんがこの時期に面倒な事をしてくれる」

「既に部隊を編成して行方を追っていますが、片っぱしから被害を拡大させていくので情報が混乱しています！」

「被害の程は？」

「はっ！その人物は落ちない塗料をとにかくあちこちに塗りつけて逃走、人だろうが建物だろうがお構いなしです！」

「は・・・？襲撃ではないのか・・・？」

「私達の手には負えません！将軍のお力がなければ私達なんて大陸最弱ですよ！」

「・・・・・・やはり貴族ばかりのお坊ちゃん部隊では限界がある

な」

「私達には自分達の地位がヤバくならない限り死ぬ気で戦わない自信がありますっ！！」

「・・・・・これが終わったら必ず政変を起こしてやる、老害共一掃してやるっ！」

自分が行動したことすべては取るに足らないことかもしれない。し

かし、行動したというそのことが重要なのである。――――――
―ガンディー

「誘き出されてやってきたか・・・ガンダムッ！」

「何の話だ、私の名前はグラハムだ」

「身持ちが固いなぁ、ガンダムッ！」

「・・・・・貴様が襲撃者か、何者か吐いてもら・・・・」

パチャ・・・・・！

「やはり我が傑作魔方陣ナンバー21、『色によるメイドリーム』の色彩は実に鮮やかだな。ま、ただのペイントボールなんだけどな・・・」

「・・・・・」

おお、見事な鎧を着込んだ騎士っぽい人が顔を青色に染め上げられている。
青一色だから青筋がたっているかどうかは分からないけど、無言で抜きとった剣をみるに相当お怒りのようだ。
徹夜のテンションでやっちゃったのは流石にヤバかったか。
せっかく偉いっぽい人に会えたのに、このままでは話し合いどころか死合いになりそうだ。

「んで俺が何者かだっけ？アレよ、フィールメトから来た救世主」

「貴様が・・・？証拠は」

そうだそうだ、合言葉がいるんだっけ。
荷物の中からメモを取り出す。

「えーと、『人生にはいやなことがいっぱいある。中でも一番嫌なものは、男同士の晩餐だ』だっけ？格言っぽいな・・・」

「・・・・・」

目の前のブルー将軍は、嫌疑の目を向けながらも一応剣を納めた。
俺もメモを魔術で焼却。
ライター程度の火なら熾せるが、これ以上どうやっても大きくならない。
ルカ子曰く、『才能がありません』だそうだ。ちくせう。

「さーて、自己紹介でもしようか？俺間部功刀っ！好きな歌はＤｏｎ'ｔ　Ｓｔｏｐ　Ｂｅｌｉｅｖｉｎ！嫌いなピンク髪のキャラはルイズ・フランなんとか」

「・・・・・グルムドリア軍将軍、グラハム・イベヌ・スラグヴェルエだ。此度の援軍を感謝する。いつ到着なされたのかな、救世主殿」

「おいおい、勘違いすんなよ。ちゃんと上の指示に通りに来たって、でも迎えも来ないし土地勘も無いから無駄に騒ぎを起こせば偉い奴が来るかなぁーって思っただけだっつの」

「・・・・・パレム、救世主殿の出迎えや戦況の説明などは副官である貴様に任せていたはずだが？」

「眠くて忘れてましたっ！」

「何でも正直であるという事は美徳ではないぞ、今月貴様の給料は無しだ」

「そんなっ！あんまりですっ！」

「あぁ？」

「あんまりでぶごぁっ！？」

「別に繰り返さなくても聞こえてんだよ馬鹿なの？死ぬの？本来なら給料抜きじゃすまねぇぞ？てめぇのミスのせいで明日の作業が滞るどころか俺の身体も真っ青だぞ？それでもてめぇ以外に指揮とったりできる奴がこの軍にはいねぇからこの処分ですんでんの。次口答えしたら殺すぞ」

「いえふふぁー」

顔面が腫れあがったパレムなる人物はヘロヘロと敬礼した後、フラフラと去っていった。

ブルー将軍は大いにため息をついた後、真面目な顔で頭を下げてきた。

「すまない。こちらの不手際だ。然るべき代償は、できればこの事態を収拾できた後に」

「おう、代償はそれで明日の作戦に参加することで許してやるよブルー将軍」

「・・・・・・流石に指揮に影響がでるので勘弁してほしいのだが」
「冗談だよ。ほれ、その液体で塗料は落ちる」

もし自分に掛った場合の対処の為に持ってきておいた洗剤をグラハム将軍に投げ渡した。
毒を使う人って解毒の方法も同時に持ってるらしいからな、色によるメイドリームを作った後、訓練時にクソツインに試したらルカ子にボコられて作る羽目になった。
ふざけた術式の割には案外強固に造られてるやがるです、とクソツインからもお墨付きだ。
ブルー将軍は瓶を少し胡散臭そうに見た後、頭から豪快に被った。
みるみる青の塗料がとれて元の金髪碧眼でお綺麗な顔に戻った。

「礼を言う。では、さっそく互いの情報交換を行いたいので我が軍の指令室として間借りさせて貰っている領主の家まで着いてきてほしい」
「ん、りょうかーい。街の塗料はマナが切れればとれると思うから」
「わかった、伝えておく」

覆うような暗闇は、地平線から昇る光から少しずつ朝へと向かっていた。
んー、晴天か。戦争するにはいい天気だな。

「生きる事とは戦うことでしょう？ってか」

さて、作戦会議と洒落込みましょうか。

「待て、もう一度言って」

「偵察からの情報だと、モンスターの数は五百。全て同じ個体で各国の提供によってあまり強くない部類だということが分かっている」

「ちげぇよ、それもだけどそうじゃねぇよ」

「・・・・・・・こちらも精一杯足掻いたんだがな」

事件が会議室で起きている。
事件です、事件ですよこれは・・・・。
会議室で情報交換を行っていたのだが、グラハム氏から飛び出すこちら側の状況に本気で帰りたくなった。
曰く、救世主いるんだからお前らの部隊だけで十分じゃね？と上層部が首都周辺から軍を動かすのを嫌った為にほぼ必要最低限の兵しか動かすことができなかった。
曰く、大陸会議でグリムリバーのモンスター特性を詳しく説明されたにも拘らず、王様自体それを深く受け止めていないらしい。え、危険なんだ。ま、そんなの軍の奴らが処理する問題だよね。俺しーらねっ！と直訴も突っぱねられ、泣く泣く召喚したばかりの救世主を連れて行軍。
曰く、予想よりも多勢のモンスターに流石にこのままでは堪らないと救援を要請したのが三日前。上に言っても埒が開かないのは明白だったため、少ない手ごまで特攻隊を結成させてフィールメトに直接要請しに行ったらしい。
曰く、返事が一日で帰ってきたことに自分が鍛え抜いた部下がどれだけの急行軍を成し得たのか涙ながら理解したらしい。
曰く、モンスターたちは周囲のマナを丹念に食い潰しながらこちらに向かってくるため、決戦までにはもう数時間はある。しかし住民の避難をする暇も無かったので平地で迎え撃ちながらの避難という少ない手勢を更にさくというもう絶望的な状況。正直オワタ。
以上が要約した内容だ。
ルカ子、なんかお前が言ってたことが現実になりそうだぞ。
つーかあれだけ騒いだのにあんまり人が出てこなかったのって避難してた人も居たからなのか。

やべぇ、向こうにも非があるとはいえ避難作業を遅らせるような騒ぎを起こしちまった。
こう、目の前男に対して自然と頭を下げたくなった。

「・・・・・こちらの情報は以上だ、死にてぇ・・・・・」

「ああ・・・うん、がんばれ・・・？」

もう将軍としての威厳も軍人の規律も放り投げてやがる。

「あれだ、とにかくお前は頑張ったじゃん！えらいって！すげぇよ、俺も救世主なんて言われてっけどお前程の英雄見たことないぜ！」

「はは、そうだな・・・まだ死ねねぇよなぁ・・・せめてこの国の為に老害共をぶち殺してから死なねぇとなぁ・・・」

「その前にこっちだろ、どうすんよ？一応俺もいろいろ準備してきたけどよ」

「ああ、前提として俺達は守りに入らざる得ない。のに守るのに不向きな平原での戦いだ、玉砕以外何がある？」

「あきらめんな！諦めたらそこで試合終了だぞ！」

「奴等の通った土地にはマナが形成されないという異常もある。結果として火力が期待できる魔導師はお得意の魔方陣が切れればその場で陣を組めずに役立たず、魔術師は自前のマナで戦える分だけま

だマシだな。しかしそれでは戦術的な効果は見込めても戦略とは言い難い、今回戦いはフィールメトが駆けつけてくれるまでの防衛線が我々の役割だが、圧倒的に兵力が足りてない我々が戦略なしに戦うのは正に自殺にも等しいな。肝心の時間稼ぎすらまともにこなせない」

この小説始まって以来の絶望的な展開だぜ・・・。
マジかよ、俺ルカ子たちが来るまでに生き残れるかな？

「咥えてこちらは爵位を継げない貴族のおぼっちゃんたちが集まる部隊。どう考えても詰んでる」

「うわぁ・・・・」

言葉にできない。
笑うっきゃねーな。

「だが、救世主のお前達がいればなんとか凌げるかも知れない」

「えっ」

ここでいきなりですか。
初めて実戦がこんなに絶望的で軽く死ねそうなんですが、この人の期待で俺の死亡率が倍プッシュ。
ルカ子助けて。

「救世主は世界の均衡を測る為に遣わされた云わば調整処置のようなものだ。そこに存在するだけで、乱れたマナを整えるという」

「何それ初耳」

そんな厨ニな設定があったのかよ。

「乱戦は避けたい、どうやら奴等は隊列を成さないらしいからな。お前達を連れていけばこちらは魔法を使用できる。しかし大人数で動いてはせっかく向こうがバラけてくれているのに素早く身動きがとれずに囲まれてしまう、つまりだ」

ものすごいガチな顔で重々しくグラハム将軍は、その作戦を口にした。

「少数精鋭による、ゲリラ戦しかない」

「今でも十分少数ですぜ？」

「ああ、だが正直バカ共では居ても居なくても同じだ。なら住民の避難に回した方がまだ無駄死にも少なくて済む」

素人の俺でもこの作戦、無謀過ぎるってのが分かる。

死亡フラグ以上の何者でもない。
つまりこいつは、足止めの為に死んでくれって言っているようなものだ。
こりゃあ・・・・・燃えるな。
ああ、死ぬのが恐いかって？
恐いなぁ、死ぬのってのはどんな気分だ？
何もなくなるってのは一体どういう気分なんだろうなぁ。
だが、俺はバカだからな。

「その話、乗ったぜ」

「・・・・・・会って間もない人間に死ねと言われているんだぞ？」

「俺はよ、ヒーローになるって、あいつらを一発ぶん殴るって決めてんのよ。だからさ、それが済むまでは死ねねぇな」

「・・・・・・」

酷く驚いたような顔で俺を見つめるグラハム将軍。
やがてふっ、と笑い座っていた椅子から腰を上げる。

「私もこの作戦に参加しよう」

「はぁ！？いやいや、避難の指揮とかどうすんのよ」

「少々、いやかなり不安だがこの際パレムに任せるしかないな」

「将軍自らが出陣とかアホか」

「何、２００ばかり率いてるだけのしがない男だ。変わりは沢山いるさ」

何でもないようにそう言う目の前の男に心底ビビった。
すげぇ、この世界すげぇ奴で一杯だな。

「しかし心残りはもう一人の救世主だ、彼女には悪い事をするな・・・」

「あん？女の子なのか？そりゃ心配だ、咥えてここに着て数日じゃ戦闘なんてできるわけねぇしなぁ・・・」

「君も偉そうなことは言えんだろう、新兵？」

「舐めんな、こちとら地獄先生から特別授業受けてんだよ。実戦は初めてでも、心構えと腕だけは叩きこまれてんよ」

「先生ね・・・。因みに誰か聞いていいかい？」

「おい、急にお喋りだな将軍」

腹くくってスッキリしたのか、もう着崩す気マンマンらしい。
立派な軍服もなんかありがたみも下がった気がする。
将軍は肩を竦めて机に寄りかかって腕を組んだ。

「共に死地へ赴く仲だ、信頼が何よりの力になる。多少のお喋りくらいその信頼の為なら軍の規律とやらも許すさ」

この将軍マジかっけぇわ。
惚れる、正に男の中の男だな。

「ルカ子・・・じゃないな、えーっと？あいつの本名ってルカトエーゼだっけか？」

「なんだと！？」

将軍が腕組を解いてこちらに迫ってくる。
どうした将軍、近いよ将軍。

「ルカトエーゼとはルカトエーゼ・モン・ヴァルスニオのことか！？」

「何この食い付き、いやま・・・そっすけど・・・」

「彼女に魔法を教わっていたのか？」

「まぁ、他にも居たけど知識部分とかは全部あいつかなぁ」

「そうか・・・・・、彼女の教えを受けた救世主なら実に頼もしいな」

ルカ子ってそんなにすげぇ奴だったのか？
確かに前置きの魔方陣無しでも即興で単純な作りとはいえかなりの規模と威力の爆破魔方陣作るぐらいだから、大分すげぇんだろうなとは思っていたが・・・。
ここまでのネームバリューがあるとは知らんかった。

「さて、やることは決まった。そうだな、おまけに我が国の救世主殿を守りきることも追加しておこうか？」

「上等だぜ、どうせなら越える壁は高いほうが燃えるってな」

「ふ、そうだな。出発は３０分後だ。それまでにこちらの救世主と少しでも話しておくといい」

「うっす、んじゃまたな」

ガシッ！と腕を組み互いに笑い合う。
いきなり会った奴と仲良くなるとかどこのご都合主義だっつーの。
将軍に背を向け、会議室をドアをカッコ付けながら締めようとして手を挟んだ。
ちょっと痛かった。

「状況は悪いが、ただ逃げ出すんじゃ根性ないな、展望は無いが、度胸でクリアするしかないやってか」

手を摩りながら廊下を歩き、俺の中で指針になった言葉を口にする。

「オーケー、生き残ってこの試験、大成功させてやる」

さぁ、戦争を始めようか。

おまけ

「よし！弱音は吐いた！泣けるだけ泣いた！あとはカス共から逃げてやるだけ！できる、できる私！」

「救世主殿ー、迎えに来ましたー」

「あ」

「あ、また逃げようとしてたんだすね。ダメだって言ってるじゃないですか。あなたがいないと私の命が危ないんですよ」

「しらねーよ、私の命は私んだ。私が嫌だって思ったことはやらない主義なの、救世主とか訳のわからない物になった覚えもねーの」

「ダメですって、ここ既にモンスターの活動領域ですよ。地理も詳しくないのに出歩いてたら死んじゃいますよ」

「あっ・・・！放せバカ！どうせここに居ても勝手に戦わされるだけだろ？！なら私が死ぬ場所は私が決める！邪魔すんなぁ！」

「いたっいたっ、ちょ、肘でアバラゴリゴリ突かないでくださいよ。パレム痛いです」

「やだぁ！放せよ！放せってば！」

バタンッ！

「ちぃーす！俺間部功刀！ぜひ俺におっぱい揉ませてください！」

「・・・・・・・・」

「あ、彼が今回協力してくれる隣国の救世主ですね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「クソあにきぃいいいいいいいいいいいいいいい！！！」

「何それ恐い」

## 以外とヤバい状況だったのよ（後書き）

オチは特になし。
いつもだけど。

似非戦略論はあれでいいのかなぁ。
若干ながら書いてて不安になった。
できれば指摘お願いします。

## デッドｏｒアライブ（前書き）

初戦闘シーン
やべぇ、そこら辺結構適当なんだよな。
主人公のステータスとか。

## デッドｏｒアライブ

「な、なん、でっ、あにぎがっ、ごごにいんだよぉおおおおっ！！」

「ちょっ、鼻水っ、やめろっ、服これ一着しかないんだぞっ、分かった、話すから放して――――」

「うぁあああああああああああああああああああああっっ！！！」

「うぉおおおおおおおお！！てめっ、・・・・・・ああもう、分かった。泣け、気が済むまで泣いとけ」

「わ、わけ、分かんないとこにっ、いなっ、くて、ふあんっだ、たから」

「わーたわーた」

「・・・・・・・・僕帰っていいですかね」

希望さえあればどんな所にでも辿りつけると信じている。――――

――――ジョルノ・ジョバーナ

「――――――――つーわけだったのよ」

「何それ、二ヶ月って、今日の朝までお兄ちゃん居たじゃん」

「あれじゃね？世界が違うから時間の流れも違うんじゃね？」

「ふーんまぁそれはいいのよ、問題はだ」

「うん」

「・・・・・・・・ヒーローとかそういうの、まだ諦めてなかったわけ？」

「うるせーよ、俺はお年頃のシックスティーンなの、まだまだ夢見る年頃なんだよボケ」

「言ったじゃん！私は平気だってっ！お兄ちゃんが気にする事じゃない！」

「・・・・・・うるせーよ」

「っ！！このバカ兄貴！！」

感動の再会とはいかないのが俺達兄妹。
全く、将軍に土下座して置いてこさせようと思ったのに付いてきやがるし。
我儘な妹だぜ。
さっきまで泣いてた癖に説教しやがるとは。
馬車に揺られて平原へと向かう。
馬車はフィールメト製要人用のメチャクチャ頑丈な奴。
こいつでヒットアンドアウェイを繰り返すゲリラ的攻撃で時間稼ぎか・・・。
うまく行けばいいけどな。
乗車してる人数は6人と少ないし。
将軍とこの兵士で4人、俺達兄弟で2人。
で、俺らはこの馬車の中で、他の人達は外に無理矢理張り付いていると。

「そろそろだ。準備はいいか、ご両人」

将軍が窓を開け顔覗かせる。
いよいよか。
こちらを納得できなさそうな顔で見る我が妹の視線をスルーし、扉を開けて外へと出る。
あ、言い忘れてた。

「おい、これたぶん頑丈だから外に出なけりゃ平気だからおとなしとくそこで待ってろよ」

「ふん、分かってるわよ」

俺とは違って進学校に通ってるできた妹だ、脱走かまそうとするくらいだし頭の回転は速かろう。

「あ、忘れてた。ホイこれ」

「なにこの紙切れ」

「内の師匠が前作ってくれた防御魔方陣だったはず」

「はずっておい」

「荷物がかさばってわっかんねーの！俺まだここの文字読めねーから適当なの！」

自作の魔方陣すらいちいちルカ子に聞きまくってたら辞書作ったからそれで覚えろって言われてそれで調べながら造ったし。
てかルカ子凄くね？日本語理解してんのよあの子。
なんで辞書なんて作れたんだろ、謎だ。
一先ず、その問題は置いておく。

「んじゃ行ってきまー」

「私が童貞貰うまで死ぬなよ」

「普通に彼女に捧げるわボケ」

「おめーに彼女とか私以外ありえねーから」
「おめーが彼女もありえねーよバカ」
「ん、いってらー」
「おう」

最後にそんな会話を終えながら、俺はドアを閉めた。
自動で疾走する馬車の数百メートル向こうにはモンスターの群れとおもしき複数の影。
数はそんな多くない、バラバラ動いてるってのは本当らしい。
だけどそれだと街の方がやばくね？っと思ったのだが、それがこの作戦の難易度を激ムズに引き立ててるらしい。
ある程度マナを魔法で撒き散らしながら各個撃破を図りつつ、適度に他の群れを引きつけ囲まれる前に馬車の機動力で離脱。
バラけるように誘導し、また群れを別れるように魔方陣でマナを撒き散らしながら群れを拡散。
そしてまた各個撃破という流れを繰り返し行うらしい。
やっべー心臓バックってきたよ。

「開幕は私が指揮ろう」

そう言って将軍は呪文を唱え始めると同時に周囲の空気が赤く染まる。
マナの集まり方から見てどうやら単純な魔力集束砲弾を作るらしい。

呪文は魔術のイメージを作りやすいように自己設定した言葉だ、これがあるのとないのとでは結構差がある。個人の主観だけど。
それにしても、周囲のマナすら操って集束させてしまう将軍の手腕には脱帽だ。

「――――――――行け、踏み砕く脚（ティタン・ノック）」

完成した魔術は、赤い閃光となって平地を敵影に向け駆ける。
接触した閃光が轟音と共に爆発、夕焼けと錯覚するほどの光を放って敵を焼き尽くした。
あれ、これいけんじゃね？

「残念ながらこれで私の魔力は打ち止めだ。身体強化を十分も掛け続ければすっからかんだよ」

持久戦だって自分で作戦建てといて何してんのこの人ぉおおおおおおおお！？

「いいじゃないか！どうせみんなここで死ぬんだ！」

「ぶっちゃけちゃったよこの人」

さっきまで逆境に立ち向かうかっくいい男だったのに・・・。
テンパるとダメになるタイプだったのか。

「将軍、一陣は吹き飛ばせましたけど、音を聞いて集まったのか後方と左右と、前に増援がチラリと」

「囲まれとるやん」

眼鏡を掛けたオールバックに髪を整えてる人が報告してくる。
それにしてもアッサリ囲まれたな。

「後、昨日から使用していた為かこの馬車のマナの残量も尽きかけです」

オワタ。

「レブラム、お前の魔力全部馬車に注ぎこめ、残りは一番勢力の薄い前方の敵勢力に攻撃」

「んじゃ、将軍に倣って俺の切り札を」

「親父が持たせてくれたクソたっけー高級攻撃魔方陣を」

「なにこのノリ」

高濃度圧縮された砲撃魔法や強力な雹風がモンスターの群れにぶち

当たる。
さっきの将軍とはいかないまでも、かなりの数のモンスターが地に伏した。
・・・・もう作戦もクソもねぇよ。
ちょっと真面目に構えてた俺がバカみたいじゃねーか。

「おっしゃー！てめぇら、背水の陣も真っ青の超窮地だっ！何とかすんぞ！叫べ！」

「「「オーイエー！ファック！ファッキンマザーファッカー！！」」」

「・・・・・・ええ？」

もうなんか俺ですら付いていけない感じのカオスができあがってる。
こういう俺より自由な奴がいる雰囲気って苦手なんだよなぁ。
俺が会話の主体になれないから。
いや、もういっそここは流されとこう。考えるのがめんどくさくなってきた。
ていうか結構俺好きかもしれんなグルムドリア。
ダメっぽい感じとか特に。

「突撃ー！！援軍なんか知った事かよバーカッ！！」

「「「ヒーハー！！ガンホーガンホー！！」」」

「・・・・・結構行けるかもしれんな」

その場のノリだけですけどね。

「流石に1対１００の戦力差で正面衝突は無理があったか」

「でっすよねー」

馬車がマナが切れるまで小競り合いと衝突を繰り返し、結局援軍の助けが少しでも早く来ることを願ってフィールメトの方向に飛ばした、・・・けど。

「見事に囲まれたな」

「どうする将軍」

他の人達は魔力切れで気絶、馬車の中にブチ込んだ。
今外でサイクロップスとかオーグルとかそんな感じのモンスターと対峙しているのは俺と将軍だけだ。
めいいっぱい逃げ続けてあの開戦から三時間ぐらいは逃げたかなぁ、そこら辺は逃げるのに必死だったので分からないが、太陽が高く上がってギラギラ光ってるので結構時間が経ったと思う。
魔方陣、もうカラーボールしかねぇよ・・・。
自前の魔力は使ってないし、追いかけっこしまくったからか奴さんは肩で息するくらいには疲れている。
しかしそれでも数が違う。
こりゃあ終わったかな？

「かーなーしーみーのーむーこうへーとー」

「なんだその歌、すごく縁起が悪そうだな」

「恨むぜ」

「安心しろよ、多分この馬車の頑丈さならこいつら程度じゃ壊せない」

ああ、それはちょっと安心したわ。

「でも一発殴らせろよ」

「うん、これ終わったらな」

奴らが疲れている内にもっと引っ掻き回さにゃ、それかここからの離脱。
頭の内容を切り替え、魔術を行使する為の回路を回す。

「うっし、行くぜ」

「ほう、魔法を形状固定しての身体強化か」

「話すのは後だろ？」

「そうだったな」

さて、戦争を始めようぜ。

## デッドｏｒアライブ（後書き）

急展開の上に短い・・・。
時間がなかったんや！

## ガッツさんマジガッツさん（前書き）

歌詞の無断転載についてのお知らせで死にそうになった作者。
こうなったらどの辺りまでセーフか試してみようという無茶は俺にはできない。

**ガッツさんマジガッツさん**

「「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」」

頭上にメイス、避ける。
脇からモーニングスター、しゃがむ。
地を這うように戦鎚、飛ぶ。
圧倒的な数の暴力を、将軍と共にとにかく狂ったように叫びながら必死こいて駆け続ける。
止まったら死ぬ。
それこそ止むことのない死線の狂乱、潜りぬけている今も死と隣り合わせ。
テンション上げねぇとやってらんないよこれぇ。

「へいへいへい！後見てる余裕ないけどちゃんとこいつらついて来てんのか？！」

「知らん！でも群がってはいないと思うっ！！」

と、互いに叫ぶように会話を交わしながら、人ならざる異形と切り結ぶ。
膂力など比べるまでも無くこちらが劣る、受ければ押し潰されるのみ。
肺が空気を求め、鼓動が心臓を突き破りそうなほど脈動し、毛細血管は力みと酸素の供給で破けて内出血を起こしている個所すらある。

だが、それすらあの地獄の鬼共による訓練の苛烈さには届かない。
あの訓練に耐えられたのは、一重に意地と意志を重ね続けた故だ。
姐さんの技に喰らい付き、ツインの拳を耐え抜き、ルカ子の魔法で叩き上げられ、数々の痛みを、込上げる絶望を、呑み込み、練り上げ、鍛え、育んだ。
二か月前の身体とは段違いに訓練の行き通った肉体は、この程度では止まらない。

「じゃまっ・・・くせぇ！！」

目の前の鉄塊を半歩横に逸れてかわす、ついでに掌を足にブチ込む。
魔力で強化した身体能力、そして魔術で増幅した術でもモンスターの地力には勝てない。
だからこその戦術と魔術、これらがあってようやくこの場に立ていられる。
これだけやっても一撃受ければノックダウンだが。
バランスを大きく崩したサイクロップス（仮）の影に逃げ込み、他からの追撃を避ける。
一瞬だけだが呼吸を整える時間ができる。
肺から吐き出した熱い空気を、酸素を含んだ空気を呑み込む。
身体から疲労がほんの少しやわらぐ。
動く、筋肉を再び躍動させる。
ぐっ、踏み込む度に激痛。
そろそろ騙し騙しの逃避行も限界に近いか・・・！
サッカー選手も真っ青の走行距離だからな、太ももが張ってマジやべぇ・・・！

（どぉすんよぉ！ルカ子たちもまだこねぇし！これ以上はもう走り続けるのは無理だぞ！いざとなったら脳内麻薬だすけどよぉ！）

限界は迫っている。
全身が空気を求めているのに全く足りてない、肺が爆発しそうなほど痛む。
未だ怪我するようなヘマはやらかしていないが、そいつも時間の問題だ。
思考の合間を縫うように目の前に現れる鉄塊。

（しまっ・・・！）

何とか逃げようと足を動かすが、突然の踏み込みに足が震えて力が入らない。
それが俺に迫ってくるのを食い入る様に見つめる。
避けられ・・・・

ガッ！

「ごおぉおおおおおおおおおおおッ！！？」

鉄塊に弾き飛ばされ、地面を転がされる。
脳がシャットダウンしていたのか、右腕にゆっくりと激痛が広がっていく。

「ぐ、ぅ・・・・・・・！！！」

折れたか・・・！？
どのような状態なのか、感覚が激痛によって麻痺していてどうなっているのか全く分からない。
そんな痛みを気にする暇も与えないとでも言うように、頭上が陰る。

「ッ！！」

魔力を全力で足元に集中し、地面を蹴り上げバク宙するように回転しながら立ち上がると、鼻先をモーニング・スターが掠め地面を揺らす。
くそっ、マジデッドｏｒアライブじゃねぇかよ・・・！

「上等だ、やってやんよ・・・！」

右腕を抑えていた手を離し、頭を魔術行使用に切り替える。
こっからはペースもクソもねぇ、文字通り全力全開、何もかもを掛ける。
命さえ、生き残る為につぎ込んでやる。
生き残る為に、全部、くれてやる。

一生懸命努力すればするほど、運は味方する。――――――――ゲーリー・プレーヤー

「はっ！」

モンスターの顔にペイントボールを叩きつけ、怯んだ隙に撤退を返しする。
魔力をできるだけ節約する為に、できるだけ素の状態で避けている。
しかし、これだけの数の差があるとどうしても避けきれない攻撃が出てくる。

「ふっ・・・！」

そんな時は視力を強化し、相手の攻撃の軌跡を見破り最小限の動きでそれを避ける。
こんな事を何千回繰り返しただろうか。
既に身体中擦り傷だらけだ。
右腕はブランとぶら下がったままにしてあるため、どんどん状態が悪化している。
頭は酸欠でぼうっと熱くなり、足には疲労でほとんど力が入らない。
反撃なんてする余裕もない、逃げるだけで精一杯だ。

「将軍どこいったかなぁっ！」

萎えそうな気力を叫んでなんとか踏みとどまる。

「きっついっ！！マジきっついわこれっ！！」

重なる様に降ってきた鉄塊の僅かな隙間を見出し、転がって全身を投げ出す。
直撃はしてないが、至近距離から叩きつけられる衝撃に歯を食いしばって耐える。
土煙が晴れる前にバネを使って無理矢理動き出す。
うっし、まだ意識はある！心臓も動く！手足もある！
だからぁ！早く動け俺ぇぇえええええええええええええええええええええええええええええ！！
やっとのことで一歩踏み出した時、土煙から棍棒が現れた。

「──────────────────ッ！！？」

ゴガッ！！！

避ける事も出来ず直撃。

「ッア・・ガ・・ア・・・・ッ！」

嫌な浮遊感が永遠に続くような錯覚の後、重力にしたがって地面に叩きつけられた。
とっさに受け身をとるが、衝撃を殺しきれず頭を打ち付ける。
不明瞭な視界を何とかしようと腕を動かそうとして、どちらにも思ったような反応がない事が分かった。
ゆっくりと視力が戻り、左腕がボッキリ９０度折れ曲がっているのを見て、あの一撃をとっさに防御したことを思い出した。
綺麗に折れている、骨は出てない、これならまだ後遺症は無いな。
いや、違う。こんなことを考えている場合じゃない。
だが、何を考える？俺はどうするべきだ？
ああ、そうか俺はまだ、死ねないんだったな。
死んだら美衣が泣いちまうもんな。
だから、動かないと。
仰向けの身体をうつ伏せに返したところで、上半身を支えて起こす為の両腕がどちらも動かないことに気付く。

（くっそ、たれが・・・）

額を打ち付け首の筋肉で上半身を起こした。
めいいっぱい力むと、どこかから血が流れていく感覚に襲われる。
脚は支えているだけで震えている。
目は霞みがかって良く見えない。
しかし、耳には地面が震える音がはっきり聞こえる。
敵が来ている。
不思議とここまで痛めつけられていても恐いとか、死にたくないと

かそういうことは考えなかった。

（神とか菩薩とかうなもんが俺にこういうことを望んだってなら、こうやって死ぬように運命を模ったってんなら・・・・）

痛いのが恐い、理不尽が恐い、不条理が恐い、俺の周りを奪って、俺を奪っていくものが恐い。
そんなもの、すでにあいつらとの訓練で置いてきた。
ただ、抗う事すらもできなくなるのは恐いどころじゃない。
敵の音がまた近くなった。

（抗う、くらいはやってみせる・・・。運命に従うのは、それからでも遅くないだろう・・・？）

魔術、構築、発動。
視力はまだ戻らないが、敵の位置を把握するカンくらいは戻った。
不思議だ、今にも死にたくなるくらい痛いのに、それが全く気にならないくらい穏やかな気分だ。
意識していないのに、身体が右に移動すると、左側から鉄塊が現れる。
数メートルほど飛びあがると、地を這うような蹴りが通り抜けた。
着地と同時にしゃがむ、頭に感じる風が敵の攻撃を避けた事を悟らせた。

（ひどく・・・しずかだな）

まるで知っていたかのように、あらかじめ認識していたように、その攻撃を避けていった。
そして、俺はある場所に少しずつ近づいていく。
眺めている、その光景を。
俺が、俺を見ている。
全てを見渡すように、敵の位置を、俺の居場所を、攻撃の軌道を感じとっていた。

（あ、ここだな）

そして、辿り着く。
俺はもう動かなかった。
いや、動けなかった。
足の力も、腕の感覚も、無かった。
なにより血が足りない。
囲まれている、逃げ道も、ない。
しかし俺は、それを気にしなかった。
前だけを見ていた。
そして、それは来た。

「大丈夫ですか、くそ弟子」

「うっせークソツイン」

## ガッツさんマジガッツさん（後書き）

すいませんした。

**今回は俺ふざけてる暇なかったわ**

「随分とボロボロですね」

「ああうん、そっすね」

「・・・・でも、良くやりました」

「ああうん、そっすね」

「後は、私達に任せろ」

「ああうん、そっすね」

「・・・・・やばくないですか？」

「ああうん、そっすね」

「取りあえず、早く終わらせちゃいましょう」

「ああうん、そっすね」

「・・・・こいつは私が連れて行こう」

青春の夢に忠実であれ――――――――――――フリードリヒ・フォン・シラー

目が覚めたら天井があった。
知らない天井だ、そう言おうとしたら身体中に激痛が走って悶絶した。
よし、ネタに走る程度には冷静だな俺。
さて、俺どうなっているんだ。
視界が右側だけ真っ白に塞がれている。
腕、両方とも吊り下がってる。
上半身から下半身、つまり全身が筋肉痛のように痛む。
うん、見事に満身創痍だな。
周りはどうなってるつ〝ア〝ッ。
やっべ、首がビチッ！ってなった。
いてぇ、すげぇいてぇ。
あーなんかまだ寝みーし寝とくかな。
うん、どうせ説明するとき起こされるだろうし、このまま寝ちまおうオバッ！！
あー無理だ、痛すぎて無理。
マジかよ、どうにかしてほしい。
あーそうだ、マイシスター達は無事だろうか。
一応防御魔方陣渡しといたけどよ。ルカ子製の。

「あれ、服が変わっとる」

病院で着る服みたいな感じの服だな。
結構スースーする。
あ、呼吸するとアバラが軋む。
そうだな、痛むときは逆に痛い事をすれば痛くなくなるかもしれない。

「ライフイズアハイウェーイ！アイワナライドイットオールナイトローング！」

ビキィッッ！！

「オボァッ！！！」

ふ、ふっ、上等だぜ、この程度じゃ俺は止まらねぇ。

「イフユアゴーイングマーイウェーイッ！アイワナドライブイットオールナイトローングッ！」

「ちょっ、クトウさん何やってるんですかっ！？」

あ、ルカ子キタコレ。

「ふっ、ふっ、る、るか、やばっ、いつっ、誰かっよ、ふっ、死ぬっ」

「ああ！？もう、そんな身体で大声出すから！」

鎮痛剤とか打たれた。
その頃には俺は気絶していた。

「もう、一時はどうなることかと思いましたよ」

「やべーマジ呼吸止まるかと思ったわ」

「両腕は片方は複雑骨折、もう片方は綺麗に折れてるけど神経ごと断裂、右目が視力が落ちてますし、身体中が肉離れ起こしてます、挙句足は親指が疲労でヒビ」

正に満身創痍だな。

「えーそんだけー、もうちょいいってると思ったけど」

「これ以上酷い事になってたらホント死んでましたよ」

「・・・・・そいでさー」

「あの人達は無事ですよ、グラハム将軍が必死こいて守ってましたから」

あー引き付け失敗してたのか。

大失態だ。

俺一生将軍に頭あがんねーわ。

「私の治癒魔方陣使っても全治三週間ですね」

おおーすげぇ、初任務がこれだと今後マジで死ぬかも。

「・・・・あと、言い難いんですけど」

「え、尿瓶じゃなくて管通ってるのは知ってるよ、死にたくなったけど」

「そ、そうじゃありません！」

ずっと尿意を催しているような気分だ。
死にてぇ、最悪の気分。
確かに動けねぇからトイレに行けないけどさぁ、管はダメだろ。
もう、すごく、男の尊厳的な何かが・・・・。
テンション下がるわ。

「・・・・右目の視力に付いてですが、元に戻すのは難しいかもしれません。血を流し過ぎて、脳の機能が一部酸欠だったんです」

「隻眼かーカッコよくね」

眼帯とかな。

「いや、視力下がっただけですから失明はしてません」

「えっ、何それがっかり」

「・・・・・失明してなくて残念なんて事を言う人は初めてですよ」

「だって眼帯かっけーじゃんよー」

「はぁ・・・、えっとそれと事後の報告ですかね」

「あのモンスター軍どうなったよ」

「そうですね、回想で語りましょうか」

回想入りまーす。

「じゃあ後は頼んだ」

「速く行っちゃってくださいです」

「ああ、分かった」

全く、ルカ様が速攻で仕事終わらせて私達が先行してなければ死んでましたよこいつ。

「ォオオオオオオオッ！！」

「あーはいはい。直ぐに開いてして上げますからねー」

周りからゴッツイぶっさいくな奴らがこちらにやってきた。
まーったく、こいつらがいるせいで周囲のマナがどんどん減ってますですね。

「やはり残った方がいいんじゃないか？まだこいつがいるから正常だが、すぐにマナが枯渇するぞ」

「こいつら程度なら自前で何とかなりますですよ、だからさっさと

行っちゃってくださいです」

流石に重傷ですからねー、血もだいぶ流してるようですし、これ以上は酷です。

「だから――――」

「あ、後」

ドンッ！

背後からの一撃を片手で受け止める。
既に魔術の構築は終わっている、後は発動するだけ。
敵の血のついた戦鎚を、冷たく見つめる。
発動した魔術で、戦鎚をモンスターの腕ごと弾き飛ばした。

「――――――速く行ってください」

では、戦争始めますですよ。

ガシッ

「・・・・・・」

「あいたッ！？」

ル、ルカ様に肩を掴まれたです。
沈黙を保ったルカ様はゆっくりと前に進み出ました。

「ル、ルカ様・・・？」

「・・・・・・」

こ、恐い。
まるで無表情なルカ様は、お仕事の時より平坦で抑揚がない雰囲気がしますです。
スッと一枚の魔方陣を取り出したルカ様は、それにナイフで指を切って出した血を押しつけた。
しょ、召喚魔方陣・・・ってまさかッ！？

「祈り申す、我魔の理に従い彼の者に助力を請う、地に至りて怨敵を亡ぼし賜え」

「げぇッ！？」

あれ（・・）を出す気です！？
思わず、下品な叫び声を出してしまいましたが気にして場合じゃな

いです！？
速く効果範囲内から脱出しないと、

ゴウッ！

「ふむ、呼んだかヨムヒルの弟子よおぉっ！？」

火炎を纏い拭き散らしながら現れたのは、炎の精霊が王。
正に炎が形を成したような外見で、モンスターの体調をゆうに越える。
世界がまだ炎で包まれていた時代に産まれた創世の存在。
ルカ様が使役できる中で最強の召喚魔であり、切り札の一つ。
あれを使役できる理由には、ルカ様のお師匠様であるヨムヒル様の事を語らなければいけないのですがまた後の話ですね。
その創世の魔王が、ビクッと震えて何かに抵抗するように身を捻らせている。

「おおっ！？ちょ、召喚魔の強制使役だとっ！？いつの間に私用に改造していたんだッ！？やめろッ！この前ちゃんと働かなかったことには謝る！だからそれはやめ――――――――――――」

ガクン、と魔王の肩が弛緩する。
顔を上げた魔王は召喚された瞬間のふてぶてしさはなく、眼の光りが消えた生気のない表情をしていた。
・・・・・・神話級の存在を召喚の契約をしているとはいえ強制使

役を掛ける事ができるなんて、流石ルカ様です！

「創世帰焔（ジェネーレーション・インフェルノ）」

ちょッ！？

ゴフォォォオオオオオオオオオォォオオオオオオオオオオッ・・・・・・・・・！

「・・・・・・・あっぶなーです」

全力で周辺を離脱し丘の影に隠れると、熱風がこちらに吹いてきた。

「空気がムアッとしやがるです」

なんだかこの世の理不尽を全て見せつけられたような気分ですね～。
ルカ様のお師匠様からしてとんでもない人でしたから、創世の魔王を飼いならすなんて真似が可能なのも頷けるかもしれないです。
それにしても頭上をガンガン炎が通り抜けてますから動くに動けねーです。
こりゃほとぼりが冷めるまで待つしかないですね。
ルカ様があそこまでブチ切れるなんていつ以来でしょうか。
んー、私が昔死にかけた時以来ですかねー。

あの時もとても怒られました。
天上の翔星級（ソーラーレイ）の集束魔法を眉間に突き付けられて泣きながら説教してくれたルカ様は本当にお優しいのです。
普段お優しい分キレると手がつけられないです。

「それにしても、周囲のマナが枯渇してしまっているのには驚いたです」

グリムリバーから現れたモンスターは、周囲のマナを食い潰すという原因不明な特性を持ち合わせており、そのお陰か通常のモンスターと似たような種が確認されてもその個体の強さが通常種とは段違いに強い。
そういう情報を得てはいても、我が国近辺に現れたのはこれが初。
実際に経験してみると、フィールメトで暮らしている分その異常性を感じずにはいられない。
マナとは、全ての物の“産まれる”源。
それが世界を満たし、循環し、流転するからこそこの世界は成り立っている。
今まで感じてきた世界の恩恵とも言える代物がゴッソリ消えてなくなっているこの状況は、聞いていた程度では想像もできなかった。

（ここまで戦いにくいとは思わなかったです）

普段マナ満ち溢れている環境で過ごしている身としては、大気中のマナを取り込めないというこの状況はやり難いどころの話ではない。
一応大丈夫なようにいろいろ対策も打っているが、それは個人の戦

略程度の話であって、フィールメト全体がソレを行えているかというとそうでもない。
小国ではあったが、モンスター被害が他国も真っ青に高い国なので、マナを活用する技術の高さは領民の生活レベルまで浸透している。
しかしそれは逆にマナがない生活を考えたこともない先進国でもあるのだ。
今回の戦闘は唐突であった為にその対策を十分に練る事ができなかった。
既存の戦術や戦略を見つめ直す必要性が浮き彫りになった。

（ま、ルカ様があの調子なら今回は必要なさそうですね）

あの創世の魔王は性格に問題ありだったのでルカ様でも扱いが難しかったのだが、今のところ完全にコントロール下に置いているようなので問題はないようだ。
世界を創った炎は伊達ではない。
轟々と鳴る耳鳴りを聞きながらそう思った。

「あっづぁァああアアああァッ！！？」

「！？」

誰かが頭上を飛び越え丘を転がりながら下っていく。
一応戦闘態勢をとるが、絶叫しながら転がっている人物を見ている内に警戒する気が失せた。

「へい、そこの」

「ゴボッ！？」

取りあえず、このままでは埒が開かないので頭を踏んで動きを止める。
踏ん付けて残念になっていますですが、イケメンな男でしたです。
ん？この服装は、軍服？
ということはこの男グルムドリアの兵ですか？

「私はフィールメト軍上級魔術戦闘官、ネリア・ブロン・クイッシュローゼ中尉です。所属と階級を述べるです」

「あ、ああ・・・分かった。私はグルムドリア中央軍魔術騎士、将軍グラハム・イベヌ・スラグヴェルエ准将だ」

「えっ」

思わず固まる。
グラハム・・・・、確か今回の向こう側の責任者だったはず・・・・。
足を退けて飛び退く。
やばい、ちょっとやっちまったです。
ていうかそんな人がなんで前線にいるんですか。

「す、すいませんでした。失礼なことを」

「いや、こちらも見苦しいものを見せてしまった」

「いえ・・・・。ところであの、何故将軍が前線に？」

「私より上のカス共が戦力を中央から動かすのを嫌って中隊規模しか動かすことができなかったんだよ」

「それはまた・・・・」

何とも気の毒な話です。

「しかも貴族お坊っちゃんたちの集まる弱小部隊。正直全力でぶつかっても兵力を無駄にするだけですからね、副長に避難指揮を任せて小隊でゲリラ戦を行っていまして、貴方達の国の馬車無断で使ってしまいました」

「・・・・・・」

グルムドリアにはバカしかいないと思っていたですが、どうやら大バカもいたようです。

呆れ果てますです。

「その馬車に部下を残してきましてね、そこに向かっていたのですが突然辺りが炎に包まれてしまいまして」

「・・・・・・・・・・・・・」

ヤバい、向こうも馬車の無断使用とか色々非難できる部分もあるけど、こちらも結構不祥事起こしてますね。
どうしましょう。

「いやー燃え尽きるかと思いましたけど、残り少ない魔力を絞り切って何とかここまでたどり着きました」

「あの・・・・すいません」

危うく外交問題に成るところだった。
いや、もうなってるけど・・・・。

「すいませんけど、実は部下を貴方達の馬車に残してきてまして」

「あー・・・・、もうちょっと待ってください。家の同僚が落ち着かないと危険なんで」

「あー・・・・ありゃヤバいっすね・・・・」

丘の向こうから激しく輝くを光を2人で見つめながら、どこかやり投げに呟く。

「馬車の方は魔方陣が発動したのか炎が通らなかったんで、そのまま置いてきたんですけど・・・大丈夫かなぁ・・・」

「え、あれを防ぐ魔方陣ですか？」

「ええ、全然燃えてませんでしたね」

「ん～、確認しときたいですけど、どちらにしてもあの一方的な虐殺が終わらないと・・・っ！？」

「なっ・・・！？」

驚愕する。

「嘘っ・・・・！？」

向こう丘で今まで強烈な光を放っていた炎が、突然急激に衰えた。

「キィイィィイィイイイィイイイィイイイイイッシュッシェエエエエアアアアアアァァアアアアアアッ！！！！」

敵を殲滅し終えたのか？と頭に過った疑問を、異形の雄叫びが否定した。

身体強化を施し、グルムドリアの将軍をその場に残して丘を越えて景色を眼下に抑える。

そこには幾分小さくなった創世の魔王と驚愕した表情のルカ様、そして・・・・

「アレは・・・一体・・・・？」

まるで幾重にも折り重なって練り合わさって繋ぎ止めて溶かし流して生物としてのそれをグチャグチャに纏め上げて台無しにして無理矢理寄せ集めたような巨大なナニ（・・）か。
その群がさっきまでこちらを取り囲んでいたモンスターの集合体であることが、僅かに残った名残と言えた突き出した腕や武器から察することができた。

「合体・・・、いや魂魄融合ッ！？」

どうやらこの地に現れた侵略の徒は、一筋縄ではいかないようだ。
目前の光景に敵の認識を大いに改めながら、ルカ様を加勢する為に地面を蹴った。

## 今回は俺ふざけてる暇なかったわ（後書き）

文章の展開はノリ

# 短編集的なものを突然やりたくなったんだ（前書き）

小ネタを即興で考えてみた

## 短編集的なものを突然やりたくなったんだ

深夜の晩餐

「めーしめーし！おいしい飯はまだです！？」

「ちょ、うっせーよお前、深夜なんだから静かにしろよバカ」

「早く飯を寄こすです！せっかく街に行って酒持って来たんですから！」

「わーたわーた」

月も大きく空に上がった宵の時、食堂の厨房を借りて作った賄い飯を持って屋根の上に登っていたクソ師匠の晩酌に預かりにきた。
俺とルカ子の勉強会を監視していたのを見かけ、放っておけず賄い飯を持って行った日から始まったもはや日々の習慣と化したこの食事会は、目の前のバカが意外と乗り気となり毎回もって行く賄いに文句をつけてくるようになった。
面倒だが無視すると次の日訓練が死ねるレベルでボコられるので、非常に腹立たしかったが色々試行錯誤しながらおつまみを作った。

「おら、エビチリだ」

「甘辛い匂いが鼻腔を刺激して・・・くぅー！！やりじゃねーですか！褒めてやるです！」

「そらどーも」

嬉しそうに飯を口に含みそう評価してくるその様子は年相応な子供に見える。
ツインテールの月の光を浴び輝く銀髪、クリクリとネコのような栗色の目、それらの詰まったちっせー顔、子供体系というより子供が背が伸びただけに見える容姿。
なみなみと注がれた杯の酒を飲み干しテンションを上げるそいつは見た目美少女だ。
体系は残念を通り越して哀れですらあるが、それでもこいつは部類で見れば可愛いに属する。
未だに敵意を向けてくることは気に入らんが、料理を素直に褒めたりする時のこいつは悪くなかった。

「うおい、てめぇ俺の分まで飲んでんじゃねーよ」

「飲んだもん勝ちでぇーすぅー」

だがこの酒に呑まれてる感じのこのバカは将来間違いなくダメな女になり下がるタイプの女だ・・・！
胡坐掻いてご機嫌につまみを口に運びながら酒を飲んでいる目の前のクソツインに呆れる。
ダメだろ、この女捨ててる感はダメだろ。
ま、こいつの将来がどうなろうと知ったこっちゃねーが、嫌味になりそうなので口元を歪めて口を開く。

「自慢のルカ様がてめーのその姿を見たらどう思うんだろうなー」

「ルカ様は真面目なのでこの時間帯はお休みなされているのです～。だから全然平気なのです～」

「パシャっとな」

「にゃっ！？」

「ニヤニヤ」

懐から取り出したケータイカメラで醜態を納めるとゆっくりと屋根にから退散しようとする。

「ちょ、今何をしやがったですか！？」

「んー？何かなー？あれー？こんなところに女を捨て切って酒とつまみを貪る無様な姿を曝しているバカなツインテール幼児体型がいるぞぉーう？」

「こ、このゲス野郎、そこで待ってやがるです！！」

「あ、ボタン押しそうだなー？うっかりこれを今眠っているはずのルカ子に送信してしまいそうだなー？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ニコニコ」

「・・・・・・ああもう分かったですよ！！何が望みですか！！脱げばいいんですか！！？」

「誰がてめぇみてぇな幼児体型に欲情するかバカ、俺はクネール姐さんみてーな大人の女が好きなの」

「くっ・・・・覚えてやがれです・・・・！」

「んーどうしよっかなー？」

くくくくくく、と今までの訓練での所業を思い返しつつどのような苦行を課してやろうか携帯を無駄にパカパカ開いたり閉じたりを繰り返しながらニヤニヤしながら考える。

が、クソツインの魔力が吹きあがる気配を感じると目の前に杯が迫っているのが見えた。

しまった！注意を逸らし過ぎたか！？

防ぐ間もなく眼球に酒を引っ掛けられ思わず携帯を手放し顔を覆う。

ぐ、くそ・・・！

「もらぁっったぁあああああああっ！！」

「ちぃぃぃぃぃぃぃ！？」

音から察するに屋根を滑り落ちていく携帯をクソツインが追いかけ

ているのが分かった。
訓練のお陰で周囲の状況を視覚以外で捉えられるようになった俺は、クソツインの正確な位置を把握する。

「させねぇよぉ！！」

「に〝ゃっ！？」

急速力で携帯へ追いすがったクソツインの足を何とか掴むことに成功する。
その時強かに胸を打ち付けたが、携帯を奪われた後の明日の訓練で行われるであろう扱いを理解していた俺が気にしている暇はなかった。
普段はこんな抵抗何ぞ余裕で避けてみせるだろうが、それほど目の前の携帯に意識を傾けていたらしい。

「このぉ、触ってんじゃねーですこの屑！バカ！」

「ゴモッ！？ガハッ！？」

ゲシゲシと片足で思いっきり蹴られまくるが、しっかりとその足を離さないように力を込める。

「にゃあっ！？ちょ、太もも触ってんじゃねーです！はーなーせーでーすー！！」

「ぜぇってブフッ！離さねモンッ！？」

振り抜かれた踵が人中にブチ当たり、手の力を緩めてしまう。
その隙に顔を赤くしたクソツインは既に屋根からダイブしかけていた携帯を視界に捉える。

「うぅううぅぉぉおおりゃぁあああああああああああああああっ！！」

身を投げ出し、零れ落ちた携帯を何とか伸ばした手にとる。

「よぉ・・・・・・・・・・し？」

ネリア・ブロン・クイッシュローゼは自分の感じる妙な浮遊感に疑問を持ったが、すぐにその回答に行きついた。

（あ、これは落ちますね）

この状況では落下は免れない。
こんな失態はいつ以来だろうか、上級魔術官に成ってから最近はなかったが、昔はたくさんたくさん無茶してルカ様に怒られたな・・・・。

次第と落下することを実感しながらそんな懐かしい思いを巡らす。

（全く・・・あいつが来てから調子がくるってばっかです・・・・）

そして最後に思い出したのは、最近召喚された救世主とは程遠い愛しきルカ様にセクハラを行うクソ下衆変態ゴミクズ男。
考えていることがおかしいし、セクハラするし、私の体系を罵倒するし、すごく嫌な奴だ。
すごくすごくバカで、変態で、クソ野郎で、そして普段とは考えられないほど、

「っぶっねー・・・」

「・・・・・」

視界は逆さまだったが、誰かが自分の足を掴んで落下を防いだことは分かった。

「おい、大丈夫か？大丈夫ならとっとと手ぇ掴め」

「・・・・・」

さっきまでとは打って変わった真剣な表情。
こいつは非常時の時は若干だが真面目になる。

「ふー」

「・・・・・全く、別に落ちても平気です。舐めてんじゃねーです」

屋根へ引っ張り上げられて、二人して一息ついた。

「いや、落ちたら危ないやん」

「だからー、別にこの高さ程度なら余裕で着地できますです」

「お前の了承とか知らんし、いいじゃんさー無駄な労力使わなくて」

「うっせーです、元はといえばおめーが余計な愚策を企てるのが悪いんです」

「・・・・・・」

気まずそうに露骨に視線を逸らすバカ。
自覚してんなら最初からすんなです。

「ま、この機械は預からせてもらうです」

「ちっ、仕方ねぇ。もってけよ」

口ではそう言いつつも特に気にした様子も無くもぐもぐとおつまみを食べる隣のバカをみて、その素直さに驚く。

「・・・・抵抗しないのです？」

「あ？・・・・いや、ちょっと調子に乗り過ぎたし」

「ふむ、それなら明日の訓練はキツメにしてもいいですね」

「ま、それも仕方ねーわな」

「・・・・やけに素直じゃねーですか」

「そらお前、非があんの俺だし、それなら仕方ねーかなーって」

「・・・ふん、分かってんじゃねーですか」

こいつは普段ギリギリまで相手を怒らせるくせに、こういう時は素直に自分の非を認めて謝ってくる。
酷く頭がおかしいのに、良識があったりとこいつのちぐはぐな性格を未だ掴みかねている。
今でもこんな人物がルカ様の近くで指導を受けているかと思うとブチ切れそうだが、そこまで悪い人物ではないと理解していた。
気にくわねー。

「じゃあ、飲み直すか」

「・・・・酒に罪はねーですからね」

気にくわないが、こいつは私の教え子だ。
叩けば応えてくれるし、決して折れない教えがいのある奴だから。
ふむ、明日は肋骨で許してやりますか。

「ビクッ・・・・・・！？」

「？どうしましたです？」

「いや、なんか寒気が」

そんなある日の晩餐。

クルーネ姐さんの戦闘訓練

「戦闘の基本として、攻撃は成功する可能性が低い」

「俺は必ずと言っていいほどボコられるんですが」

「ま、それも含めて説明してやるから黙ってろ。いいか？攻撃というのはそれが放たれた時点で戦闘を終了させなければならない。剣で攻撃するとしよう。剣は拳よりリーチもあり破壊力もあるが、その威力が発揮されるのは切っ先、それ以外に部分だと肉や骨に食い止められ動きが止まってしまい反撃を受ける恐れがある。そら、そう考えると面倒だろう？剣で攻撃するという事は切っ先で正確に切りつけなければならない、しかし切っ先の部分は全体の幅に比べて素手より狭い。だからこそ戦闘にうまくいくものなどないし、攻撃が成功する可能性も少ない」

「なるほどなー。でもよ、なんで姐さんの攻撃は当たるんだ？」

「今のは相手が戦闘態勢に入っているときの話だ、隙がある場合はその限りではない」

「あれ、俺結構ガチでやってたと思うんだけど」

「そこら辺がまだ素人だからなー。お前はまだ意識的に隙があるんだよ」

「あーそうのは曖昧でよくわかんねーんだけど」

「体感だからな、結局自分で理解するしかないし、意識と感覚とでは分野が違う。伝えようとしても齟齬があるからな」

「んじゃどうすればいいですか」

「とにかくボコられて感覚を掴むしかないな」

「ｏｒｚ・・・・・」

その後

「おーい、大丈夫かー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・はぁ、失敗する可能性が高いなら数で勝負って・・・・素直すぎるだろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

今後の切り札になるのか

「さて、集まったか」

「あの、クルーネさん、私この後講義なんですけど」

「私は街で警邏です～」

「おい、ネリア。軍で酒はご法度だぞ」

「な、ななななんのこっちゃでででです」

「・・・・・・何本かこちらに回せよ」

「う～了解です・・・・」

「・・・・はぁ～2人ともほどほどにしてくださいよ」

「で、集まってもらった理由なんだが」

「あ、はい。それは分かってます」

「そこでノビてるバカですか」

「ああ、気絶してもなお私の下着を硬く握ったまま放さないこのバカのことなんだが」

「いったいどうしたんですかこれ」

「いや、なんかコツを掴んだって言ったから、模擬戦で自由にやらせてみたんだが・・・・。何故か下着を掠め盗られてな」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「方向性は定まっているようだし、確かにこいつらしいといえばこいつらしいんだが・・・・」

「封印の方向で」

「です」

「だよなぁ・・・、しかしあの動きを眠らせておくのも勿体ない」

「なら私達の模擬戦は控えさせていただきます」

「クルーネさんが捉えきれない動きで下着を掠め盗られるなんて冗談じゃないです」

「そう言うと思ったよ。・・・・くそっ、魔導甲冑の力でも引き剥がせんとは・・・！」

「・・・・うわー、私でも術式が読めませんよ。本当にどうなってるんだろう」

「マジです！？」

「これは綿密に記憶を管理した方が良さそうですね」

「頼む」

「・・・・・・まったく、どこまでも見下げた野郎です」

友達がほしい

「友達が欲しい」

「あー・・・・・せめて訓練が終わらないと何とも言えませんね」
「友達が欲しい」
「もうちょっとだけ待ってください。訓練期間が終われば」
「友達が欲しい」
「・・・・・えっと、ですね」
「友達が欲しい」
「・・・・・・・・・」
「友達が欲しい」
「・・・・わ、わかりました。そこまで言うなら私が」
「俺と、セ〇クスフレンドになってくれないか」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」
「〇ックスフレンドになってくれないか」
「嫌です」
「いや、違くてちーがーくーてー。アレだよ、・・・・だから、あれだ」

「・・・・・・・・・」

「・・・・友達とか、どうやって作ったらいいかわからんし、向こうじゃ、そういう奴いなかったからさ」

「それでもあのセリフはない」

「それはすまん。ええと、だからだな・・・・俺はその、友達がいなくてだな・・・、訓練が終わったとしてもまともに友達が作れるかどうか微妙でな」

「あー・・・・・」

「だから、だ。俺はだな、・・・・・お前と、友達に」

「・・・・・・・・はぁ、しょうがないですね。――――――――――初めまして、クトウさん」

「！・・・・・初めまして、ルカトエーゼ」

「もしよろしかったら、私と友達になってくれませんか？」

「・・・・・・よろしくお願いします」

「よろしくされます」

「友達か・・・・・・いいもんだなぁ」

「そうですね。友達は人生を輝かせる宝物ですから」

「そうか・・・・そうだよなぁ」

「では、友達なのでこちらに目を合わせてみましょうか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ふふ、気付いてないと思ってたんですか？クトウさんが人と三秒以上目を合わせないのはお見通しですよ」

「くっ・・・・！」

「普段はあんなに強気なのに妙なところでヘタレですね」

「ルカ子貴様・・・・！」

「なんですか～？」

「ぐぅ・・・」

「ふふ・・・、クトウさんは照れ屋さんですね～」

許さぬ

「己ぇ・・・あの脳みそドグサレゲロ豚野郎・・・！何ルカ様といい雰囲気になってやがるですかぁ・・・！明日の訓練は通常の倍の量を半分の時間で消化させてやるです！精々ゲロ塗れでルカ様に引かれやがれです！」

## 短編集的なものを突然やりたくなったんだ（後書き）

特に意味はない。

## 戦後処理は大切だぞ（前書き）

感想か・・・・自分には遠い存在だ・・・・。

**戦後処理は大切だぞ**

「話は飛ぶけど気にしないでね！」

「どこまでも適当な奴だ」

少年老い易く、学成り難し。一寸の光陰軽んずべからず。――――――――――――――――――――朱子

「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおなんじゃこらぁあああああああああああああああああああああああああ！！？」

「落ち着いてくださいクトウさん、ただのモンスターの焼死体です」

「ただの・・・これが標準サイズか。異世界半端ねぇな・・・」

やぁ、間部功刀だよ。
今戦後処理に付き合って、モンスターの死骸の除去とかを手伝いにあの忌まわしき平原に訪れたんだ。
傷がメチャクチャ痛むけど、グルムドリアって魔法使える人ってあんま居ないらしくて怪我人の俺の手も借りたいくらい忙しそうだったので、美衣の様子見とかのついでに手伝うことにした。
あれから数日たったので骨をくっ付くようにルカ子の回復魔方陣や回復魔術を併用したので大部動けるようになったので、そろそろベッドから抜け出したかったのもあるが。
つっても、ドでかい真黒な何かを俺が触れると何故かはわからんが触れた部分から塵となって崩れ始めたのですぐに終わってしまったが。

「あらやだ、綺麗・・・・」

「焦げくさいですけどね」

「つーか触ったらすぐ崩れちゃったぞ、いったいどうなってんだ」

「多分、これがグリムリバーのモンスターであることと、貴方が救世主であることに関係性があると思うんですが・・・」

「ほむほむ」

「・・・・すいません。詳しい事までは私も」

「そっかー」

ハラハラと光の粒のような塵へと空に還るそれを見つめながら、ようやく今回の騒動が終結に向かい始めた実感が持てた。

「それじゃあ、街の方へ戻りましょうか。避難していた街の人達がお祭りをやるそうですよ」

「マジでか、それは俺に参加しろという事だな」

これが、今後も続いていく闘争のほんの始まりに過ぎないと分かっていても、今はしっかりと立っていようと思った。

「お疲れ」

「ん」

迎えの馬車には我が妹が不機嫌なむくれっ面で同行していた。
特に会話はなかったが、沈黙が態度を表しているのが理解でき、それだけ心配かけたことを今さらながら申し訳なく思った。
しかし、俺は止まることはできない。
既にこの身は救世主として召喚された時点で、この世界の為に遣い潰されることを強要されている存在だ。
そして目の前妹も、召喚されてこの世界に居るという事は例外ではないのだろう。
それならば、せめて俺が前に出てこいつの負担を減らさねばなるまい。
どうやら姫様達は協定の為に首都部に向かうらしく、街に残留して

いるのはグラハム将軍部隊とフィールメト国軍の一部、んで俺と指揮官ルカ子。
大体６００人程度の人員で作業を進めていたらしい。
ところで国内の方は大丈夫なの？ってルカ子に聞いてみたら、地方都市や各自治体の防衛を行っているギルドなどに義勇軍の募集を行った結果、相当数が集まったらしく、実力的にも普段から自分たちでモンスターと戦う精強な組織力を持っているのでさほど心配はないらしい。
でだ、目下の問題は目の前のしかめっ面なお姫様な訳で・・・・・。
ルカ子はこの重苦しい空気を感じ取っているのか、眼を瞑って静かに佇んでおり、一切の反応を示さない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

こう、なんだ。
気まずいな。うん、すげぇ気まずい。
これ謝っといた方がいいのかな。
・・・・・心配してくれたんだろうし。

「あー・・・おい、マイシスター」

「・・・あによ」

「いや、うん。あれだ、今回の事で大分心配かけたから謝っとこうと思ってな」

「えっ？」

「えっ」

・・・・・・・・・・えっ。

「あ、ごめん。別にそういうことで黙ってたんじゃないから」

「なんだと」

一体どういう事なの。
今までの俺の葛藤は一体どういう事なの。

「いや、生理来てただけだし」

「・・・・・・・・・・お前な、女の子が堂々とそういう事いっちゃだめだろ」

ドッと疲れた希ガス。
何だよもう。疲れたよおらぁ。
考えんのめんどくせっ。
ちょうど街の方にも着いたようだし、怪我の疲労だけでない疲れをベッドの中で癒そうそうしよう。
フラフラ～と馬車から降りたった俺は、そのままルカ子たちの事も気にせずお祭りの準備で忙しそうな人々を避けながら割り当てられた部屋へと向かった。

「素直じゃないですね」

「うっさい」

バカ兄貴が馬車から出ていった後、私は目の前の女を睨みながら対峙していた。
もともと今回戦後処理とやらに参加にしたのはこの為なのだ。
今までの状況は大体把握していた。
しかしそれは混乱していた私が必死で掻き集めた最低限の内容だ、

召喚された事情などはあの将軍すらほとんど説明してくれなかった。
それほど切迫していた状況であるということはバカ兄貴の足らない説明から理解した。
救世主――――――――、この世界の何者かが世界に仇名す存在の排除の為に遣わされた掃除屋、均衡装置、言い方はいろいろあるが、要するに使い勝手のいい強力な駒ってことだと私は思っている。
世界という存在がどういったものかは分からないが、この世界の問題をわざわざ別世界の人間を拉致って押し付けているあたり、相当な力を有しているのだろう。
私たち以外にもこの世界には複数の強力な救世主が各国で召喚された理由として、グリムリバーという謎の大陸が現れたと聞かされたが、その情報が本当であるかどうかさえ今の私には分からない。
だからこそ、もっと詳しい情報が必要だ。
ここで生きる以上は泣き言よりも相手から情報を引き出す搦め手の虚言を湯水の如く吐き出さなければならない。
ここでの私は何の地位の約束されていない、子供よりも非力な存在だ。
ま、向こうでもあんまり変わらないけど。

「と、言う訳なので詳しい事情、もしくはあのバカの近況を教えてほしいのよ」

「あー・・・はい。分かりました。別に断る理由もありませんし」

「ぶっしつけで悪かったわね」

「いえ、妹さんですよね。あの人の」

「ええ、あれは私の兄よ」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

作り笑いから大体察した。

「お世話になってるわね」

「いえ・・・・・」

なんだかこの人とは仲良くなれる気がした。

なんとなく握手してみる。

「・・・・・」

「・・・・・」

なんだか無性にうれしい。

「イイ人ね！イイ人ね！」

「イイ人です！イイ人です！」

そんなこんなで、この世界に来て初めての友人が出来たり出来なかったり。

「すげぇ、祭りだわ」

窓から街の様子を眺めると、あちらこちらに屋台やらイルミネーションやらの準備に取り掛かっているのが見えた。
心成しか皆さまの顔が綻んでいる気がしなくもない。
いくらモンスターの被害があるとはいえ街ごと避難させられるような事態はこの世界でもかなり異例らしいから、無事危機が過ぎ去っ

たので当然の反応といえば納得する。
それとも世界は違えど、人の祭り好きは共通事項なのか。
どちらにせよ、死にかけてまで勝ち取った結果だ。
その結果が笑顔というのは、頑張った価値があったのかもしれない。
現実的に考えてかなーりきつかったけど、アンチ国家とかしたくもなったけど、よく考えればそこまで無かった気がしたので俺は疲れと共にベッドへバタンキュー。
ぐへー、と情けない気の抜けた声を出し、完全に脱力した状態になる。
あれから2週間程経ったが、ようやく骨がくっ付いたので多少固定した腕が邪魔だがくつろぐ分には問題なく過ごせるようになった。

「いっせかいねー。慣れって恐ろしいもんだ」

いつの間にかネットでエロいサイトを覗かなくても平気になっているし、ティッシュの代用品として魔法で処理できるようになってから色々試行錯誤する必要がなくなっている。
主に思春期の男子にとっては身近な悩みを解消したからか、他に特に不便な内容もなかったし、異世界生活に対しての不安も不満も特になかった。
訓練は地獄だし、死にかけはしたが、飯の恩は万国共通の命をかけるだけの物だと俺は思うしな。
餓えるってのは存外キツイものがあることを、過去の生活から学んでいるだけその想いは強い。
さて、今までの飯の恩は返せたと思うが、残念ながら今後ともお世話になるだろうから恩はまたストックされていくことだろう。
別段それを不味いとは思わない。
某異世界モノとかでは国家の闇っぽい奴に警戒するアタマノイイ主

人公の姿を見ていると、俺もまずいんかなーとか思ったりもするが、正直言って杞憂も甚だしかった。
命に対する考え方は確かにシビアな面もあって恐いところもあったりするが、それは逆にちゃんと現実を知っているということであり、少なくとも粗末に扱われることはなく利用価値がある間は生かされるくらいは信用できるということだ。
正直俺の今のところの利用価値なんてマナの正常化くらいしかない訳だが、戦力面に関しては全く、これっぽちも心配する必要がないし。
マジかっけぇよな、俺の師匠達。
この前聞いたんだけど、クソツインの手袋ってルカ子が作ったらしいんだよね。
その理由ってのが、殴っても痛い程度に威力を抑える為らしい。
それしてなかったら初めて殴られた時どうなってたんだろうと顔が青くなったこともいい思い出だ。

「てか、グルムドリアってあそこに戦争しかけたんだよな。・・・・・下の人達はご愁傷様としか言えねぇ」

グラハム将軍は凄かったけど、あのレベルでも一番相性がいいルカ子にすら勝てないだろうし、そんなに優秀な人多くなさそうなんだよね、この国。

「あー・・・・ちょっと眠くなってきちゃったな」

久しぶりに動いたからなー、視界がぼやけてきたぜ。

もう無理、堕ちるわ。
おやすみなさーい。

**お祭り、それは男を普段より調子に乗らせる魔の儀式（前書き）**

自重はしないぜ。
歌詞無断転載がなんぼのもんじゃぁーーーーーーーーい！！！

・・・・・・すいません調子に乗りました。

## お祭り、それは男を普段より調子に乗らせる魔の儀式

「一番手、間部功刀っ行きまっーす！」

「キャー！クトウさんかっこいいー！」

「流石は英雄さんよね！ー」

「惚れるぅー！！」

「気持ち悪いんだよジジイッ！？」

「やーねー、照れなくてもいいじゃなーい」

「殺すよ！？比喩でも何でもなく殺すよ！？」

「もーかわいいわねークトウちゃん！流石はこの街の英雄ね！」

「キモイつってんだろ！ちょ、どこに手ぇ入れてんだてめぇ！？」

「クトーウちゃぁあああああああん！！」

「うぎゃぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！！？」

人生は道路のようなものだ。一番の近道は、たいてい一番悪い道だ。

――――――――――――――――――――――――フランシス・ベーコン

「あん・・・？あんだぁ？外が・・・騒がし・・」

周囲の騒音に目が覚めると夕陽が差し込んできた。
おおー・・・もうこんなに経ってたか・・・。
目を擦り窓際へ辿り着きファー、と欠伸を一つ。
こりゃ夜更かし確定だな・・・と、視界の歪んだ眼を再び擦って窓を開けはなった。
途端、香ってくるイイ匂いと人々の喧騒が自分の感覚を強く刺激した。

「おー・・・こりゃ立派だなぁ」

お神輿は流石に無かったが、屋台や何かのイベントの溜り場など、向こうの世界での生活を懐かしませてくれる代物が目に入る。
そういえば向こうじゃ人混みが好きじゃなかったからあんまり祭り

に行ったこと無いなぁ。
風情とか感じないって訳じゃないんだが、それでもわざわざ人混みの中を歩いてまで求めるもんじゃなかった。
家の中でエロゲーやってた方がマシというか・・・・・・。

「あ、そういやＨＤのデータ消してない」

やばい、あれには俺の趣味とか趣向とか兎に角人様に見られては良くない代物が数多く入っている。
親戚も居ないので、俺達が失踪したことが気付かれるのは大分後になるだろうが、もし見つかって他人に見られたら恥ずかしいどころの話ではない。
軽く自殺物だ。
しかし処理しようにもここは異世界、手の出しようがない。
どうしようもない現実を前に、俺は今まで味わったことのない絶望に叩き落とされた。
窓枠にグダーッと布団が干されるように脱力して、この世の理不尽を呪う。
こんな現実、知りたくなかった。
そのまましばらく下のお祭り騒ぎを眺め陰鬱とした気分をある程度払拭した俺は、さらなる改善を行うべく街を回ってみる事にした。

「ふぅ～・・・・さてと、何処へ行ったもんかね？」

ザワザワと四方から聞こえてくる楽しそうな声、多少苦手な人混みと喧騒も、これが自分のやり遂げた結果だと思うと悪くはなかった。

しかしこう人が多くては、怪我人の俺では少々歩くのに不便だ。
ゆっくり動いていると人とぶつかるかもしれないし、もしくはぶつかられるかもしれん。
早速壁にぶち当たった俺はしばらくその場に突っ立っていると、一人の初老の男が、屋台で買ったのか大量の食糧を抱えて俺の隣りへやってきた。
ふとその顔を横目で見ると、俺は驚愕と共にそいつから目を逸らす。

（な、なんだ今のは・・・！？）

先程網膜に焼きついた視覚情報を整理しようとするが、その情報のあまりのインパクトに俺は正しく思考することが出来ない。
もしかして、さっきのは見間違いなのではないか、いやそのはずだ（反語）。
視力が片方落ちてるらしいからな、もしかすれば今のはぼやけてそう見えただけかもしれない。
ゴシゴシと目を擦り、もう一度その男の方を見る。

「はぁい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

そこには十分に厚化粧と断定できるほどの濃いマスカラと口紅を纏った、無駄な努力が失敗しているとしか思えない醜悪な顔面を携えた初老の男がこちらを覗きこんでいた。

「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!?」

思わず悲鳴を上げ、魔術まで使ってその場から飛び退り距離を取った。

腕は使えないので戦えないと判断し、いつでも逃げられる体勢を整え男を注視した。

やはり今見えたアレは見間違いではなく、男の顔は厚い化粧で覆われており、男がソッチ系である事をこれでもかという程自己主張していた。

こんな奴に絡まれるならやっぱ部屋に引き籠ってれば良かった、という先に立たない後悔が頭に浮かんだ時、目の前の怪物が失礼なとでも言うように眉を顰めた。

「あら、怪我をしてて大変そうだから声をかけてあげたのに、随分な態度ね」

「うっせぇよ。今すぐ俺の前から失せろ」

その喋り方からもやはり男の中身が別物であることを確信させる。心配してくれた相手に対してかなり失礼な態度だし、別段そういう奴等に対して偏見があるわけではないが、目の前の生き物は俺の感性を正直かなり害していた。

化粧するならするでもっとマシなやり方があるだろうに、男の顔面はもはや見た者から強制的に威圧感を引き出す環境兵器と呼んでも過言ではない。

あまり関わり合いたくないのが本音だ。

「んもぉ、失礼しちゃうわ」

「それは悪いと思うが、お前も十分悪い。俺はソッチ系の奴等に対して偏見はないが、それでも貴様の見た目は、ない」

「んなこたぁ、あなたに言われなくても解っているわ。でもね、これが私のキャラなの」

「確かに雰囲気的に見ればいい奴そうだが、せめてそのインパクトの強過ぎる化粧はもう少し緩めた方がいいと思うぞ」

言ってる間もジリジリとこちらとの距離を地味に縮めようとしてくる男に抵抗し、こちらも背に壁を付けないように人混みを背にしながら後退する。

こいつ、結構強いぞ。

動きの追い詰め方から判断すると、見た目と体格に反してフットワークは軽いほうのようだ。

ますます油断できない、こいつに捕まった後の事などあまり考えたくない。

未だ筋肉痛の治まらぬこの身体でどこまで逃げれるかは解らないが、男に付き合って楽しい祭りが潰されては敵わん。

術式を組み、体内のマナを循環させた時だった。

「はぁ～・・・・、解ったわよ。声かけてビックリさせちゃってごめんなさいね？これでいいかしら？」

「あ？ああ、まぁ・・・」

意外とあっさり引いた男に拍子抜けする。
そんな俺の顔が可笑しかったのか、男は少し微笑む。
その顔は馴れてない俺からすればキモイの一言だったが、流石に相手の感情くらい表情で理解したのでその一言は控えた。
どうやら奴は、俺に対して悪意は無いようだ。
顔のインパクトから失礼な態度をとってしまったが、間が開いて落ち着きその印象が薄れてきた今では少しばかり罪悪感があった。

「まぁ、俺も悪かったな。初対面の対応としては今のであってた気がすっけど」

「ん～そうね～、だから職場のスピーチさせて貰えないのかしらね～。それはそうとして、謝罪は受け取って置くわ。ついでに名前を教えてくれない？」

「あまりお前と関わりたくねーんだけど・・・ま、いいか。俺の名前は、間部功刀だ」

「クトウくんね～イイ名前だわ～・・・・・・。ん？クトウ・・・？」

「んじゃ、声かけてくれてありがとな」

「ちょぉおおおっとお待ちになって」

「ッッッッ！！？」

今後関わり合いたくなかったが、声をかけて心配してくれた礼と先の態度の謝罪も兼ねて名前くらい良いかなと思いささっと名乗って帰ろうとすると、ガシッと肩を掴まれ耳元で静止の言葉を囁かれる。ビクッと手を払って振り返ると、今度は正面から肩を掴まれ、男の破壊力満点な顔面が視界をドアップで埋め尽くした。

「ちょ、放せ！？最終顔面兵器みてぇな顔近付けてんじゃねぇよ！？」

「あなた、今マナベクトウって言ったからしら？」

「そうだよ！？それがなにか！？」

「やっぱり、あなたがこの街の救世主だったのね！キャーノリオ感激ぃーーーーーーーーーー！！」

「うぎゃぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！？！！？」

黄色い悲鳴と共に大量の荷物を運ぶことが可能なその分厚い胸板に抱きしめられる。

悪夢以外の何物でもなかった。

その後その抱擁から解放された時には、俺はこの世の理不尽を必ず抹殺すると決意していた。

「ごめんなさい！つい興奮しちゃって」

「いや、もういいから。つーかあんま近づくな」

「クトウちゃんがまさかこの街の英雄だったなんて知らなくてね～」

「ああ、うんそう」

あの後お詫びという事で、こいつの知り合いが集まっているという店でお詫びして貰うらしい。

らしい、というのはこいつの話をナーナーで聞いていたからだ。
仲間って、カマ仲間か。
初老に近い年になってもお釜というキャラを突き通す人はテレビとかでも見たが、こいつみたいに濃いキャラじゃなかったはず。
逞しいという部分では共通しているようだが、せめて美しさという部分にも拘って欲しかったものだ。

「んも～、連れないわね～。でも～私のお仲間を見たら態度変えると思うわよ～」

「あ？店で宴会ってことはスタッフとかだろ？お前の店のスタッフつってもなー・・・」

「ふふふ、まぁお楽しみって事で、ね？」

ウィンクを決めるノリオ。
こっち見んな。
若干気分が優れなかったが、ただ酒でも飲めばすぐ良くなるだろうと思い直してノリオの店へ向かった。

「みんなー帰ったわよー！！」

「あ、店長！」

「おっそぉ～い！皆待ちくたびれちゃったよー！」

「ごめんごめん。実はちょっとした拾いものがあってねぇ～？」

皆、俺今すごいところに来ている。

「え、なになに？」

「ていうか、後ろの男の子誰？」

「ふふふ、聞いて驚かないでよ～？」

ノリオの店といわれて一番に想像したのがオカマバーとかそこら辺

の風俗的な店だった。
だがしかし、今、おおおおおおれの立っているこの場所から見える店内には、

「実は女の子とか？結構美形だし」

「でも怪我してるわよ。包帯巻いてるけど肩幅あるっぽいしやっぱ男の子よ」

「ざ～んねん、実はね～この怪我って今回のモンスター襲撃での名誉の負傷らしいのよ～」

「えっ？てことは軍人さんってこと？」

「もっと凄い子なのよ～」

「軍人さんより凄くて怪我してるって・・・・」

「もしかして・・・」

そんな悪夢のような光景ではなく、むしろ世間の男達が羨む美女達の園が広がっていた。
風俗店は風俗店でも、いわゆるキャバクラ的な内装の女の子一杯の普通の風俗店だった。
いや、普通の風俗店も入ったこと無いけどさ。

「て、店長、その子もしかして・・・！」

「そう、この子はこの街をモンスターの襲撃から命を貼って守ってくれた救世主なの！！！」

一瞬、店内がシーンと静まる。
女の人ばかりの状況はこっちに来てから嫌という程あったが、ここまで大勢の女性の視線に曝されたことのない俺は、どこを見渡しても目があってしまうので慌てて俯く。
その間も店の時は止まったまま、彼女達の視線は俺の居心地の悪さを更に煽ってきた。
このまま逃げちまおうかと思った瞬間、

『キャァァアアアアアアアアアアアアアアアアァアアアアアアアアアアアアアアアア！！！』

爆発したような歓声が店内どころか近所中に聞こえる程響き渡った。

「あなたが救世主なの！？もっと顔見せて！！」
「ありがとう！あなたのお陰でこの店を離れないで済んだの！」
「ちょっと、怪我してるんだからそんなに群がらないの！救世主さんは私が御持て成しして差し上げるんだから！！」
「抜け駆けはずるいわよ！出し抜こうったってそうはいかないわよ！」

「ねぇねぇ救世主さん、戦った時のお話を聞かせてよ！」

「私も聞きたーい！」

やばい、俺緊張してる。
ガチガチに緊張した俺は、そのまま大勢のお姉さま方に促されるまに席に着く。
おおおおおおおおおおおおおんなって、ここここここんなにやわらけぇもんだったのか。
当たってる、すげぇいろんな柔らかい部分が当たってる。
アマガミの委員長も言ってたな、これがあの「当ててんのよ」、か。
くっ、所詮は俺も若造だったってことか。
普段はエロい事平気でやったりするけど、こういう馴れない事態だとテンパってダメだわ。
落ち着いて酒も飲めやしない。
だって口で含んだのをキスして飲ませようとしくんだもん。
それ何処のエロゲ？

「救世主さんっていくつなのー？」

「じゅ、１６っす・・・」

「へー若いねー、だから反応も初々しくてかわいいのかー！」

「うぉっ！？」

「あ、ずるーい！私も私もー！」

両サイドの腕に伝わる谷間の感触に、俺は一掃硬直するが彼女達はお構いなしにグイグイと男のロマンを押し付けてくる。
いつも妄想しているシュチュエーションより遥かにエロくないはずなのに、俺は完全に冷静さを失い困惑していた。

「ほらほら、救世主さんが困ってるわよ。反応が面白いからってからかわないの」

「えー、だって店長、救世主さん凄く可愛くないですかー？」

「ええ、それは私も認めるわ。ジュルリ・・・・」

「おい、今ので全て台無しだぞ」

ノリオの不気味な舌舐めずりで一気に緊張の解けた俺は、両腕にくっ付いているお姉さま方にやんわり断りを入れて離れてもらい、目の前の怪物に堂々と酒を要求した。

「とっとと詫びの酒持ってきやがれこのやろー」

「野郎じゃないわ、マダムと呼んで」

「いや、それは無理があんだろ・・・・」

その胸板はどう考えてもマダムと呼ぶには逞し過ぎる・・・。
いや、暑苦し過ぎる。
ここまで見事なオカマキャラは長くない人生でも初めてみるぜ・・・。
このまま奴のペースに乗るのは癪だ。
一旦、異性への沸き上がる情熱は置いておき、出来るだけ嘲笑するような顔作り上げノリオを睨みつけてやる。
挑戦するように見上げる俺の視線に気付いたノリオは、面白いとでも言うように口角を釣り上げる。

「ノリオ、酒だ。お前の店の実力とやら、堪能させて貰う」

「へぇ、救世主ってのも伊達じゃないわね？いいわ、今日は御祝いで店は閉めてたけど、貴方の為に全力で御持て成しして上げるわ！！」

「くくく、俺の趣向を満足させられるか？」

「セクハラ以外なら笑顔で対応、これがこのお店の鉄則よ」

まるで極上の獲物を捉えた狩人（ハンター）のように笑みを浮かべる2人。
両者の間にはただならぬ意気込みが感じられ、それが伝わったかのように周りの従業員の顔も引き締まっていく。

「これはただの持て成しではない」

「互いに信念と誇りをかけた」

「「獣同士の喰いあいだ」」

俺は器用にボトルを包帯の巻かれた手を使って飲み干し、開戦の狼煙を上げた。

「ふはははははは！すげぇなノリオ！これがキャバクラか！」

「キャー！もう一杯もう一杯！」

「救世主さんサイコー！」

「だぁっはははははははははは！！樽ごと持ってこぉい！」

結果、陥落。
異世界から来た救世主という名の獣は、目の前のメスに見事に捕食された。
だって楽しいんだもの。

「一番手、間部功刀っ行きまっーす！」

「キャー！クトウさんかっこいいー！」

「流石英雄さんよねー！」

だから俺は思う存分堪能していた。
怪我をしているので色々介護されながら酒を飲ませて貰ったりしたり、あーんして貰ったり、エロ際どいものでは谷間に挟んだケーキを食べさせてもらうなどご奉仕を受けた。
そんな感じに完全出来上がっていた俺は、セッティングされたマイクへ向かい機嫌良く歌いだそうとしていた。

「惚れるぅー！！」

ノリオの野太い歓声を聞くまでは。

「気持ち悪いんだよジジイッ！？」

「やーねー、照れなくてもいいじゃなーい」

いつのまにか背後に移動していた奴は身をくねらせながら俺の胸に指先で擽る。
正直吐き気がした。酔いではない。

「もーかわいいわねークトウちゃん！流石はこの街の英雄ね！」

「キモイつってんだろ！ちょ、どこに手ぇ入れてんだてめぇ！？」

「クトウちゃぁあああああああああん！！」

「うぎゃぁあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！？」

抱きついてきたノリオを高速魔術展開を発動し蹴り飛ばす。
モンスター防衛戦の後、自分で回復魔術をつかってみたら以前よりも早く展開することが出来た。
ルカ子曰く、イメージの固定化が進み、魔術の式をより自然なものとして自分の中に取り込むことができた事により展開速度が自然と上がったらしい。
緊急時はその比ではなかったらしい、思考した瞬間に発動しおったわ。

「ぜぇぜぇ、全く油断ならねぇ奴だ・・・」

「へぇ、誰が油断ならないんですか」

「あ、決まってんだろ。そこでノビてるニューハーフの成りそこないだよ」

「そうなの、それは良かったわね」

「あ？何が・・・・」

そこで気付く、この声聞き覚えがある・・・・・・・。
あ、いや皆まで言わんでもわかるな。
せーの、と心の中で呟いて声のした方向へ顔を向ける。

「こんばんは、クトウさん」

「御機嫌よう、お兄ちゃん」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・・、笑みの裏に覇気を噴き出させて店の玄関に立つ2人の知り合い。

「・・・・・・・・・かーなぁーしぃーみーのーむーこぉーへーとー」

「全く・・・、部屋に居ないので探してみれば・・・・・。何をやっているのお兄ちゃん？」

「あなたの魔術反応があった場所を辿ってみれば・・・、こ、こんな如何わしい場所にいるなんて・・・！」

今回の落ちはこれかー・・・・・。
怪我してっからお手柔らかに頼みたいんだけどなぁ。

「無理」

「これは・・・流石に」

「ですよねー・・・・・」

ふっと笑い、お姉さま方に背を向け手を広げていっそ清々しい気分でモンスターより恐ろしい笑みを受けべる2人の断罪者の元へ歩いていく。
ま、いい夢見れたじゃないか。
例え現実がそれを引き裂いても、

「あの谷間だけは忘れねぇ・・・」

微笑む俺に、妹のドロップキックがめり込んだ。

## お祭り、それは男を普段より調子に乗らせる魔の儀式（後書き）

こういう話の方が進むなぁ・・・。

## 久々に訓練というかリハビリ（前書き）

ノリオさん・・・使い捨てるには勿体ない程濃いキャラだったからなぁ。
よし、こじつけ設定を即興で考えて・・・・・。

**久々に訓練というかリハビリ**

「病み上がりにこの仕打ちはダメなんじゃないかな」

「身体鈍らせたら戦士は役立たんだろう」

「怪我は完治してんですから問答無用です」

「いや、新しい生傷が・・・」

「いいじゃないか、話の流れを聞いてるとルカトエーゼが嫉妬しているようにしか思えんぞ」

「ふっ、罪深い男だぜ・・・」

「そんな罪深い貴様の為に、我々が糞忙しい中延々と考えてきた新たな訓練法を仕込んでやろう」

「えっ」

「喜ぶです豚」

「待て待て、あれ？おかしくね？俺って卒業試験合格したんじゃないの？」

「ん？ああ、第一期訓練は合格だな」

「なん・・・だと・・・？」

「ふー、ようやくリミッター限定解除ですか。今までは封印でしたから出力抑えられてましたですし」

「解った、俺死んだ」

「という訳でこれからもよろしくな弟子」

「よろしくですクソ弟子」

時間を浪費するな、人生は時間の積み重ねなのだから。――――――――――――ベンジャミン・フランクリン

「かかってこいよぉ！俺の神瞑古武術はつえぇぞ！」

「とりあえず言っておくと、相変わらずの喧嘩スタイルです」

神瞑古武術は古くから無手による暗殺を目的とした武術であり、現代に至るまでの様々な戦地状況に対応する為、今なお変化を続ける流派なのだ・・・・・という設定を中学の頃考えた。

「まぁ、今までの訓練は身体造りがメインだったし、魔術に関しても身体強化系しか教えていない上速度重視で練度は低い。私の戦術も戦いにおける正道ではなくあくまで実戦の中で生き残る為の術だからなぁ」

「模擬戦も模擬戦で、兎に角避けさせることの熟達に焦点を置いてましたから、技を見る余裕も与えず攻めまくってたです」

「ボッコボコだったからなぁ・・・・・・嫌なこと思い出しちまったぜ」

「ま、少しマシになってるはずです。避ける事と見る事と速さに関しては私達の想像以上に成長しましたですし」

「うむ、私も誇らしいぞ」

と、ニコニコ笑いながらクルーネさんが抜刀し斬りかかってくる。

「うんうん、不意打ちにも対応できるようになった」

「・・・・・・・・・・・お蔭さんで」

こいつに対応できるようになるまで訓練が始まる前に終わったことが幾度となくあった。

騎士としてどうよ？とクルーネ姐さんに言ってみたが、

『あ？騎士道とは己の正義だ、そして戦いとは勝てば正義だ。故に邪道だろうがなんだろうが勝てばいいのだよ』

実に立派な騎士道だった。
しかし今のも危なかった。
殺気がないってのはかなり挙動が察知し難いが、それ故に攻撃の動きに隙というか、当たればいいやと考えている分の抜け道みたいのがあるのだ５６回目の不意打ちで解ったのだが、未だに当たる時は当たるので避けられない時がある。
今も高速展開で形状固定した身体強化した右腕で剣の根元を防御していた。
不意打ちでも姐さんの抜刀はやすやす俺の魔術を切り裂いてくるので、切っ先ではない部分で受け止めなければならないのだが、後一歩違和感による反射が遅ければ首を刎ねられていただろう。
命の危険が付きまとうなんて、なんと素人に優しくなさ過ぎる訓練なのだろうか。
これに付いていけるようになった俺も俺だが、こんなんがまともな訓練法であるはずがない。
才能の伸びしろを完全に無視した誰でも強くなれるような訓練だとは説明されたが、確かにここまで命の瀬戸際に馴らされれば嫌でも強くなるだろう。
まぁ、挨拶されたら俺も遠慮なく返すけど。

「日本の柔道を舐めんな、よ！」

「うむ、お前の国の護身術は重さや力がある方が逆にやり難いからな」

伸びきった腕を抱きこむように全身で組みつき捻り上げながら関節を曲げる。
殺(と)った！と声を上げようとした時だった。

「前を失礼しますで～す」

拳を振りかぶったもう一人の師匠、ネリア・ブロン・クソツインテ。
三人の師匠の中で一番俺と戦い、俺が苦渋を嘗めさせた女。
しかし悔しい事にこいつも俺も主なスタイルは無手、学ぶことは多い。
例えば今の状況のように、無理に近づかないで確実に殺れる時だけ前に出て攻撃するような戦法とか。
防御に意識を向けた瞬間、姐さんも絡め技から脱出されツインテの攻撃に合わせて蹴りを放たれた。

「うごぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

逆さまの視界から腹部の拳と頭を狙った蹴撃を片腕ずつ弾かれながらも防御する。
結果地面を受け身を取りながら転がり出来るだけ衝撃を身体から逃がしながら魔術を頭の中で構築していく。
来る、と思った時、見上げた視界の半分が陰った。
パンツ、見え――――――――――――

ズドンッ！

なんとか発動が間に合い転がる勢いを利用してバク転するように跳ね上がると、先程まで居た場所から砲弾が落ちてきたかのような派手な轟音が鳴り響いた。
いくら魔術使ってるからって人体でなんであんな威力が出るんだよ、ありえね～・・・。
地面にめり込んだツインテの踵を見ながら痺れる両腕を握り直して再び迎撃の準備を整えた。
魔法使いってもっと桃色のビーム飛ばしたり呪文唱えながら戦うもんだと思ってたんだが、２人の師匠のスタイルは俺の妄想の１８０度真逆を行った。
ツインテの使う魔術は極めて単純、身体強化を何重にも重ね掛けしているだけ。
言うのは単純なんだけど実はとんでもないことだ。
アレだ、棒にぶっ刺したゴムボールを高いとこから落とすと一番上の奴は下からの反動を何倍にも増幅して吹っ飛んでくじゃん。
簡単にはそういう原理らしいが、これを人間の体で再現しようとするとかなりの負担と障害がある、ツインテはそれも問題ないレベルの運用が可能というチートなのだ。
その一つ一つの反発作用によって奴の身体能力はゴジラもビンタされれば泣き崩れるレベルだ。
正直人間じゃない。
いや、ギャグで単純な術でも数を重ねれば大魔術を超える事ができるとか言ってけどさぁ！
それだけの術を同時に展開できるってまともな奴じゃ不可能だ、んなモンまず計算とか想像ができたとしても、膨大な情報を己の身の内で制御出来るはずがない。

それができちゃうから目の前のツインテは立ってんだろうけどさ。
今の俺がやればドーピングもいいとこかな、そんなことするくらいなら術式改善とかした方が効率いいし。

「ボーッとしていていいのか？」

「ッ！！」

こちらに向かって蛇のようなグネグネとした歩法で迫ってくるクルーネ姐さん。
この人の戦い方はもっと簡単だ。

「くっ、仕込みはまだ終わって無いんで大人しくしといてくださいよ！」

「甘いことぬかすな、隙があったら攻撃するだろう普通」

「不意打ちと背後からの攻撃はどう考えても最低だろう！？」

「私の攻撃を避ける奴が卑怯なんだ」

「何その論法」

厭らしく姑息に隙を突き、正道を順守し愚直に基本を行う。
クルーネ姐さんの戦い方を言い現わすと“真っ直ぐに外道”って感じか。

蛇のように曲がる剣筋を既に展開の完了した形状身体強化した腕で防御する。
反撃移ろうとした時、クルーネ姐さんが盾を掬いあげ俺の防御を弾き飛ばした。
両腕が万歳するように広げられ、姐さんは前屈姿勢で剣が抜き打ちの姿勢を取る。
訓練の中で幾度となく繰り返したパターンだ。
相手の防御を盾で勝ち上げ隙を作って懐に入り込み斬りつける、この人と組み合うと必ずこれを決められる。
いわゆる俺の負けパターンだ。
しかぁし、今回の俺が今までの俺とは一味違う。
高速展開という技が可能となった今の俺だからこそ出来る。
十分な踏み込みとタメが乗った姐さんの剣は、強化された俺の視力をもってすら捉えられない速度で振り抜かれる。

ガキィッ！！

しかし幾度となく繰り返されたその動作に俺の身体は即時に反応し、肘と膝で横薙ぎされた剣の腹を挟み受け止めていた。

「ほぉ、止められる様にはなったか」

「ったりめーすよ、何回やられたと思ってんすか」

空手で言うところの鋏取り、昔漫画で読んだことがあるので使ってみたのだが、成功したのはこれが初めてだ。

「だが、まだ甘い」

「なっ――――――――ゴハッ！？」

神速の剣を受け止める事は出来たが、肘と膝を使ったことにより動きを止めてしまい、その隙をクルーネ姐さんに思いっきり盾でぶん殴られた。
魔導甲冑で底上げされた身体能力と盾の頑強さが組み合わさり凶悪な威力になったその打撃は、俺の肺の空気を一気に奪って後方へ弾き飛ばした。
またも受け身を取ろうとするが、胸を強打された為かうまく呼吸が出来ずに思考が鈍ってしまいすぐに立ち上がる事が出来ない。
しかしそんな隙を師匠達が逃すはずがなく。

「ほらほら、もう終わりです？」

「ぐっ！？」

目線の先にはボソボソと詠唱を始めているツインテの姿。
奴は己の動きに合わさった速度重視の術式を好み、威力の低さは数と自らの格闘術で補うといったスタイルを取っている。
それは身体強化重ね掛けからも解るが、別にそれ以外の術式が不得手というわけでもない。
ただ単に前準備が面倒という理由で使わないだけなのだ。
確かに魔術砲などは純粋に時間をかければかける程その威力は上が

るが、一定の威力を出す為には相応の時間を要する。
そんな時間があったらぶん殴った方がはえーです、とは奴の談だ。
なので態々奴が詠唱しているという事はこちらを完全に嘗めている
と同時に、

（普段使わねーようなメチャクチャな術式だって事か・・・！）

無様だが、それ以上に死の危険を感じ取った俺は土を引っ掻きなが
ら必死にその場を離れようとする。

「おいおいおいおい・・・・！？」

集まっていくマナが尋常じゃない、色は緑、集束の仕方を考えるに
魔術砲なのは間違いねーが・・・・！！
その場から全力で離れている合間、集束元をチラッと見る。
そこにはんーこんなもんですかねーとかほざきながらやはりメチャ
クチャな密度の集束魔術砲を練り上げて片腕で持ち上げている姿。
ふと、互いの目があった。

「へッ！」

「・・・ッッッ！！」

逃走を・・・、断念。

目標を変更する。
どーせあの規模からは逃げだせねぇ、ならやることは一つだ。
グルッ、と背中を反転し、クソツインテの方へ突き進む。
あの腹立つ余裕を含んだにやけっ面をぶん殴ってやんよぉおおおおおおおおおおおおおおおお！！！

「ふむ、度胸は認めるが無謀だな？」

「どいてくれ姐さんそいつを殺せない！！」

「連れないことを言うなよ、死合いは私が先だろう？」

「はい喜んで！」

今回は見逃してやろう。
だけどチャンスがあったらぬっ殺す。
許せんべ、あそこであのニヤッ、は許せんべよ。
久しぶりだ、この感覚。
絶対強者って奴に見下ろされて、自分の無力感に腸煮えくりかえる感覚。

「・・・・・ってよぉ・・・」

「どうした、早く構えろよ」

「や・・・って・・・よぉ」

「・・・・おい、クトウ？」

「パンツゲットしてやんよぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

俺の中の何かが、解放されていくのが解る。
頭の奥から引きずり出されていくように思い出されるソレは、俺が唯一クルーネ姐さんと優勢に立てた時の術式。
そうだ、何故今まで忘れていた。
アレさえあれば俺は無敵だったというのに。
だが、もう思い出した。
躊躇いは無い、この術式で覚悟して置かなければならないこと。
己の命を暴走させる危険性が急激に高まるという欠点・・・・、こいつらに勝つ為ならば、惜しくは無い。

「くっ、しまった！何かのはずみで封印が融けたか？ネリア！今すぐ逃げろ！後ルカトエーゼ呼んで来い！」

「へっ？一体どういう事です！」

「説明している暇はな――――――――――――――」

「ユゥゥゥウウウウウウニィィイイィイイイイバァアァアァアアアアアアアァァアアアアアアアァッッッ！！！」

覚醒、全ての視界が先程までとは見え方が変わる。
身体の機能が洗礼されていく。

思考がフォーマットされ、回路が再び構築されていく。
俺の封印されていた魔術、どうやらこいつはある“目的”に対する強烈な自己暗示を掛け、その為に全能力を騒動することができるようだ。
そう、普段は眠っている人間の火事場の馬鹿力さえも。
ある目的に向かって――――――――――――――――――――――――

「ちっ、覚醒してしまったか！」

「クルーネさん、アレがこの前言ってた奴です・・・？」

「ああ、気をつけろアレを覚醒させた奴は――――――――――――

――――っ来るぞ！！」

ッ！？なんですかこのマナの交換率！
これだとあいつから膨大なマナが間欠泉みてーに噴き出してることになるですよ！？
こんな状態じゃあいつのマナを探れない――――――――――――――――

「ユゥゥゥウウウニィィイイバァァアアアアアアアアアァァアアアアアアッッッスッッッ！！！！」

「なっ、いつの間にッ！？」

突然吹き荒れるマナの嵐の中から現れたクソ弟子。
固定化されている強化魔術に先程との違いは見受けられない。
しかしその眼は、こちらの事をじっくりと観察しているような眼からは、

『ツインテ美少女かわいいかわいいペロペロペロペロスカート短けぇし誘ってんじゃねーのつか踵落としの時パンツ見えてたしい縞々だったなでもなんか濡れてねぇのが気にくわねぇし動いてる時じゅんっ！みたいな音も聞こえないからがっかりしたぜ流石ツインテだなツインテはパンツは良く曝す癖に身持ち固いって昔から決まってるからな魔法少女も変身の時に裸になる痴女の癖に貞操観念は人並みにあるつもりだからな勘違いもはなはだしいったらねぇな全くだから早く俺に貴様の履いてる汗に濡れた縞々を寄こせよぉツインテなぁなぁなぁなぁなぁなぁなぁなぁ』

「なんなんですかこの変態はぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！？」

明らかに興奮した己の純粋な欲望がだだ漏れだった。
こ、これが封印されていた力・・・！
私達は、とんでもないものを復活させてしまったのではないか。
奴の緩みきった顔見ながら思った。

## 久々に訓練というかリハビリ（後書き）

次回の主人公は暴走する。
言うまでも無いね

## ２０００アクセスありがとうフッー！という訳で談話（前書き）

別に続き書くのがめんどうになったとかそういうんじゃないよ！

## ２０００アクセスありがとうフッー！という訳で談話

功刀（以下ク）「２０００って・・・微妙じゃね？」

ルカトエーゼ（以下ル）「確かに大したことないですけど・・・」

ネリア（以下ネ）「気にすんな、酒が飲めればそれでいいです」

クルーネ（以下クル）「そうだな、宴会といえば酒だな」

ク「んじゃ、俺が一曲行くぜ！」

ル「正気ですか！？この小説家になろうに喧嘩売り過ぎですよ！？」

ネ「あいっ変わらず恐いもの知らずです」

クル「ま、酒の肴にはいいんじゃないか？」

ク「あいしているーあいしているー世界がぁおわぁるぅまーでぇー！」

ネ「しかし、無駄にうまいですー」

クル「ああ、しかも選曲もセンスがあるな。綺麗な歌だな・・・」

ル「あああああああああ、なんて二律背反・・・」

クル「そんときはそんときだ」

ネ「そうですよールカ様も楽しまないとー！」

ル「もー知りませんからねー」

ク「そぉんなことがぁー！かぁんたんにはぁーでぇきなくてぇー！」

優しいものが好きです！暖かいものも好きです！だから、人が好きです！――――――――――――――――燕の妖怪

ク「という訳でやって来ました、温泉」

グラハム（以下グ）「慰安旅行に誘われてやって来ました、グラハムです」

ク「早速だ、覗きに行こうぜ」

グ「・・・・・・いやぁ、やめとこうぜ」

ク「なんでだよ・・・！お前も女の裸抱きしめてぇって思ってんだろ！！」

グ「いや、ガキじゃあるめぇし・・・。経験くらいあるし・・・」

ク「もっとアツくなれよ！男はいつだってアツくあるべきだろ！？」

グ「それにアツくなるくらいなら別の事にアツくなるわ。俺もいい歳だしな」

ク「まだお前２０代だろうが！性欲ギトギトの時期だろ！」

グ「若い時散々ヤったしなー正直見慣れてるし」

ク「ちっ！これだから顔がいい奴は嫌いなんだ！」

グ「それに俺はお前の為を思って言ってるんだ」

ク「あ？そういやお前妙にルカ子の事詳しかったな、ロリか、ペドか」

グ「ちげーよ。純粋にお前の命が危ないって言ってんだよ。俺お前がミンチされるところ見たくないもん」

ク「このヘタレがぁあああああああああああああああああああああああああ！！！」

グ「諦めろ、彼女達の戦闘力はお前が一番わかってだろ？大人しくポーカーでもやって料理待ってようぜ？」

ク「俺は！お前のヘタレっぷりに泣いた！」

ネ「・・・・ったく、全部聞こえてるですよー」

ク「あ？なんだよ寸銅」

ネ「次言ったらぶち殺すですよ？別に気にしてないけどお前に言われるのだけは癪です」

ク「サーセン」

ネ「ま、イイですけど。ところでお風呂入りますけどお前らどうしますです？」

ク「なんだなんだ、混浴でもあんのかよ」

ネ「あってもルカ様がいる限り入れる訳ねーです。ま、覗きたいなら覗いていいですよ？どうせ無理でしょうし」

グ「ん？なんでなん？」

クル「アレだよ、ルカ子の師が昔ここの建設に携わってたらしくてな。女風呂には強力な結界が張ってあるらしいが・・・なんて名前だったか？」

ネ「紋章聖域（アヴァロン）」

クル「ああ、それそれ。それのお陰で覗きとかできないらしいな」

ネ「あの人の結界なら安心なんでこうして誘えるんですけど」

ク「ふーん、あそう。ならいいわ」

ネ「・・・？やけにさっぱりしてますですね」

ク「あ？いや、別にこいつとのポーカーとの罰ゲームの方が興味あるし。覗けねぇ風呂なんて糞だぜ」

ネ「ふーん・・・」

クル「それじゃあ行くかネリア」

ネ「はーい」

グ「・・・・どうしたんだよ・・・急に？」

ク「破れねぇって言われるとさぁ・・・。この俺を前にして無理とか言われるとさぁ・・・」

グ「あぁ・・・なるほどな」

ク「アツくなってきたか？相棒」

グ「そうだな・・・、存外俺も捨てたモノではないな」

ク「・・・・だって俺達は」

ク・グ「男の子だから」

グ「不可能・・・無理・・・困難・・・、絶対だと思っているモノ

を覆すのはたまらねぇな」

ク「女の裸なんぞどうでもよくなってきた。・・・・今はただ、目の前の壁に燃えてるぜ」

グ「しかしどうする？ヨルヒムといえばこの世界では最強の魔導師だった人だぞ。その人が組んだ術式だ、実質不可能に近いぞ」

ク「そうか。・・・・不可能なんて誰が決めたんだよ。俺は認めてねぇし許してねぇぞ」

グ「ふっ・・・流石だな。解った、まずは作戦会議だ」

ク「古典的な方法でいくと床下侵入か？温泉だからな、露天である可能性大だ」

グ「“頂より彫る者”と謳われた彼女の事だ、その程度の事は予測していただろうな」

ク「穴掘りシモンは無理か・・・。どうせなら無防備なあいつらを驚かせてぇな。結界ブチ壊した上で呆然としているあいつらに言ってやるんだ。お前ら下の方まで丁寧に洗えよって」

グ「改めて思うがお前って最低だなｗｗ」

ク「褒めんなよ」

グ「しかし、あの人が創りだした結界ならば神域に近いぞ。・・・壊せるのか？」

ク「任せろ、ここには世界より選ばれた救世主と世界と共に産まれた魔神の剣がある。神なんぞぶち殺してやんよ」

グ「おお、それがこの前契約したっていう創世の魔王が宿った剣か」

ク「ああ、俺だとまだ使いこなせねぇが、お前の属性炎だったよな？特別に貸してやんよ」

グ「マジか！？」

ク「使いこなせよ？マジでこいつ我がままだからな」

グ「炎を司る者としてこれほど光栄なことは無いな」

ク「まずこいつを起こさなきゃなんねーからな、ちょっと待ってろ」

レヴァンティン（以下レ）「・・・・・・・」

ク「あー！あー！たまたまこの前造った木炭が残ってるぞー！どうしようかなー！これどうしようかなー！」

レ「！！飯！魔力！寄こせ！！」

グ「えー・・・」

ク「待て、気持ちは分かるが魔剣としては一流だから。今もガンガン魔力吸ってるし」

レ「んん？なんだ小僧、また我を呼び出したのか。今のお前ではすぐに力尽きると言っただろう」

ク「俺が使うんじゃねーよレバ剣。こっちのハンサムだ」

グ「あ、よろしくっす」

レ「あーん？ふむふむ・・・・、人間にしてはなかなかだな。いいだろう、死なない程度に魔力を貰うぞ」

グ「う・・・お・・！？」

ク「結構きついけど我慢しろよ」

レ「して、小僧。今回は何の用だ？我をわざわざ呼び出したからにはそれなりの話なのだろうな？」

ク「ああ、不可能をぶち壊しに行く」

レ「！・・・ふむ、内容は知らんが、面白そうではあるな」

ク「なんせヨルヒム仕立ての結界だ。遣り甲斐があるだろう？」

レ「ククククク・・・・クハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！よかろう！今回は我の使用を許可してやる！」

グ「やっべー・・・・マジでギリギリまで持ってかれた上に身体のコントロールまで盗られた」

ク「だって魔剣だもの」

レ「グハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！ヨルヒムよぉ

！我を使役した貴様の結界を破るのだ！精々悔しがってのた打ち回るがいい！！」

グ「おおおおおおおおおお、ガンガン持ってかれる！」

ク「グラハム・・・！お前の魂を俺は賛美する！」

ク「という訳でやって来ました」

グ「意識がモーローとしやがる」

レ「我に任せた方がいいと言っておろうが」

グ「意地でも意識だけは渡さねぇー」

ク「マジでお前すげぇーわ」

グ「命よりも、魂よりも価値があるだろう？究極への反逆とは」

レ「ふっ、契約していなければ、貴様を主にしても良かったかもしれぬな」

ク「相棒、お前今輝いてるぜ」

グ「褒めるなよ」

ク「・・・・・・にしても、物理的にもデケーなこの壁」

グ「登れるかもな」

ク「おーし、いってみ・・・・・・・おい、これやべぇ。なんか透明の壁があるぞ、これが紋章結界（アヴァロン）か」

グ「取りあえずぶつけてみっか」

レ「なっ？！いつの間に身体のコントロールをボハッ！！？」

グ「――――――――っってぇえええええええええええ！？クソ痺れた！メチャクチャ堅いぞ！？」

ク「ちょりゃっ！・・・・・なるほど、堅い。なんつー概念してんだ」

レ「貴様ぁ！刀身を直接ぶつけるな！今ので魔力の半分が消し飛ん

だぞ！？」

グ「バケモンだなぁ・・・」

ク「流石はルカ子の師匠だなぁ・・・」

レ「こいつの概念は触れる者の浄化だ！触れた途端、魔で構築されたものは一瞬で昇華されて跡形もなく消し去られる」

グ「・・・・今頃壁の向こうでは、ルカトエーゼ殿やクルーネ殿達が身体を洗っているんだろうな」

ク「ああ、おっぱいに及ばずケツも〇ンコもク〇〇トリスもビラビラしたところとかも」

グ「詳しくはやめろ・・・消されるぞ、運営側から」

ク「俺は権力には屈しないぞ～」

レ「我も今までいろんな人間を見てきたが、ここまでバカな人間は貴様が初めてだ」

ク「褒めんなって」

ル「ふ～、良いお湯ですね」

クル「そうだな、こればかりは本場は違うな」

ネ「2人ともババ臭いです。・・・・お湯あついです」

ル「むぅ、それにしても」

クル「？なんだ？私に洗い残しはないぞ？」

ネ「すごいです・・・浮くモンなんですね、胸。メートル級は違うです」

クル「いや、正直戦闘じゃマジで邪魔だぞ？腕振り回し辛いし、揺れると痛いしな」

ル「う～・・・・ちょっと触ってみてもいいですか？やっぱり隣の芝は青いです・・・」

ネ「ドレインしてやるです！うりゃうりゃ！」

クル「うおっ！？こら、物理的に無理だから！？てか揉むっていうより握って――――――――ひんっ！」

ネ「グへへへへ、可愛い声で鳴けるじゃねーですか！」

クル「このっ、調子にのん――――――や、んっ」

ク「みたいな会話が向こうの壁では成されているはず！！いくぜ！グラハム！」

グ「おう、安心しきっている彼女達に絶対という言葉など夢想なのだと教えてやる」

ク・グ「「解放（リ・ジェネレーション）！！」」

ク「救世主モード（セイヴァーズジャッジメント）・・・」

グ「起源装隔者（ジェネシック・コードマスター）・・・」

ク「壁程度に、俺達は止められねぇ・・・」

グ「俺達の力ぁ・・・活目せよ！」

ク「『世界（ワールド）――――』」

グ「『創世（ジェネレーション）―――――――――』」

グ「いけぇ！」

ク「俺達の・・・・・・全てを越えて！！」

ク・グ「『平和帰焔ニ重奏（エンドインフェルノデュエット）』！！」

ドォオォオオオオオオオオォオオオオオオオオォォオオオオオオオオォオオオオオオオオ！！！！

ク「貴様の罪への救済だ、受け取れ・・・・壁」

グ「起源の炎と共に輪廻に沈め・・・・・・壁」

レ「・・・・まさか、本当にブチ壊すとはな」

ク「さぁお楽しみタイムだぜ！相棒！」

グ「ああ！何裸になってんのｗｗｗっつってからかおうぜ！」

ク「うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！みんなぁーあそびにきたよー！」

キィィィイイィイーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー・・・・・・・・・

ク「ーーーーーーーーーーーーーーッ！？」

ゴォォオォオオオオオオオオオォオオオオオオオオオ！！！

ク「うぉおおおおおおおおおお！！？」（ズザァアァアアアア！

グ「相棒！」

ク「ちぃ！一体何だ！何もんだ！」（ポン！

グ「あ、元に戻った」

ネ「何もんって・・・大馬鹿野郎(おめー)の師匠としか言いようがないです」

ク「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?なんで服着てんの?!」

ネ「あれだけ騒いで気付かないならそいつはバカです。師匠舐めてんですか?」

クル「お前もまだまだ若いなぁ。大体共有の風呂に裸で入るわけ無かろう」

ク「文化の違いかよ畜生っ!」

ル「グラハムさん・・・さいてーです・・・」

グ「あ、これは別に俺は悪くないっていうか、なんていうか無謀に挑戦しようっていう一種の冒険心が・・・」(プシュゥゥゥ・・・

レ「うむ、よく持ったが流石に限界か・・・。魔力も切れてしまったし我はこのまま寝る」

ク「あ!?ずりぃ!?」

グ「あ、力抜け・・・」

ク「あー・・・大丈夫か?」

グ「身体の芯まで吸いつくされた・・・・」

ネ「さーてゴミムシ、覚悟はできたです?」

クル「ふむ、お前も順当に強くなっているじゃないか。どれ、ここで一つ死合いといこうか？」

ク「反省も後悔もしていません！貴様らの水着姿もそれはそれで眼福でした！」

ル「うぇッ！？」

ネ「なっ・・・！」

クル「ほぉ・・・」

ク「去らば」（ダッ！

ネ「あ！待てこらぁっ！！」

クル「ククククク・・・。さて、ルカトエーゼ。壁の修繕は頼んだぞ」

ル「もー・・・はいはい、私の分もお願いします」

クル「うむ、では行ってくる」

ル「ついでにこの人も持って行ってください」

グ「グッタリ・・・」

クル「うん？引き摺るかもしれんが構わんよな？」

ル「どこか適当なところに寝かしといてもらえばいいですよ」

こんな日常も、これからあるかもしれない。

## ２０００アクセスありがとうフッー！という訳で談話（後書き）

以上、暇つぶし。

**ささめきことを読んだらメチャクチャ熱い最終回への系譜の連続だった（前書き**

かっけー・・・みんなかっけーよ・・・

こんな恋愛をしたい

**ささめきことを読んだらメチャクチャ熱い最終回への系譜の連続だった**

「俺の中の記憶(きのう)が消えていくのなら、俺せめて明日(パンツ)がほしい！」

「なんかとても悪党なことを言ってやがるです」

「名言が迷言になり下がった瞬間を見ているようだ」

「運命(すかーと)さえ俺を阻むことは出来ない、なぜなら俺は紳士(きゅうせいしゅ)だから」

「随分とルビが多いじゃねーですか、まさか作者が嵌ったんですか？」

「もともと厨二病だったからなぁ・・・大方燃えるアニメでも見たんだろ」

「さぁ、戦争(だつい)を始めよう」

「言ってる事は最低です・・・」

「ククククク、楽しくなってきたじゃないか」

不幸を治す薬は、ただもう希望より他にない。――――――――――ウィリアム・シェイクスピア

自己暗示などよりも刻みこまれ、洗脳よりも穿たれ、強制よりもただ堅く。
己という存在を律する。
世界より与えられた意味さえ強襲し、存在という最大のアイデンティティすら自ら否定して。
強大に、荘厳に、熾烈に、至高に、無類に、極限に創られた、救世主としての俺。
解放された俺は、目の前の敵に対して救済を与えるだけの顕現された在りし姿。
そう、これが俺がここに呼び出された意味。
世界が求めた救済だ。

「世界の女の子を皆幸せにする・・・！」

これが俺が求めた救い。

「それが何故下着を脱がすことに繋がるんだ」

「だって俺が幸せなら女の子達も幸せだろう」

「なぜそうなるです」

「ああ！？幸せってのは一緒に居て楽しいってことだろうが！なら俺が楽しんでお前も楽しめってそういうことだろうが！？」

「下着脱がされて喜べと通すとは、とんだ救いだな」

「マジふざけんなです」

だが、これは同時に俺の呪いだ。

「何がなんでも・・・」

「っ！？・・・・これが救世主としてのお前か、クトゥ」

「気にいらねぇですね、その眼」

目覚めたのなら、俺は必ずそれを為す。

「お前達を・・・・・救済する」

「ふっ、舐めるなよ小僧。貴様の救済（ソレ）は救いではなく贖罪だろう？」

「そんなふざけた幻想で、私達を語るなです」

「「だから――――――――――」」

「貴様には救済けてやれんな」

「おめーには救済けられんです」

いざ、参る――――――――――――――――――――。

「『騎士が本道（ナイトオブハイウェイ）』！！」

「『巨神掌（ゴッド・ハンド）』！！」

ガキィィイイィイイィイイィイイイイ！！

左右から襲った我らの攻撃を、奴はなんのひねりも無く素手で受け止めた。

にやつくその顔は先程まで必死喰いついてきた奴の笑みではなく、どこか陶酔した、狂気にも似た破顔だった。

救世主は、この世界に召喚された時点で文字通り“救う”存在となる。

それは自身が体験した最も理不尽な記憶から象られた偶像としての救世主。

世界は彼等の“救い”のイメージを体現した存在へと、彼等を昇華させた。

抗い難い理不尽を、全てを嘲る恐怖を、強奪される無力を、己が突き付けられた運命を、何からも“救い”を与える救世主（どうぐ）として。

彼等は自らの絶望から発生した衝動を、救世主としての救済の根源としている故に、それを救わずにはいられない。

究極的にそれは世界を救う事に繋がる。

だが、人の思想は千差万別。

そのどれが真の意味での世界の救済に繋がるのかわからない、人の世界とは自己が認識している範囲内でしかないのだから。

なのでこの世界中にばら蒔いた。

「だぁああああああああああああああああああ！！ムカつくです！この野郎ォ！死ね！死ね死ね死ね死ね死ね死ねぇええええええええええええええええええええええええええええ

えええええええええええええ！！！」

「おおぃ！？手袋を外すな！この街が吹き飛ぶぞ！？」

「だっ、大丈夫です！何とか結界間に合いましたぁ！！」

「ルカトエーゼ！？仕事はどうした！」

「クトウさんの魔力がおかしなことになってたんで急いで来たんですよ！！一体どうしたんですか！？」

「どうやら封印が融けた！今の奴は“救い”の為に在る者！正に救世主だ！」

「くっ、流石に世界の意志は強力ですね。厳重に封印したつもりだったんですが」

なぜ世界が異世界の住人を選んだのかは知らんが、私達に“救い”を与えようなんざ、随分舐められたものだな。
確かに救世主としての奴は強いな。

「破っ！ぜぇい！どぉおりゃぁあああああああああっ！！」

ネリアが手袋をしているのは魔術を発動した際の彼女の膂力を抑えるためだ。
それは身体魔術を重ね掛けで使用することができるのではなく、先天的な意味でそれしかできないからだ。

彼女の出生が理由なのだが、まぁここでは割愛しよう。
あまりに強過ぎる力故に、彼女は滅多にそれを外さない。
外す時は、それは彼女にとって必殺を意味する。
土を抉り、空を引き裂き、個を穿つ。
破壊、彼女の力はこれに尽きる。
しかしその彼女の拳を真正面から受け止め、優しく愛しむ様に握り直す奴。

「うぎゃぁぁああああああああああああああああああああああ！！触るな握るな撫でまわすなぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

「ぐへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ・・・・・」

「キャー！キャー！！ぎゃー！！？」

あれを見ている限り変態なだけでどこが救世主なのか疑問に思う。
だが、私達は知っている。

「ネリアちゃん・・・、楽しそう・・・？」

「・・・・・」

ネリアは、幼少よりその体質によって周りからは受け入れて貰えなかった。

手に触れる全てを、その膂力によって壊してしまう。
彼女が生きるには、この世界はあまりにも脆すぎた。
一時期は塞ぎこみ、まともに人と関わることもできない自分を嫌悪したという。
私という自分より強者である存在がいると知った事と、ルカトエーゼが造った手袋による抑制によって、彼女は漸く笑って生きる事が出来た。
私ですら彼女の本気を受け止める事はできまい。
その拳は既に人間の範疇を大きく超えている、誰も彼女を止められない程に。
だが、奴は受け止めた。
彼女の半生を絶望に染め上げた、その忌まわしき力を。
なるほど、確かに救いだ。
彼女にとってはこれ以上と言ってない程の。

「綺麗な手だな」

「あ・・・」

しかし、

「ネリアッ！」

「ッ！！はぁっ！！！」

「おっとぉ！」

それを認める訳にはいかないなぁ。

「全く、どうしたネリア。いつものハネっ返りはどうした？」

「うぐっ・・・！ふ、不覚です・・・」

「クルーネの姐さんだ！おっぱい揉みてぇ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ちくそう」

「まぁ・・・なんだ・・・。強く生きろよ・・・」

とても晴々とした笑顔でこちらへ向かってくる奴に、ネリアはガクッと膝をついて地面に深い息を付く。

「うん、気の迷いです。私の過去は私のもんです」

「そうそう、それがいつものお前だ」

「ええ、あのどこか残念な奴（バカ）のお陰です」

「さぁ、その閉じ込めた自分を解き放つんだっ！」

「やべぇ、マジで死にてぇです・・・・」

あの頃の絶望しきった表情と寸分違わぬ顔で呟く彼女に、黙って肩を叩いてやった。
自分もあれに救われるのかと思うと死にたくなる。
だが、救われてやらない。

「なんでだよ。悩んでたんだろ？苦しかったんだろ？なら、俺が救ってやらなきゃ・・・」

「勘違いすんなです、別にお前に救ってもらう必要はないんですよ」

「そうだな。我々は、何もこの傷に救いが欲しかったんじゃない」

ネリアだけじゃない、私やルカトエーゼにだって背負っている物の一つや二つある。
どれもこれも救いようのない、くっそ垂れでどうしようもない傷だ。
それは正しくトラウマとして、私達の中にある。
奴が救いの対象として私達を向き合うくらいには、軽くも無く消えるものでもない。
しかし、これは私の物だ。
私の物を、勝手に持っていかれては堪らん。
あの時どうしようもなく無力だったからこそ、自らの手でしか私達の救いは成されない。
それを、救世主とはいえ弟子だった者に渡してやるほど、私達の意地は易くない。

「2人とも、封印結界の再設定までの時間稼ぎをお願いします」

「了解した」

「まっかせて下さいです！」

だから、クソ弟子（クトウ）――――――――――――――――――――――――

「ダメだ、俺が救わねーと・・・・あのこは救えなかったんだから・・・・。そうだ、だから・・・・必ず救って見せる・・・・！」

そんな苦しそうな顔を、お前がする必要はないんだよ。

あれは、母が亡くなってしばらく経った時だ。
中学に上がりたてのガキには、実母の死はそれなりにキツイ現実だった。
親父が病気で逝っちまってから、就職もした事がなかった彼女ができることは少なく、水商売で俺達を養っていたが、俺達はそんな彼女でも大好きだったし、まだガキだった俺に色々な事を教えてくれた初めて師匠でもあった。
そんな支えを失った俺は、元々嫌いだった世界に対してどう向き合っていいのか全く解らずに相当荒れていた。
毎日夜になれば何かを求めて彷徨い歩き、家に居ても情けないことに無駄に妹に当たった。
そんなどうしようもなく追い詰められていた俺が、いつもの如く彷徨っていた時だった。
どこからか、楽しそうな声が聞こえた。
ふと見れば、そこは昔母と共に来たことのある公園で小さな女の子がブランコで遊んでいた。
それは少し、おかしな光景だった。
彼女の他にも遊んでいる子供がいるのに、彼女の周りには誰もいない。
彼女という存在が、周囲からあからさまな程隔絶されていたのだ。
普段の俺なら迷いなく近づいて事情でも聞いてやる状況だが、この時の俺は相当参っており、他人に対して興味を抱けるような思考をしていなかった。
だから当ても理由も無い、妹を心配させて泣かせるだけの意味のない逃避を続けようと背を向けた時だった。

「あはははははは！わーい！わーい！」

そんな、声が聞こえた。
その時、母の言葉を少し思い出した。

『私が居なくなっても、ゆっくりでいいから、また立ち上がりなさい。私が居なくても、泣いてもいいから、また笑いなさい。私が居なくても、自分の意志を、通せる勇気を持ちなさい。歯を食いしばって、ぶつかりあって、泣いてる誰かを守れる男になりなさい』

「あはははははは！」

背中から聞こえてくる声は、少女の物である子供らしく可愛らしい声は、どうしようなく、悲しげに聞こえた。
だから俺は、

「おい、お前」

「うぇ！？」

「パンツ丸見えでバカみたいだぞ」

「にゃ！？な、なんですか！あなた！」

彼女に話しかけた。

**ささめきことを読んだらメチャクチャ熱い最終回への系譜の連続だった（後書き**

なんかアイディアが沸いたので進めてみた。

**まだまだ急展開が続きます（前書き）**

感想ください。
メッチャください。

**まだまだ急展開が続きます**

「救わなきゃダメなんだ救わなきゃダメなんだ救わなきゃダメなんだ救わなきゃダメなんだ救わなきゃダメなんだ救わなきゃダメなんだ救わなきゃダメなんだすくわなきゃだめなんだすくわなきゃだめなんだすくわなきゃだめなんだすくわなきゃだめなんだすくわなきゃだめなんだすくわなきゃだめなんだスクワナキャダメナンダスクワナキャダメナンダスクワナキャダメナンダスクワナキャダメナンダスクワナキャダメナンダスクワナキャダメナンダスクワナキャダメナンダsksksksksksksksksksksksksks・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんかぶっ壊れたぞ」

「叩きゃ治るですよ」

「おいおい、お前が叩くと頭が吹き飛ぶだろう」

「今のバカなら大丈夫です」

「ハハハハハハハハハハッ、フゥゥゥゥゥゥゥゥゥウゥウゥンッッ！！！」

「・・・・・・・・・ルカトエーゼ、早めに完成を頼む」

「・・・・・・プフッ！」

「・・・・・・・バカwwwwせっかく我慢してたんぞwwwww」

「ハフフッ？ハッハッハッハッハッハッハッ！フゥウウゥウゥウゥウゥウゥウゥウゥウンッ！！？」

「だってぇ！あれは卑怯ですよwwwwwwあはっ、あはははははははは！！」

「ハーf、ハッハッハッハッハッハッハッ！ハァーーーーーン♪」

「くっ・・・・・wwww面白いじゃないか・・・・」

「ふ、2人とも、し、しっかりすで・・・ブハッ！・・・・ングッ！しっかりするです！」

「ハハハハハハッ！フゥウゥウゥウゥウゥウゥウンッ！！！」

「「「もうやめてぇえええええええええええええ！！」」」

あれ、前回までのシリアス何処に行った？――――――――――――

――――――――ｂｙ作者

物事は総じて無価値だ。
なぜなら叫んだ言葉も、我武者羅な行動も、思った願いも、それを認識できなければ、どこにもないのと同じだ。
世界とは主観的であると同時に、また周囲の客観性を持って成り立っているのだから、自らの認識しているものは主観性と客観性を持ってじゃないとこの世に認識してもらえない。
だから、彼女の願いも一緒だ。
気付いてほしいと、どれだけ叫んでも、解って欲しいと、どれだけ近くに寄っても、結局周囲から隔絶された世界に居る彼女の声は、誰にも解らない。
それは、どうしようもなく彷徨っていた、俺の慟哭に似ていた。
だからだろうか、彼女の客観性を意図的に排除したその暗黙の領域を、俺は躊躇いなく踏み入れた。
そうすることで、何をしたかったのかは解らない。
ただ、この胸に空いた穴の残っていた僅かな残滓が、俺に彼女を見過ごすなと言っていた。
彼女の瞳に見えた、絶望と憔悴の色。
おそらく俺だけは、この場で唯一俺だけは理解した。
彼女は、助けてほしいんだと。
よく見れば、彼女の体にはそこかしらに痣があった。
決して目立たない、足の内股や、鎖骨あたりの首筋、おそらくだが、その服の下には様々と言っていい程多くの痣があるのだろう。
何があったのか、大体察しはついた。
しかし、俺はそれに対して有効な打開策も有効策も持ち合わせていない。
もとより、そんな物を与える気も無い。
ならば俺は何をしたいのか。
簡単だ、したいようにする。

本来これは俺がしなくちゃならないことじゃなく、今も家で泣いているかもしれない妹に頭勝ち割る勢いで誤ることだ。
だけど、いつの間にか俺はあれだけ苛まされていた虚無感から脱していた。
何が理由かは解らないが、どうやら目の前で唖然としている彼女に原因があるようだ。
まぁ、とりあえずこのまま黙っているのも味気ないので、会話によるコミュニケーションでも測るとしようかね。

「おい、お前。パンツ丸見えでバカみたいだぞ」

「にゃ！？な、なんですか！あなた！」

たぶん、俺はこの時笑ってたと思う。

「『巨神掌（ゴッド・ハンド）』オ！！」

技自体は単純な身体強化の重ね掛けによる神格に近づけられた右ストレートだ。
ただ強く、存在自体を強く、人間の域を超えるということは、その存在は化け物か。
ただいま救世主の存在意識に引っ張られているバカ弟子を叩き起こす為に頭部に放たれた拳を、奴はムカつく程鮮やかな動きで飛び上がって身体を捻りながら背後に着地する。
救世主が目覚めた原因は、おそらく理不尽に対する衝動と過去の出来事がトリガーとなって、封印していた救世主としての意志を無理矢理起こしたのだろう。
救世主が発動する条件は、“抗い”と“救い”。
彼等は救わずにはいられない。
それはかつて、自らが陥った絶望への反逆であり、贖罪だ。
己が体験した理不尽に対し救いという抗いを求めている。
だからこそ、彼等の存在は度し難い。
世界という管理者から器として選ばれた者達は、はたして人間か神か？
私の拳をまたしても腕を交差することで防いだ救世主は、化け物以上の何かなのか？

「『巨神蹴（ゴッド・スタンプ）』ウ！」

ガガガガギギギギャリリリリ・・・・・・・・・！！

もはや人間の作り出せる音ではない。
擦れ合う鉄と鉄が火花を散らすように、救世主に成り果てたクソ弟子と互いに拳と蹴りを重ね合う。
明らかに別物だ、とその顔に写る笑みを睨みながら思う。
違うだろう、クソ弟子。
お前の求めた英雄（ヒーロー）は、お前が語った救世主（ヒーロー）は、

「こんな私（バケモノ）に、こういうことがしたかった訳じゃないでしょう！？」

「ッ！？」

どれだけ存在的に強くなっても、戦闘者としての実力はまだ素人の域をでない。
いつまでも喧嘩スタイルの抜けねぇ奴です、脇を締めろと何度も言っただろうに。
だから簡単にガードを崩される。
身長差を生かして地を這うように懐に入り込み、掬い上げるように両腕のガードを殴り飛ばす。
バンザイする様に両腕を広げてがら空きになったその胴に、水月、肝臓、肋骨、と連続で急所に抜き手を叩きこんだ。
初めて苦痛に顔を歪めて前かがみになるそいつの顎に、膝から腰にかけての踏ん張りを開放して地を砕くように跳ね上がり、強烈な膝蹴りで駄目だし。

浮き上がりながら仰け反る奴に、確かな手応えを感じる。

「なんでっ、そんなアホみたいな泣き（・）笑い（・）で、どの面下げて私を救うとほざくですか！！」

「・・・・・」

追撃の手を弱めず着地の衝撃を利用してコマのように一回転しミドルハイ。

弾かれ、地面を何度もバウンドしながら転がっていく奴を、苦い表情で見つめる。

「ハァ・・・ハァ・・・」

「ネリア、交代だ」

「クルーネさん・・・！」

「無理をするな、全力だとお前の身体も耐えられんだろうが。しばらく休まんと身体壊すぞ」

「ダメです！私が、私が決着を・・・！」

静止を振り切って再び追撃しようと身を屈めるが、頭上からの拳骨によって思わず蹲って頭を押さえた。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！！？」

「バカたれ、本来の目的を忘れるんじゃない。私達の役割は撃退ではなく足止めだ」

「うぐぅうううぅうぅう・・・・！」

冷静どころではない、本気で呻いた。
本来の私ならそこまでじゃないだろうが、どうやら自分とも気付かない程消耗していたようだ。
奴に確かにダメージを与えられたが、私も同時に反動を受けていたらしい。
そこまでタガが外れる程動揺していたのだと、今さらながら思い知った。

「・・・・とういうかな、ネリア。気付いていないのか？」

「え？何がです？」

「ああうん、それがだな・・・・」

魔導甲冑を着込んだクルーネさんは、兜を被っているのにも関わらず気まずそうに頬を掻く動作をしながら言い淀んだ。
やがて一息つき、意を決したように一言。

「下着、盗られてるぞ」

「はっ？」

理解不能の一言。

シタギヲトラレテイル？何を言っているんだ、この人は？

バッ、と背を向けて中身を確認すると驚愕した。

下が・・・・無い。

あのバカを吹き飛ばした方向を振り返り、いつの間にか立ち上がったバカが天に向かって高々と一枚の布切れを掲げているのが見えた。

フリルの装飾の付いた見覚えがあるそれは、先程までは確かに己が身に着けていた代物であるはずだった。

しかし太陽の光を浴びて風に棚引くそれは、見間違いのようもなく・・・・・・・・パンツだ。

「はぁあああああああああああああああああああああああああああああ？！！」

「気持ちは分かるが、とりあえず魔術の発動はやめとけ」

「いいいいいいいいつのまに！？」

「殴り合ってる時・・・・かなぁ？すまんが良く見えんかった」

「なんですとぉおおおおおおおっ！！？」

指差して謎の解答の究明を求めたが、歴戦の戦士からのまさかの見

えませんでした発言に叫ぶ。
そんなバカな・・・・と、信じられない面持ちで奴を見つめる。
すると、奴は天を仰ぎながら突然静かに涙を流し始めた。
クネールさんも突然の奴の行動を不審に思ったのか、兜から覗く眼が細められていた。
堪えられぬとでもいうように、やがて奴の口から泣きそうなくぐもった声が出た。

「暖かい・・・・！」

「よし殺そう」

「待て待て」

「放してくださいです！お願い、じゃないとそいつを殺せない！」

「だから私達の役目は時間稼ぎだってば」

脇からを腕を通されて動きを止められしまい抵抗して余分に動いた分さらに疲れてしまったが、肩で息しながらも眼の殺意だけは緩めなかった。
漸く落ち着き、腕を組みながら留まることにした私は、地団駄しながらクネールさんに自らの思いを託した。

「後はお願いしますです！」

「ああ、任せろ」

「徹底的にぶち殺してください！」

「・・・・・ああ、任せろ」

ぜってぇ正気に戻ったら殺す。
この時私はそう決めた。

「あ！お兄ちゃん！久しぶりー！」

「おう、久しぶりだなちびっ・・・・・・・・」

「？どうしたのー？」

「・・・・・んにゃ、なんでもない」

驚いた。
あの後何故か懐かれた俺は、気が向いた時にふらりと公園に立ち寄る様になった。
大体は夕方か休日だが、彼女はどうやらいつも夜遅くまでこの公園にいるようなので必ずと言っていい程ブランコをアホのように漕ぎながら高笑いしていた。
母が死んでも彼女が自分の治療費すら惜しんで残しておいてくれた遺産があったために、施設暮らしをしなくても生活できていたが、学校に行く意義を見出せていなかったのでよくサボっていた。
大学に行くことが彼女の最後の遺言だったので、とりあえず進級進学に問題無い程度でだが。
閑話休題。
それより問題は、いつものように何がそんなに楽しいのかわからない顔で満面の笑みを見せる彼女に、その顔に、大きな痣が出来ていることだ。

「・・・・・・それ、どうしたんだよ」

「えっ？あー、これー？うんっと、これ実は転んじゃってねー」

「・・・・そっか」

「そうそう！それより一緒にブランコしようよー！この前みたいに

一回転してるのみたーい！」

「・・・・・・・解った。よく見とけよ、俺の技は刹那に終わるぜ！」

「キャー！来た来たー！」

「スーパーキャンドルエクストリームジェットロール！！！」

「すげー！やっぱホントに回ってるよすげー！」

少し、ほんの少しだけ揺らいだ瞳と引き攣った笑み。
それに対して俺は何も言わないし、できない。
こんな姿、母がみたらなんと言うだろうか。
痛いと、苦しいとも言わず、ただただその笑顔に押し隠した闇に気付きながら、何もできない自分。
ギリッ、と唇を噛み締めた。
何してんだ、俺。
今にして思えば、あまりにもガキだったと思う。
どんだけロックだったんだよ俺。
しかし、一度沸いてきた衝動を止める術を俺は知らなくて、どうしても彼女の笑顔を本物にしたくて、俺は夜の闇が深くなって手を振って帰ろうとした彼女の肩を掴んだ。

「？どうしたの？お兄ちゃん、あたしなら明日もいるから。今日はもう遅いし・・・」

「家に来いよ」

「へっ？」

「帰んの嫌なんだろ？だからさ、家に来いよ」

「え・・・と、あ、あはは！冗談・・・のつもりだよ、ね？」

「うっせ、とりあえず今日はシチュー作ってやっから食いに来いよ。風呂入った後コールオブデューティーやらせてやっから」

「・・・・・その、ありがとう、なんだけど・・・私は、ね・・・」

「反論は聞きません」

「ふぇ！？わ、ちょっ、待って！？」

手を引く為に握った彼女の手は、とても小さくて軟らかかった。
この手を、助けを求めてどれだけ伸ばしたのだろう。
この手を、周りからどれだけ拒絶されてきたのだろう。
この手は、どれだけ人が握ってくれたのだろうか。
陰鬱とした気分を、久しぶりに大声を張り上げて吹き飛ばす。

「ていうかいつも思ってたんだけどよぉ！お前ってマジくせぇから！」

「ガーンッ！？」

「だから体の隅々まで洗ってちゃんと寝巻着てから布団に川路になって寝ようぜ！！」

「えっ・・・う、うん」

「言ったかんな！？うんっつったかんな！もうこのまま家に行くからな！？」

「・・・・うん！」

「よしいい返事だ！」

この時の俺は、この世界がどうしようもなく理不尽だって事を、おそらく忘れていたのだと思う。

## まだまだ急展開が続きます（後書き）

あとどんくらいで終わるかなぁ。

## カーニバル・ファンタズムのカオスっぷり腹筋が崩壊した（前書き）

型月の本気を見たなｗｗｗ
何この気合いの入りっぷりｗｗｗｗｗｗ

**カーニバル・ファンタズムのカオスっぷり腹筋が崩壊した**

「クンカクンカクンカクンカクンカクンカクンカ・・・・」

「行かせてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！お願い！私にそいつを殺させてくださいですぅぅううううぅぅううううううぅ！！！」

「ネリアちゃん、気持ちは解るけどこれ以上はホント身体に悪いよ。今はダメ」

「でもぉ！ルカ様でもぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

「スゥーーーハァーーースゥーーーハァーーースゥーーーハァーーー」

「いやぁああああああああああああああああああああああああああああ！！？」

「クルーネさーん・・・頑張って取り押さえてください・・・こっちの労力の方が辛いです・・・」

「全く、どちらも世話のかかる・・・」

「うがぁああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

「ちょぉっ！？ク、クルーネさん！兎に角お願いします！？」

「はぁ・・・・了解」

今日という日を自分自身のものと呼びうる人は幸せである。いや、彼のみが幸せである。

――――――――――――――――――――――――ドライデン

空いた穴は、もう元には戻らないけど。
少しずつ、日常が与えてくれるものが、この胸に穿たれた喪失を埋めていってくれた。
彼女と過ごした時間は、とても短いものだったけど。
母を失った俺の心を、確かに埋めてくれたんだ。
それはとても暖かい出来事で、優しい夢のようだった。
初め連れていった時は、「ついに兄ちゃんが犯罪者になっちゃったよお母さんーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」と美衣がガチ泣きして大いに右往左往したが、その後は2人ともまるで姉妹のように仲良くなっていった。
憶測だが、並みの中学生より遥かに頭の良かった我が妹はその頭脳

の高さゆえに学校で友達がおらず、初めての友達とも呼べる彼女の事をとても大切にしていたと思う。
我ながらよく誘拐犯に間違えられなかったものだと、今さらながらに呆れ返った。
彼女の名前は、家に連れ込んでから三日後に分かったのだが、この昔話の中ではさして重要なことではないので機会があれば語るとしよう。
重要なのは、俺の中で未だに存在する彼女への後悔だ。
結論から言うと、俺はこの後彼女を失う事になる。
それも、自らの無力を突き付けられる形で。

「パソコンの中身に触んなっつってんだろうが！」

「どぅーせエロゲしかないんでしょ！？それならお兄ちゃんがどんな趣味趣向を持ってるか把握するのは妹の役目でしょ！？」

「ふざけんな！家族にも踏み入って欲しくない領域って奴があるだろうが！いやむしろ家族だからこそだろう！？」

「だってお母さんは全部把握してたじゃない」

『触手蟲シリーズもいいけどこっちの獣姦シリーズもいいわね☆』

「やめろぉおおおおおおおお！！思い出させんな！アレが一番応えたわっ！」

「ねぇ！文ちゃん！文ちゃんも知りたいわよねぇ！」

「えぇええ?!ええっと、・・・・・・頑張りますっ！」

「おめーは何頷いてんの!?見せねぇからね!?絶対見せないからね!?」

それでもあの日の灯火は、今も俺を照らしているのに。
何故、最後には思い出してしまうんだろう。
救世主となったのに、俺の心はまだ晴れない。

交戦していて気付いたことがある。

「はぁっ！せぇい！」
「・・・・・・・！」

救世主の奴は、受けの姿勢しかとらず、こちらには決して攻撃しない。
そして必ず、隙あらば下着を狙ってくる。
そんなしょうもないことをとてつもないレベルで愚直に繰り返しているのだ。
こちらの極限まで高められた集中力を持ってなお、その針穴の如く隙間を縫ってくる。

「くぅっ！？」
「ヒョウッ・・・！」

ダメージを受ける訳ではない。
むしろこちらの方が殺しに掛っている状況下、奴はお構いなしとでも言うようにこちらにプレッシャーを与えてくる。
剣を突き、掃い、捻じ込み、袈裟がけ、切り上げようが。
盾を叩き、殴り、ぶつかり、かち上げようが。
その悉くを凌駕し、その凡てを防がれる。
まったく、これではネリアの事を言えんな。
救世主という、この世界の猛者を越える存在に対して、思わず舌なめずりしてしまう。

ここまで防がれたのはいつ以来だ？
ジジイ共とは最近闘りあってなかったからなぁ。
技と経験はともかく地力では既に勝っているだろう。
だというのに、やってくれるじゃないか。

「まったく、やってくれるなクトウ。少し自信を無くすぞ？こうして死合うのもいいんだが、今回の私の役目は足止めだ。だからなクトウ、手段は選ばんよ！」

「ッ！？」

今まで持っていた剣を弓から矢を放つように投げつける。
唸りを上げるそれを、頭を大きく斜めに振り下ろして掻い潜る様に避ける奴の眼前に手を添える。
予測した位置に動いてくれたクトウの戦闘者として未熟さに苦笑しながら、鎧に仕込んだ魔方陣を発動する。
ある場所から転送された剣が、クトウの頭を串刺しにする勢いで飛び出す。

「ちっ、これも止めるか」

この完全な不意打ちすら、奴は剣の腹を指で挟むというふざけた芸当で止めた魅せた。
おいおい、これを初見で止めるなんてジジイ共ですら無理だったぞ？
そいつを怪我もせず涼しい顔でそんな曲芸をやり遂げるとは。
つくづく救世主ってやつは・・・・。

だが、まだ終わらんぞ？

「戻れ」

「！」

先程放った剣がこちらに回転しながら戻ってくる。
同時に転送した剣を破棄し、今度は盾を構え密着して体当たりをかます。
流石にこの距離だと避ける暇もなかったのか、直撃は避けたものの両手で盾を抑えながら奴は動きを止めた。
絶好の好機だ。
密着した状態ならば私の手元に戻ってくる剣を避ける事は出来まい。
その刹那――――――――――――――――――――――――――――――――

「ぉおっ・・・！」

「な、にぃ！？」

その手が盾を掴んだ。
しまった、動きを止められたのはのこちらの方か――――――――――――――――！

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！！」

「――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――っ！！？」

そのまま強引に振り回され、背後から奴に迫っていた剣を私自らを使ってはたき落とされた。
油断していた、まさかこのような相手を傷つけかねない行動をとるとはな。
その一点だけは信頼していたのだが、動物の生存本能か？
豪快に振り回されながら、あまりの遠心力に気絶しそうになる思考で考えた。
ここに来て奴の行動が一変したのは何故だ？
こいつの救世主としての根源は自らの口から語った『女性に対しての救い』だ。
それ故にクトウは決して我々に一切の攻撃を加えなかった。
その存在的な身体能力を使っての徹底した防御の姿勢を崩さなかった。
だが、これは明らかな敵を排除に来ている。
こいつの救いを広義的に捉えればこのように相手を叩き潰してからの説得もあり得るかもしれんが、それならそれ以前のフェミニストな態度は一体何だ？
いや、下着を奪いに来る男がフェミニストとは言えんかもしれんが。

「行くな、行くなぁ！！戻ってくれ・・・そっちにいっちゃ駄目だぁあああああああああああああああああああ！！！」

「・・・・・ぁ？」

視界と聴覚すら振り回されることによる轟音で曖昧になる中、確かに聞こえた慟哭。
しかしそれは一瞬で、私は唐突に感じていた遠心力から解放された。
認識した状況に、私はこのまま鎧を着込んでいると危険と判断して刻まれた魔方陣を発動し着脱。
再び召喚した剣を片手に、私は猫のようにしなやかな動きで衝撃を吸収し滑る様に地面に着地する。
朦朧とした頭でほとんど反射的に動いたが、あのまま叩きつけられたかと思うとゾッとしないな。
鎧を再び纏うと、盾を構えながらクトウを注視する。

「あああああああああああああああああ！！やめろぉ！やめてくれぇえええええええええええええええええ！！これ以上奪うなぁ！くそっ、くそくそくそくそくそぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

「ハァ・・・ハァ・・・」

酷く取り乱した奴は手当たり次第に暴れまわっていた。
その姿を見た時理解する。

「暴走か・・・・厄介な・・・・・」

「クルーネさん！大丈夫です！？」

「ネリアか、大事は無い。それより、あいつだ。このまま暴れて回

られると結界を壊すか、飛び出てしまうぞ」

慌てた様子のネリアがこちらにやってくる。
どうやら奴の豹変に危険を感じ取ったらしく、さっきまでの様子はない。
しかし流石だな、あれだけ叫びながらのたうち回っても下着を手放さんとは。
いっそ感動してしまうぞ。

「あ、私のブラいつの間に掠め盗ったんだ、あいつ」

「とことんシリアスの場面でボケてくれやがるですね」

仕方ない弟子だ、手間掛けさせおって。

「ルカトエーゼ！そっちはどうだ！」

「七割ってとこです！2～3分で完成するので、タイミングを見て取り押さえてください！」

取り押さえろ、か。

「ク、アレを相手に？骨が折れるな」

「まっかせてくださいですルカ様！」

そう安請け合いされても困るんだがな。
あれと対峙した経験者としては。

「さてネリア、これは一計要さんと難しいぞ？」

「全力でぶん殴るです！」

「ああそうだったな。お前はそうゆう奴だったな・・・・・」

元気な返答に思わず頷きそうになるが、いやいやと頭を振ってネリアの性格を思い出す。
彼女は所謂、クトウが言うところの脳筋という輩だ。
はぁー、と自身も良い方ではないと分かっている頭脳で地面やら建物やらを壊しまくっている弟子を見つめながら考える。
この戦い、まだ終わりそうにないな。

## カーニバル・ファンタズムのカオスっぷり腹筋が崩壊した（後書き）

短いけどとりあえず区切りのいいところで投稿

**そして物語は次の段階へ**

「式の構築は完了しました。しかし、実行には問題が三つ程あります」

私はクルーネさんとネリアちゃんを呼び戻し、クトウさんの救世主の意識を封印する手立てを伝える。

「まず問題となるのが、完全な封印は無理です。それこそ殺してしまわない限り救世主としての彼は存在し続けます。なぜなら私達人間が構成されている三つの事柄、魂、精神、肉体の内、肉体という自らを宿す大元の器を救世主として創りかえられている。それを封印すると言う事は同時に彼の肉体、ひいては彼自身の否定に異なりません。完全な封印とは、人格を破壊するに等しいのです」

「今の変態野郎がまともになるのなら別にそれでもいい気がするです・・・・」

「おいおい、そこまで嫌ってやるなよ。少なくとも、私は奴が好きだぞ？」

「クルーネさん、年下好きだったんです？」

「なぁに、私も年だからな。そろそろ旦那でも囲って置かないとな、その点坊主なら優良物件じゃないか」

「ほ、本気です！？」

「・・・・・・・・・結構余裕ですよね、２人とも」

「何を今さら、こういう時はグダグダ悩むより行動あるのみだ」

「説明簡潔でスピーディーでお願いしますです」

「はぁ～、はいはい。分かりました。結論から言いますね、死ぬ覚悟ありますか？」

そう言う私に、２人は不敵に微笑んだ後、声を揃えて頷き返した。

現状維持では、後退するばかりである。

――――――――――――――――――――――――――――ウォルト・ディズニー

終わりが訪れたのは、彼女と過ごして2週間経った日の事だった。
家族と呼ぶには短く、他人と呼ぶには親密すぎた俺達の関係は、決して世間には受け入れられるものではなく。

どこで誰が漏らしたかわからないが、俺達の事を警察に連絡したことにより、仮初の家族ごっこは終幕した。
彼女が学校に行かなかったのも原因だろう、すぐに親元に連絡が行きそちらの方でも捜索されていた。
可能性を考えなかったとは言わない、むしろよくここまで放っておいてもらえたものだと思った。
後悔は無い。
間違ったことはしていない。
本気でそう思っていた。
けど、世間と呼ばれるクソッ垂れ共は容赦なく俺の行いを叩いた。
最近の若者の暴走だの、自己中心な言い分だの、親の意見を受け入れなくなった子供のありがちな浅慮だの、非難中傷罵詈雑言、学校の虐めや近所からの村八分、完全な社会不適合者としてのレッテル。
彼女の状況に対しての俺の主張は封殺され、彼女を俺の家で匿ったという部分を強調された周囲の反応は俺の心をへし折るには十分だった。
美衣の方も無視されていた状況が一変し、まるで今までが嘘のように喧騒に塗れた虐めを受けるようになり、顔には出さなかったが随分と参っていただろう。
結局、俺がした事は間違いだったのか。
分からない、何も解らない。
少なくとも、俺は間違ってしまったんだと思う。

彼女を救えていた気になっていた。
彼女を守れていた気になった。
彼女を、幸せにできたと思っていた。

だけど、最後に見た彼女の顔は、彼女の父親らしき人に引きずられていく彼女の顔は涙で歪んでいた。
しかし彼女はこちらを見た時、こう言った。

ありがとう。

ああ、なんて、無力。
ああ、なんて、愚かな自分。

そして、どす黒く、この世の中に蔓延する慈悲なき理不尽。

何が悪かったんだ。
何を間違えたんだ。
何に従えばよかったんだ。

けれど全ては終わってしまったことだ。
俺がどれだけ夢想しようと、それはもう忘れ薄れていくだけの過去の幻影でしかない。
決して悔恨と罪は消えないのに、俺は既に彼女の声を思い出せない。
世界はこんなにも残酷で、俺は彼女(きおく)を留めておく事さえできない。

ならば、と。
せめて心だけは。
この打ち消せぬ絶望と渇望だけは、決して忘れないように。
救世主(おれ)の人格(からだ)に刻みつけよう。

例え、それが知性(おれ)すら喰い潰していくとしても。

「救世主の役割は“救済”の唯一つですが、それを行うために己を救世主の器として創りかえています。そして救世主となった彼らは副次的に世界と同化しています。世界にとっての救済を行わせるための帳尻合わせといったところでしょうか」

「なるほど、あの暴走は正しい意味での“救世主”の意志に引き摺られているからか。えげつないことをするものだな、世界とは」

「グリムリバーのモンスターが汚染したマナを正常化するのも、おそらくその副次効果だと思います。ここで私が建てた仮説、今回の作戦の根幹。今彼は、この世界の源たるマナに近い状態で顕現しているはずです」

「っ！それが本当なら、奴をどう封印する？形があるのに、容が無いなんてそんな反則あるか」

一旦そこで若干乱れた呼吸を整えながら、私は話しを進める。

「その存在がマナなら、存在できるだけのマナを奪ってしまえばいいんです。流石に器を無くすまで無理矢理顕現しようとはしないでしょうから」

「なに？――――――――――――っ！そうか、お前まさか！」

ニヤッ、と笑みを作り、クルーネさんに頷いた。

「彼を元にした魔剣ならば、おそらく抑えられると思います」

「おいおい、そんなこと可能だとしても神話の存在になんてことするんだ。確かにこれは綱渡りだな」

「誰か説明を求めるです！」

「取りあえず殴りあってろ」

「りゅぅおおおうかいしたですぅ！！！」

ネリアちゃん・・・・。

よく考えれば頭いいのに、こういう場面だとめんどくさがって行動一直線になるんですよねー。

今は抑え役が必要なんでその方が助かりますけど。

さて、式は出来上がっている。
あとは発動するのみ。

「契約はクルーネさんを通してからクトウさんに譲渡するので、媒介の準備をお願いします」

「これでいいか？一応私が持ってる中では結構業物だが」

「ええ、ある程度は補強するので大丈夫です」

覚悟はいいか？
準備は万全か？
全ての計算は通りか？

「始めましょう」

「ああ」

目の前で嘆く彼を停める為に、その存在を、否定する。
痛みは一瞬。
呪文を唱えながら、再び開いた瞳と心に迷い無し。
私は救世主（かれ）から功刀（かれ）を取り戻す為、この世界の一部すら利用して、

「来（こ）よ、我は魔を導く探求の徒。契約の下、我が願う望みの身柱と為れ――――――――――――」

世界の意志を、捩じ伏せる。

## そして物語は次の段階へ（後書き）

短いけど毎日更新出来ていい感じ。

**そろそろ終わらせたいなこの流れ**

「ねぇ、貴方は何を求めるの？」

――――――――――救い。

「ねぇ、貴方は誰に求めるの？」

――――――――――あの日救えなかった彼女に。

「ねぇ、貴方は何処に求めるの？」

――――――――――刻んだ、己の意志にのみ。

「そんなことしても意味は無いのに」

――――――――――な、に・・・・？

「私は救えない。だって人は助けるものじゃなくて、勝手に助かってるものだから」

――――――――――そんなバカな・・・！なら、俺は・・・！

「救いなんてそんなものよ？結局は自己満足でしかない。ううん、もしかしたら、誰かを救おうとしている分、誰かが犠牲になっているかもしれない」

――――――――――俺が、俺のしていることは・・・・。

「貴方は強いね。人は自分に強烈な意志を与えるものを耐えられない。自らの容量を越えた感情を制御できないから、とても苦しむ。程度に寄るけど、その時の反応は大体一緒なの。殺意と放棄、あなたはそのどちらでもなく、しかし同時にその感情から逃れようとしている」

――――――――――――――――――――違う！俺は、逃げてねぇ！

「逃げてるよ。だって、貴方がしている事は救えなかった彼女への贖罪じゃない。罪は赦されないって解っているのに、その重さに耐えられないから理不尽への救済を求めている。それが救世主（あなた）なんだよ？」

――――――――――――――――――――。

「でもね、あなたその罪を、決して逃れらない方法で刻み込んだ。救世主は己の理不尽に対して救済の渇望を元に器である身体を創りかえられているの。でもそれは、身体からの影響は殆どないわ。だって身体という自己の最大のアイデンティティをほぼ変わることなく創り替えているから、違う自分なんてそうそう思い付くものでもないし。だからこそ、殆どの人達は世界の意志に引き摺られることなく救世主でいられる」

――――――――――――――――――――。

「ちょっとー、ボーっとしてどうしたの？そんなにショックだった？でもね、そこが貴方と他の人達の違いなのよ。あなたは罪から逃げたがっているのに、絶対に逃げないように、創り替えられた器をさらに創り（・）直し（・）て（・）い（・）る（・）の。本来ならあり得ないんだけどね。だって、それは世界の意志すら凌駕した

自傷行為なんだから。どこかの学者さんが言ってたけど、人間は魂と精神、そして肉体で構成されている生き物なの。そして、この中でも最も先に宿る物って言ったら肉体だよね？難しい講釈は省くけど、要は知性や人格と呼べるものは肉体から来てるんだよ。じゃないと、反射的な行動とか説明つかないしね？熱い物を触って咄嗟に手を引いてしまうのは肉体の（・）意志のようなものだから」

――――――――――――――――――――・・・結局お前は何が言いてぇんだよ。

「ああ、ごめんごめん。つい話しこんじゃったね。君はね、身体という己の最大の人格に、彼女の記憶と感情を移植したんだよ。バカだよね、そんなことしたらもう絶対に逃げられないのに」

――――――――――――――――――――・・・けっ、ほっとけこの野郎。お前には関係ねぇ。

「うん、本当ならね。私も興味なかったんだけど、流石に私をこんな風に想われてると解ったら、放っておくことなんて出来なくてね」

――――――――――――――――――――・・・あんっ！？

「ふふふ、またね（・・・）。お・に・い・ちゃ・ん？」

――――――――――――――――――――・・・・・・ふざけんなっ！待て！聞かせろ！

「クスクス・・・うん、なんだい？」

――――――――――――――――――――おっぱいでかくなった？

「・・・・・・・・・・・・うぇえええええええええ！？」

――――――――――――――――――――なぁ、触っていいか？今度会ったら触っていいか？

「い、いやっ、そんなこと言われても・・・！？ていうかそんな話の流れだったっけ？！」

――――――――――――――――――――俺の事よりお前の事の方が大事だろ！！

「あれ、まともなこと言ってる様に聞こえるけど、実際の意味が最悪だ」

――――――――――――――――――――ていうか今触ればいんじゃね？行けるよな？俺世界の意志に反逆したらしいからな、胸揉むくらい余裕だよな。

「え、待って待って。なんか感触がする！？触られてるの私！？」

――――――――――――――――――――D・・・、ディー・・・、でぃー・・・・・・

「今私は、この人にあそこまで想われている事を、大変嫌だと思っている」

――――――――――――――――――――ふぅ、よし、お前もう帰れよ。

「あれぇ！？この空間の主って私なんだけど！！お兄ちゃんの精神世界に語りかけてる感じなんだけど」

――――――――――――ああそうなん、わかった。ならもう帰してくんないかな？おにいちゃんちょっと仕事がね？解るだろ？

「うぅ～・・・・もう知らない！お兄ちゃんのバァァァアアアアアアアアァカッ！！」

――――――――――――おう、じゃあな。お前が元気だってわかって良かったわ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ずるいなぁ」

――――――――――――だって兄だもの。

「さっきまで落ち込んでた癖にさ」

――――――――――――はっ、意地があんだろ。男の子にはぁ！

「ふふっ、そうだね。だけど、気をつけてね」

――――――――――――・・・・・・・必ず、迎えに行くからな。

「うん、期待しないで待ってるよ」

――――――――――――

「行っちゃったか。相変わらずで良かったなぁ、お兄ちゃん。よーし、やる気も出てきたし、とっとと魔大陸とやらに攻め込む為の体勢を整えないと。じゃないとお兄ちゃんに会えないしね？」

ここまで多分一章だと思う。

## そろそろ終わらせたいなこの流れ（後書き）

短いけどとりま投稿。

**捻った文章を考えるのがめんどくさくなったというか・・・（前書き）**

めだかボックスの新章は、善吉ちゃんが相当要らない子だったなぁ。

**捻った文章を考えるのがめんどくさくなったというか・・・**

「――――――――――――っだぁあああああ！きっつ！はぁ・・・ごふっぜぇ・・！」

「先んず、これで終わりか・・・」

「お疲れ様です・・・、なんとか・・・抑え込めましたね・・・」

「ここまで・・・！疲れたのはっ、いつ以来です・・・・！？」

「ははっ、そういえばそうだ！私も鎧を重く感じるとは久しくなかったな！」

「魔導師は、陣を発動するのに、自分の魔力を使いませんけ、ど・・・・刻むのには必要ですしね・・・・ふぅ・・・」

「皆々疲労困憊のようだな。まったく、呼び出されてみればまさか剣に宿されるとは思わなんだ。ヨルヒムの弟子とはいえ、我の事を甘く見過ぎではないか？」

「うっせぇです！許しもなく顕現してんじゃねーですよ暑苦しい！！」

「おい、ツインテールの娘。流石にその言葉容認できんぞ、我が寛大といっても限度がある故な」

「星の意志だろうが、何だろうが、空気読めよバカってこってます！これ以上汗掻くと脱水症状になるだろうがボケッ、です！」

「貴様ぁあああああああああ！！この星の神に等しい我になんつー口の訊き方だ！余程燃やされたいらしいな！？」

「上等です！バーカバーカ！ケツの穴ちいせーくせに偉そうに語ってんじゃねーです！この火だるまナイチン男！！」

「実態が無い事の充てつけか貴様ぁあああああああ！！突っ込んでその子宮燃やしてやるわぁ！！」

「・・・・・これ以上周りに被害を出さないでくださーい」

「完全に聞こえてないな」

「はぁ・・・・これも処理するの私なんですよねぇ・・・・」

「ま、今日も世は事もなし、来たる嵐も過ぎ去った」

「そうですねぇ・・・・。クトウさんも無事でしたし、終り良ければなんとやらですね」

生きるとは呼吸することではない。行動することだ。――――――――――――――――――――ジャン＝ジャック・ルソー

「おっぱいどうなったの！？」

眼は眠気が残っているのかまだ開くのが億劫だが、感覚と思考だけは徐々に目覚めていく。
フカフカとした感触から、どうやら自分はベッドに寝かされていたようだ。
はて、一体自分は何故ベッドに寝かされているのか？
眼玉を擦りながら己の頭に問いかけるが、返答は帰ってこない。
直前まで、つまり目覚める前までは、何かとても大切なことがあったような気がしたのだが、内容を思い出そうとしても漠然と雰囲気しか起こせない。
夢でも見ていたのだろうか？
ようやく開けた視界で状況を確認しようとあたりを見回す。
薄暗い部屋の中を窓から差し込む眩く柔らかい光が照らしていることから、今が早朝であることが分かる。
部屋はどうやら支給された奴だ、いつの間に戻ってきたのだろうか。
・・・・・・戻ってきた？
ああ、そういや訓練してたんだったな。
久しぶりに怪我が治った後の経過も兼ねて、ツインテとクルーネ姐さんと・・・・・。

「あ、そうだ。あのパンツとブラどうなったんだろう？」

「何故そこを先に思い出すんです！？」

無乳（ツインテ）がドアを蹴り破って現れた。
おい、家主に断ってんのか。

家財壊したら弁償だぞ。

「国がなんとかするです」

「何そのはた迷惑な期待。これ完全に個人の支払いだろ、責任とれよ公務員」

「黙らっしゃい！お前と闘りあった被害の方が甚大です！てめぇこそ責任とれや！」

「しーりーまーせーんー、救世主の意識暴走うんぬんなんてしーりーまーせーんー」

「下着の感触は？」

「温かかったゲボォッ！？」

「死ね」

「ごめべんゴハッ！すいませべバッ！？」

マウントをとられて殴られる俺。
しかも魔術付き。
こちらもせめてもの防御にと魔術を発動させようとした時、身体の違和感に気付く。
魔力が循環してない？
式を構築しているのに元となる魔力が、空・・・・・・・・じゃない。

ある、確かにあるが、どこかに持ってかれてる？
ていうか遠慮なしにガシガシ持ってかれてるんだけど。
眼のハイライトの失せたツインテにガシガシ殴られながら、俺はこの奇妙な現象の原因を探る。
そうしなければ誰かが止めるまで殴られ続きそうだ。
せめてそれまで耐えなければ死ぬ。
こ、この魔力の流れからすると、流失源は腹の上？
殴られて感覚が鋭敏に蘇って来た為、今まで気付かなかった堅い感触がツインテの体重によって押し付けられているのが分かった。

「貴様ぁ！我の上に乗りかかるとは無礼な！剣に欲情でもしたかこの変態が！」

「うぉ、ビックリした！」

殴打の音以外にいきなり腹部辺りから微妙にくぐもった声が聞こえてきた。
声の質は荘厳と言える空気を震わせる重低音。
殴られている俺の意識を無理矢理引き寄せる程の存在感が籠っていた。
なぐ・・・・、って止まられねぇ。
この人完全に無視してるよ。

「ちっ、まだ意識を失わねぇですか。無駄に丈夫になりやがってです」

「この暴力ツインテがっ！あ、ごめんなさいごめんなさい！」

「いい加減にしろぉ！！」

ツインテが謎の声を無視して殴り続けていると、腹の上が急激に熱くなった。
いや、熱くなったどころではない、痛い。
ていうか腹から火柱出たぁあああああああああああああああああああ！！？

「えええええええええ！！？何これ何これぇ！？」

「あっぶなぁ！？めちゃくちゃしてんじゃねーです！この駄剣！」

「だまらっしゃあっ！！貴様は潔く焼かれてろ！」

「その前に俺の腹ぁあああああああああ！！焼けてるからぁ！焼けてってるからぁあああああああああああああああああ！！？」

身体は動かせず、腹の上には焼きゴテ、これなんて拷問？

「ぎゃあぁァァァァァァァァァァァァァァァ！！？」

「部屋からクトウさんの悲鳴聞こえて来てみればいつも通り過ぎて若干引きました」

「言ってる場合かてめぇえええええええええ！！！俺の腹部のこれ

なんだぁあああ！今俺の腹部えらい事になってるからね！？」

ルカ子が呆れながら部屋に入ってきた。
もうちょい心配してくれよ。
あと久しぶりだねっ！

「おーいお兄ちゃん見舞いに来た・・・・って何これ、天上焦げてるけど」

「天上よりお兄ちゃんの方みてみよう！これ、上に乗ってるこれっ！！」

「剣じゃん、火が出てるね」

「そう！そこからもうちょっと頭を働かせよう！もう少しで解答までたどり着けるよ！？」

「取り合えず様子見に来たけど、元気そうだし帰るね。なんか王様が呼んでるらしいし」

「待てぇえええええええ！！せめてこの剣どかして行けぇえええええええええええええええええ！！」

久しぶりにあった妹から存外冷たい扱いを受けた件。
お前らさぁ！ちょっとは構えよ！
俺がどんだけ大変な状態か分かってんの！？
燃えてんだよ！腹の上が燃えてんの！

「んなもんお前の頭の作りに比べれば大したことないです」
「いつものクトウさんならもっと奇抜なことしてましたし」
「異世界に来ても相変わらずだったのねー・・・・。正直予想内だけど」
「言うに事欠いてこのアマ共っ・・・！そしてテメェはいつまで人の上で燃えてんだゴラァ！！」

流石に燃える剣の上に居られなかったらしいツインテは既にルカ子の横に侍っていたので、俺は遠慮なしに窓の外へと燃える金属の塊を蹴りだした。
その際「あっ！貴様よくも我を足蹴し・・・・・！」とか聞こえてきた気がするが、肩で息しながら炎症に耐えていたので無視した。
おいおい、なんだよアレ。
絶対まともシロモンじゃないだろ。

「神様の宿った神剣ですよ、因みに持ち主はあなたです」
「何それこえぇ」

俺が眠っている間に一体何があったっていう。

## 捻った文章を考えるのがめんどくさくなったというか・・・（後書き）

短いうえに文章崩れ気味ですが気にしない。

**置いてけぼりはひどいなぁ！なら俺は好きにするもんね！（前書き）**

戦闘描写って難しいなぁ・・・・
今回は書いてないけど。

**置いてけぼりはひどいなぁ！なら俺は好きにするもんね！**

「なんだと、謎大陸（グリムリバー）に攻め入る？いつの間にそんな話に」

「さぁ？こちらの同盟が締結したと思ったら大陸協議要請が届いたらしくって、国の代表と救世主には招集かかってるとのことです」

「えっ、ちょっと待てよ。俺病み上がりで起きたばっかなんだけど、お腹に火傷があるんだけど」

「この街、私達の国の領土じゃないのにメチャクチャに壊しちゃったせいでかなり迷惑かけてるんですよねー・・・・。おかげで同盟締結がちょこぉーと不利なったりとかー、私達教育組の給料が全部消し飛んじゃったりとかー」

「よーしキリキリ働こうかねー。身体のじっくり休めたことだしー！火傷？つばつけときゃ治るよね！」

「頑張ってくださいね。因みに私は国の運営にも関わってるので今回はお留守番です、代わりの先生が付くので訓練を怠らないようにお願いしますね」

「え、マジで？ルカ子以外の先生かー・・・・」

「大丈夫ですよ。その人も私と同じ上級魔導管理官ですから」

「いや、そうじゃなくてさー・・・」

「はい？」

「初対面の人とか、恐いし・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

戦争は常に人間の最悪の部分を引き出す。平和な時ならあいつも普通の男だ。――――――――――――――――――――――――――――――

―シンドラーのリスト、出典

「パトーラ・ファミル・ネーデリアン少尉です、今回ルカトエーゼ中尉の代行を勤めさせていただきます」

「あ、はい・・・救世主っす。よろしくおねがいします」

「あの・・・・」

「はい、なんでしょう」

「なんで顔を逸らしているんですか？」

「・・・・・・・・・・」

初めまして、パトーラ・ファミル・ネーデリアン少尉です。
上級王宮魔導管理官の資格も持ってて、今年で２２歳になります。
若干１６歳で国の運営にも関わってる天才である彼女に比べれば大
した能力はありませんが、正確さや仕事に対して誠実さなら負けて
ないと思います。
そんな私が今回救世主の訓練について彼女から任された時は正直あ
まり乗り気ではありませんでした。
情けない話ではありますが、私はルカトエーゼ中尉のことが苦手で
す。
若くして大成したその驚異的な才能、伝説的な人物の師事を受ける
事の出来た強運、誰からも愛される容姿に人障りの良い性格。
羅列してみれば自分より完璧に近い人間だと言う事が否応なしに突
き付けられる。
あまり周りの事に対して無頓着な私でも圧倒される実力。
嫉妬だと理解しているが、どうしても思わずにはいられない。
なぜ、私じゃないのかと。
そんな浅ましい自分を、彼女を前にしていると自覚してしまいます。
仕事中に私情を挟む程子供でもないので、顔には出していませんが。
しかし大陸協議の行われる、大陸の中心部に位置するリンドラヌ王
国へ移動する間は一々訓練の時間をとるわけにはいかないので魔術
の講義が中心になります。
必然的に救世主とは顔を突き合わせる機会が多くなるので、コミュ
ニケーションは必須です。
なので早速今後の仕事をスムーズに進める為に救世主と会話くらい
はしようとわざわざ部屋を訪ねたわけなのですが・・・。

（さっきからこちらをチラチラ見ては眼が合うと逸らすという謎の行為を続けてるこの人が、本当に救世主なんでしょうか？）

（やっべぇえええええええええええメッチャこっち見てるこえぇえええええええええええええええええええ）

自己紹介もなく、客人に対しての配慮も足りません。
救世主として強さ云々の前に人としての作法が成ってませんね。
真面目すぎると良く注意を受けるのですが、私はどうもそこら辺のことを見過ごすとムズムズするというか、スッキリしません。
完璧など無いと理解していても、完璧なる存在を求めてしまう。
そんな性格なので魔方陣の術式の効果にムラなく高い効果を追及してしまって、展開までの速度がルカトエーゼ中尉に大きく劣ってしまいます。
自分の融通の利かなさと目の前の少年の態度に、一つ溜息をつく。

（なんでしょうか？異世界の人間とはこのような人ばかりなんですか？）

（どうしよう、ルカ子。助けて、俺には無理だよ。だって顔メッチャ恐いし）

（それにしても、この人。資料を見ると随分術式に偏りがありますね）

（よし、とりあえず自己紹介だよな。対人関係の基本基本！）

（危機察知能力は申し分ないですが、訓練時と平常時の差が激しいですね。基礎を固める前に実戦的な教え方をしてるせいで理論をすっ飛ばして高速展開なんて物を可能としてるのに、まともに覚えている術式は身体強化だけ・・・・なんです、この無茶苦茶な人。これは真面目に話し合いが必要ですね）

「「あの――――――――――――」」

「・・・・・・なんでしょうか」

「い、いえ、なんでもないっす」

・・・・・・・・ホントこの人が救世主で大丈夫なんですか？
さっきから全然こちらを見ないんですが。
これからの仕事への不安に、私はまた溜息をついた。

やばい。
気まずい。
何が気まずいってこの人一向に部屋から出ていく気配が無い。
自己紹介のタイミングも外された俺にはもはや自分から語り始めるような気力というか度胸は無い。
これがツインテならどうどうとエロゲの話を始められるのだが、「獄〇の尖塔の夢月ちゃんがフェラしてくれるシーンは興奮したな」的な導入で。
しかしそれを初対面の人間に出来る程俺の面の皮は厚くない。
なら最初あたりの奇行はなんなんだよってなるが、そこはあれだ、異世界召喚というイベントに無駄にテンションハイになってたからな。
普段の俺なら流石に全裸で人前に出たりしない。
「パンって、パァンッ！って読むとエロくない？」くらいは言うが。
兎に角、今は目の前のクソ真面目そうな顔で俺の顔を凝視してくるこのお姉さんをどうにかしないと俺の顔面に穴が開く。
そうだな、掴みが大事だよな。
何かインパクトのある話題なら俺のペースに巻き込んで話をうやむやにできそうだ。
いつここを出発するのとか、そこら辺の事は俺が考えても仕方ないのでどうでもいい。
もっと別の、共通した話題でこの局面を切り抜けなくてはならない。
えっと、何だろう？
その眼鏡に精子ぶっかけた人何人くらいいんの？
・・・・・・・・・・・やっべぇ、発想からしてやべぇ。

どうした俺、今日はやけに動揺してんな。
取りあえず、エロ系とかはダメだ。
なんか冗談通じなさそうな顔してるし。
ならなんか面白い話題ないのか・・・・・・・。
くっそ！これが同類（へんたい）ならまだ話しやすいんだがなぁ。
しょうがない、ここはあれだ、容姿を褒めてみる。

「あ、そういえば、よく見たら唇がエロいですね（キリッ！」

「はっ・・・・・・？」

導入ミスったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！
あれ？俺ちゃんと褒めたよね？
なのになんで「何を言っているんだこいつは？」的な顔で睨まれてるの？

「・・・・・・なんなんですか、一体？」

ちくしょう！もうこうなりゃやけだ！
どうにでもなりやがれ！

「だからアレっすよ。眼鏡かけてて真面目な雰囲気の女の人って、
総じてなんか唇がエロく見えたりするじゃないですか。フェラの時
エロく動きそうじゃないですか」

「フェ・・・・・・！？」

「パトーラさんもそんな感じでエロくてお姉さん的な感じで素敵だなーって」

「・・・・・・・・・・・・・・・！」

無言のままでカーッ、と赤く染まっていくパトーラさん（２２）。
あり？反応がルカ子たちよりも初々しい。
真っ直ぐこちらに向けていた視線を俯かせ、ロングなスカートをきゅっと握る姿がラブリー過ぎる。
ここに来て妙なスイッチの入った俺は、わざとその俯いた視線を追って身を屈める。

「・・・・・！」サッ！

「・・・・・・」スッ

「・・・・・！？」サッ！

「・・・・・・」スッ

やばい、これ楽しい。

「こ、こちらを見ないでください」

「え、嫌だけど」

「な、なら近づかないでください！」

「え、嫌だけど」

「くっ・・・・！」

顔を赤くしたまま立ち上がり、部屋を出た彼女を追って俺も退出。既に彼女は早歩きで廊下を移動していたので、俺も合わせて歩く。しばらくすると俺が追って来ているに気付いたパトーラさんが、ギョッ！とした表情でこちらを見た後、今度は全力で走りだした。

「な、なんでついてきてるんですか！？」

「いやぁ、いいお尻だなぁ・・・・」

「！！？！？？」

スカートの上からお尻を抑えながら座り込んだ彼女に追いつくことは容易く、嵌められた事に気付いた時には俺は彼女の行く手を阻み手を卑猥な動きでワキワキしていた。

「あ、あなた本当に救世主ですか！？」

「知っての通り、私は救世主（へんたい）だがなにか？」

「気持ち悪い・・・・！」

「ありがとう、最高の褒め言葉だ」

中指と人差し指の間に親指を入れてグッと突きだすと、意味が伝わったのか赤い顔をしながらもこちらを睨みつけてくるパトーラさん。その表情が逆にお姉さま好きの俺のツボに入りテンションが更におかしな方向に上がっていく。

テ　ン　シ　ョ　ン　あ　が　っ　て　き　た　！

「なにやってるですか・・・・？」

だが、そんな俺に終了のお知らせ。

ビクッ！と肩を震わせ、振り向いた視界の先には、とてもイイ笑顔で腕を組んで佇む鬼神（ツインテール）。

一度眼をつぶった俺は、しばし思案した後こう答えた。

「交際の申し込み？」

「取りあえず、死んだ方が世の為ですね」

最後に視たのは縞々のパンツと側頭部にめり込んでいく革靴だった。

## 置いてけぼりはひどいなぁ！なら俺は好きにするもんね！（後書き）

作者は徹夜明けです。

## 面白いコピペがあったからこの小説のキャラで短編してみる（前書き）

いつも通り思い付いた企画をやっつけで始めてみるだけ。
できるだけ面白い奴を集めたつもりです。

**面白いコピペがあったからこの小説のキャラで短編してみる**

ルカトエーゼ（以下ル）「クトウさん？どうしたんですか態々通信魔方陣なんか使って」

クトウ（以下ク）「ぐふっ・・・ルカ子・・・聞いてくれ」

ル「ちょ！？なんかすごい苦しそうですけど大丈夫ですか！？」

ク「大丈夫だ・・・それより、気をつけろ・・・」

ル「え、ええ・・・本当に大丈夫なんですね！？それに気をつけろって何を！？」

ク「取り扱い説明書を二枚重ねて・・・うっかり踏んじまうとすげぇ滑ってこけるんだ・・・・・・」

ル「・・・・ああ、昨日貰って来た変な商品の奴ですか。そんなもの足元に置いて置くからですよ・・・」

ク「ぐふっ・・・・」

元ネタ

３７２　：白ロムさん　：２００９／０５／０４（月）　０２：０９：４８　ＩＤ：ｕＬ＋ＪｄＳＨＣ０

くっ・・・おまえら気をつけろ・・・取説２冊を重ねた状態でついつい踏んでしまうとものすごい勢いで滑ってこけるぞ・・・ぐ

ふっ

３７３　：非通知さん：２００９／０５／０４（月）　０７：５４：５６　ＩＤ：ｔＳＸＹｘＮＫ４０
バカスｗ

３７４　：名無しさん@お腹いっぱい。　：２００９／０５／０５（火）　００：３６：５７　ＩＤ：Ｒｉ０ｏ３Ｌｌ００
＜＜３７２
そんなものを足元に置いておくなｗ

ル「日本語辞典を作ってる時気付いたんですが、日本語には私達で

言うとこの“ｌｏｖｅ”に相当する単語が無いそうですね」

美衣（以下ミ）「そこで私達の国の夏目漱石という人物は、“Ｉｌｏｖｅ　ｙｏｕ”を“月が綺麗ですね”と訳したそうよ」

ク「貴方を愛しています。なんつー恥ずかしい言い回しは日本語にはねぇからな、月が綺麗ですねつっときゃ伝わるって話だったか。・・・おちおち天体観測もできねぇな」

ミ「そしてそれを受けた女性は“・・・死んでもいいわ”って答えるのよね。・・・・キュンとするわねぇ」

クルーネ（以下クル）「“Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ”“月が綺麗ですね”“Ｍｅ　ｔｏｏ”“・・・死んでもいいわ”、か。日本語は凄いな」

ク「じゃあこの前パトーラさんから“角判はまっすぐ捺してください”って怒られたけど、あれは“ふやけるほどクン〇して”って意味だったのかも」

ル「風が冷たいですね」

元ネタ

６５８　：水先案名無い人　［ｓａｇｅ］　：２００７／１１／１３（火）　０７：１３：４４　ＩＤ：０ｖｐＲＹ／５Ｌ０

日本語には、英語の「Ｌｏｖｅ」に相当する単語が無い。

まめちしきな。

６７５　：水先案名無い人　［ｓａｇｅ］　：２００７／１１／１３（火）　１１：１３：５０　ＩＤ：４Ｂ６ｘ＋Ａｐｖ０　？２ＢＰ（１１１）
＜＜６５８
夏目漱石はＩ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕを「月がきれいですね」と訳せって言ったんだっけ。

６８０　：水先案名無い人　［ｓａｇｅ］　：２００７／１１／１３（火）　１１：３９：２１　ＩＤ：Ｌｉ／Ｔ４ｔ＋Ｈ０
＜＜６７５
あなたを愛しています
なんて恥ずかしい言い回しは日本語にはない
月がきれいですね
とでも言えば伝わる
とかいう話だったっけか
おちおち天体観測もできんなｗ

６８１　：水先案名無い人　［ｓａｇｅ］　：２００７／１１／１３（火）　１２：１６：３４　ＩＤ：ｋｚｅＦＤ９Ｈｎ０
＜＜６８１
それを受けて女性が「・・・死んでもいいわ」って答えるんだよね。
なんかキュンとくるよね。

６８２　：水先案名無い人　［ｓａｇｅ］　：２００７／１１／１３（火）　１２：３６：１１　ＩＤ：Ｈｎ２ｈＯＭｌ＋０
”Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ．”
”Ｍｅ　ｔｏｏ．”
「月が綺麗ですね」

「・・・死んでもいいわ」

日本語の圧勝だな

６８３　：水先案名無い人　［ｓａｇｅ］　：２００７／１１／１３（火）　１２：４３：５２　ＩＤ：ｓ７ＷＰｈＵＧｅ０

先週同僚の女に「角判はまっすぐ捺してよ」って怒られたけどあれは

「ふやけるぐらいクンニして」って意味だったのかも

６８４　：水先案名無い人　［ｓａｇｅ］　：２００７／１１／１３（火）　１４：２６：５８　ＩＤ：ｆｒ／ｐＬＸＶＣ０

＜＜６８３

風が冷たいですね。

ク「今回は城抜け出して街の飲み屋に繰り出してみた」

ネリア（以下ネ）「うまい店なら知ってから付いてくるです！」

ク「しっかしアレだな、流石に二カ月じゃまだ文字読めねぇわ」

ネ「ま、仕方ねーですね。ほれ、そこの店です」

ク「おう」

ネ「おっちゃん！いつもの奴二人前です！」

ク「来るの早いな、どれどれ・・・・・・・・なっ！」

ネ「どうです？」

ク「うめぇえええええええええええええええええええええええええええ！！！何これ！超うめぇじゃん！こんなん初めて食ったわ！」

ネ「メンニーって言って、ここじゃ結構ポピュラーな食べ物ですから他にも探せばあると思うです」

ク「マジか！じゃあ、俺ちょっと行って探してくるわ！これ勘定！」
ネ「あ、待つです！・・・・・・行っちまったです」
ク「おいツインテ！アレのうまいとこ見つけたぞ！今度行こうぜ！」
ネ「へぇ、どこにあるです？」
ク「任せろ！抜かりなく店の場所書いてもらったからな！」
ネ「・・・・・・これ、メンニー屋としか書いてないです」
ク「えっ！？」

元ネタ

ドイツ人の知人が出張で3週間ほど日本を訪問した
彼は日本語一切話せないが、
仕事仲間とは全て英語で会話していたので仕事上は問題なし
その同僚の一人（日本人）がラーメン屋に一度連れて行ってくれたが、
そのうまさに大感激し
とにかくその日以降美味いラーメン屋を探索する日々となったそうだ
日本語がキチンと話せなくても片言で「ラーメンください」と言えば
適当に店員が出してくれたので彼は充実した毎日を過ごしていた

ある日、激（゜д゜）ウマーな店を見つけ、同僚にどうしてもその店を教えたかったらしい
店員（おっちゃん）に「この店の住所頂戴」と英語で懇願するも、
さっぱり理解されず
とにかくそれからジェスチャーを駆使して
「この、店、住所・・」と必死でがんばっていたら
おっちゃんが「ああー」と言う表情をして、何か紙に日本語で書いてくれたらしい

住所を手に入れた！と喜び勇んで日本人の同僚に嬉々としてその紙を渡し、
「今度はこの店に食べに行こう！すごく美味しかったんだ！」と話す知人
しかしこの同僚が紙をゆっくり読み上げると

ラ　ー　メ　ン　屋

と書かれていたそうだwおっちゃんwwww
（，・ω・、）ショボーンとする知人の隣で大爆笑の同僚w

ク「母が死んだ。
人が嫌いだった。
想像の世界に逃げ込んだ。
異世界になんてものに召喚された。
がんばるって決めた。
人と接した。
初めて妹意外とまともに喋った。
痛いのが恐いと知った。
言動にそれなりに気を使った。
初めて好きな娘が出来た。
毎日バカみたいに話しかけた。
素直に気持ちを伝えた。

そして、救世主（ヒーロー）にはなれなかったけど、俺には恋人が出来た。
やっとここまで来たけど、俺にも出来た。お前らも頑張れ」

元ネタ

４２　名無しにかわりましてＶＩＰがお送りします［］　投稿日：

２００６／０８／０６（日）　１９：１５：１９．３０　ＩＤ：Ｇ／Ｗ／５ｑ２Ｚ０
７１　：恋人は名無しさん　：２００６／０５／１２（金）　００：３４：１０
ロクに大学行かなかった。
ヒキコモリだった。
人と関りたくなかった。
毎日ネット浸りだった。
がんばるって決めた。
外に出た。
バイトを始めた。
人と接した。
身なりに気を使った。
就職した。
本当に好きな娘に出会った。
毎日話した。
メールも送った。
気持ちを素直に話した。

そして今日、恋人が出来た。
２年もかかったが俺にも出来た。おまいらもがんばれ。

ク「お、グラハム将軍じゃん。おひさ」

グ「おう、クトウか。久しぶりだな、最近どうだ？面白い話はないのか」

ク「お前は俺をどう思ってるんだ。・・・・・この前の話なんだけどさ」

グ「あるのかｗｗｗｗ」

ク「馬車に乗って大陸の中央の方に向かってた時なんでけどさ」

――――――――――――その時馬車が揺れた弾みで向かいの席に座ってたパトーラさんの胸を触っちまったんだ。

ク『すすすすす、すんませんでした！わざとじゃないんです！』

――――――――――――そん時はもう怒らせたらヤバい人だっ

て分かってたからすぐ謝ったんだよ。

パトーラ（以下パ）『い、いえ、わざとでないのはわかってますから気にしません』

――――――――――――――――って言ったから。

ク『いいんですか！？んじゃ遠慮なく！！』

パ『え゛！？ちょあっ、何して・・・・やんっ！』

ク『モミモミモミモミ』

パ『んっ・・・・・いい加減に、してください！！！』

ク「――――――――――――って言われてボコボコにされたな、女ってわかんないな・・・・」

グ「女は確かに嘘つきだな」

元ネタ

１８１　可爾（関東地方）　２００８／０８／０３　０３：５１：２４　ＭｔＯ８００Ｐｆ０

俺も昔、電車が揺れた拍子に偶然女性の胸を触ってしまって

「すいません」て謝ったら

その人が「あ、いいのよ」って言ってくれたから

「いいんですか？」と言って藻ませてもらったらピンタされた・・・
女ってわからないよな・・

ル「この前講義してた時のことなんですけど」

ク「ふんふん」

ル「生徒達がよく伝言を書いた紙を回しあったりしてるんですよ」

ク「あー、そういうの良く聞くな」

ル「私そういうが気になっちゃって、何とかしてやめさせようとし

たんですね」

ク「教師側からしてみれば腹立たしいかもしれんな」

ル「それで何かを後生大事に回しあっている生徒を見て、絶妙なタイミングでそれを糾弾したんです」

ク「ほうほう」

ル「『なんて書いてあるのか読んでみなさい』って言ったら、紙を持った子に『ミルクパン』って言われて呆気をとられちゃいました」

ク「ぷくっ・・・・・！」

ル「うう・・・」

元ネタ

中学の時、授業中にふと下を見ると、
使用済みのふりかけの小袋が落ちてた。
深く考えずに拾い上げて、後ろの席の子にさも大事そうに
小声で「これ回して」って頼んだら、
そのまま列を越えてどんどん回り始めた。
「みんな乗ってくれるもんだなあ」と思ってたら、
突然先生が「はい、そこの伝言板！」って鬼の首を取ったように叫んで、
その時回って来てた子を立たせて「読んでみろ！」と。
その子は立ち上がって一言、「かつおふりかけ」。
あの時の先生の狐につままれたような顔は忘れられません

ク「おい店員さん！俺が頼んだのこれじゃねーんだけど・・・・ってなにやってんすか」

ユリィーナ（以下ユ）「最近、というか一話目からまったくと言っていい程出番がないから、せめてここくらい出張ろうと思って」

ク「あんたお姫さまでしょうが」

ユ「まぁまぁ、この空間ではそういうこと気にしないの。カーニバル・ファンタズム的なノリでやり過ごしてよ！」

ク「いや、まぁいっすけどね・・・・。じゃあ、店員さん」

ユ「はいはい～！」

ク「これ俺が頼んだ奴じゃないんだけど」

ユ「え！本当ですか！」

ク「しっかりしてくれよ」

ユ「にゃい！すいません！」

ク「よし許そう」

元ネタ

３４３　名前：一名でお待ちの名無し様［ｓａｇｅ］　投稿日：２００８／０３／０７（金）　１４：３４：４８　ＩＤ：ＣＱｄｆｏｂＶｓ
ペペロンのＷ頼んだのに、普通サイズが来たから
ウェイトレスの子に「俺頼んだのこれじゃないよ」っていったら
大慌てで伝票ひったくりながら「にゃい！すいません！」と言ったので許したｗｗｗ

ク「はぁ～、疲れたね～」

ル「お疲れ様ですクトウさん。手伝ってもらってすいません」

ク「ルカ子の世話んなった孤児院なんだろ？大した事ねぇって」

ル「子供好きなんですか？」

ク「ん。まぁ、嫌いではないな」

ル「そうですか・・・」

ク「ああ・・・」

男児「わー！お姉ちゃんたちがラブラブだー！」

女児「ねぇねぇ知ってるー？大人って、毛が一杯生えてるんだよー

！」

男児「毛がー？」

女児「うん！おまたにいっぱい生えるの！」

男児「えーうっそだー」

女児「うそじゃないよ！ホントだもん！」

男児「じゃぁ、おにいちゃんわ？」

女児「もちろん生えてるよ！私見たもん！」

ク「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ル「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ク「いや見せてないからね！？流石の俺もそこまで守備範囲広くねぇからね！？」

ル「言い訳はそれだけですか？」

ク「いやマジでマジで！！誤解だって！つかずっと一緒に居たじゃん！？」

ル「ごめんね皆、お姉ちゃん。ちょっとお兄ちゃんとお話があるから、さきに戻ってくれるかな？」

男児・女児「はーい！」

ル「・・・・・・・さてと」

ク「・・・・なんか最近この流れだなぁ」

元ネタ

５８１　：名無しの心子知らず　：２００７／０１／１３（土）１７：２５：５０　ＩＤ：／９Ｖ２ｈｓＳｈ

ボランティアに行った保育園で社会的に抹殺されるとこでした。
何故か大人になると○ン毛が生えるという話題で話していた男児と女児。

女児「大人になったら毛が生えてくるんだよ！パパもママも生えてるもん」
男児「じゃあお兄さん先生（漏れ）は？」
女児「大人だから生えてるよ！」
男児「うっそだあー」
女児「ホントだもん！あたし見たもん！！」

瞬間、保育室の大人は全員凍りつきますた。
その子は何でもかんでも「あたし見たもん」が口癖だったので
誤解には至りませんでしたが、
あの瞬間の保育士さんたちの引きつった笑顔は忘れられない…

そんな感じで設定と被るものを探してみた。

## 面白いコピペがあったからこの小説のキャラで短編してみる（後書き）

楽しかったとだけ言っておく。

**俺以外の救世主の方ってどんなんよ？**

「てめぇ、死ぬかと思ったじゃねぇか！首がゴキッてなったぞ！？」

「最近はあんまり手加減しなくていいから楽です、立派に・・・育ちましたね」

「騙されない！俺は騙されないよ！そんな殊勝なことお前は言わない！！」

「あーあーそうですねー」

「イダダダダダダダダダッ！！？」

「これが・・・我が国の救世主・・・・」

「あいだだだだだだだだだだだ！？」

「んじゃそろそろ沈むです」

「ぐはっ！？」ブリィッ！！

「洩らした・・・救世主なのに洩らした・・・・」

「また洩らしやがったですか、下着用意してねぇのにたくっ・・・・」

「しかもなんかこの事態に馴れてる・・・・・」

「あ、パトーラさん、ちょっと下着買いに行ってくるのでこのバカ

をトイレにブチ込んどいてくださいです」

「あ、はい・・・・」

生きるべきか死ぬべきか。それが疑問だ。――――――――――――――――――――ウィリアム・シェイクスピア

「はい、そんなこんなやってきましたリンヌドラ王国。でかいっすねーなんつっても高速道路より道幅が広い。人の行き交いも多い、並ぶ露店も多い、活気溢れるクソガキ共も多い、物が溢れかえって正に交易国家だな。パトさん、そこの露店で一杯やらない？喉乾いちまって」

「そうですね、そろそろ正午ですし食事をとってから王宮に向かいましょう」

「ねえねえお兄ちゃん！あの果物みたいのなにかな！？」

「はーいはーい、身を乗り出したら危ないよー。楽しいのは解る、俺も解る。ちらっと見かけた飲み屋の店主が女だった、ぜひお近づきになりたいが俺は救世主でお前は姫で王様、勝手に動き回るのは

禁止」

「えーつまんなーい。もう宮廷料理なんて食べ飽きちゃったよー」

「解ってるけどね、パトさんが姫さんがちゃんとしとかないと示しがつかんってさ」

ようお前ら久しぶり、具体的には2週間くらいか？
すまんな、作者の体調が優れなかったうえに部活でなんか入賞しちゃったらしくてさ、いろいろ忙しかったんよ。
因みに、俺の主観でいうなら冒頭の会話からもう1週間過ぎてる。
各国の代表者が一同に会する、大陸協議とやらが開催される大陸中央に存在するリンヌドラ王国へようやく到着したところだが、それだと時間飛び過ぎってことで今までの旅路を俺の愚痴風に聞いてくれ。

『マジかー姫様とパトーラさんと同席すかー超気不味いんだけど』

『え、川渡んなきゃいけないの？転送魔方陣とかは？そこら辺は研究中の代物だから一般道とかでは実地されてない？マジすか』

『おぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！ふ、船酔いろろろろろろろろろおろろろろろろろろ！！！』

『え、勉強しなきゃダメ？あ、はい解りました。せめて蔑む目をやめていただけませんか？』

『大地、帰ってきた、俺生きてる・・・！って、美衣じゃねえか

奇遇だな？あん？どうせなら同席するかって？それよりお前、グラハムどうした？え、お前の護衛してんの？へぇーそうなん、相席は無理じゃね？だって俺魔術講義受けないといかんし。あ？なんか変わったかって？パンツが黒のヒモになってるな、後化粧似合ってねぇぞおまぅんっ！！？『

『お腹痛いんで講義休んでもいいですか？ダメ？あ、はい解りました。魔術の基本的運用基準は己の身体であり、式を繰り、纏い、組む、これらを全て己の内のイメージで完成させることがうんたらかんたら』

『姫さんよぉどうにかんなんねーの？馬車で旅すんのもいいけど風呂入らんにゃ臭いぜ？宿がない？マジで？高原地帯ェ・・・・』

うんまあ長かった、旅行という初めてのシチュエーションに胸がわくわくしなかったかというとそんなことはない、ケミカルハッピーに上がっていた。
まぁ、その河越え山越えな旅路もここ、リンヌドラ王国に到着したことによって終了した。
モンスターとかは出くわさなかったから普通に旅行だったけど、感慨深いものあるなぁ。
さて、今はこの我がまま姫をどげんかせんといかん！
こいつ城の外が珍しいのか気を抜くと脱走をかましやがるので俺も捜索に駆りだされる。
何故か良く俺の所にいるので、姫様の監視役を押し付けられました。
そんな訳でこのお食事時に賑わう屋台通り、漂う匂いも食欲をそそる中でこのお姫様がどっかにトンズラしないように、その上でお姫様がお楽しみいただけなければならない。
ここは露店も多いしな、庶民の味を仕込むのもいいかもしれん。

この世界の庶民の味知らんけど。
そんな感じで馬車から店を物色していると、おっさんが大声を上げながら焼き鳥っぽいものを焼いている店を発見した。
それを見た瞬間、俺は姫さまを抱えて馬車を飛び出す。

「ちょっと！？」

「パトさんごめーん！後よろしく！」

「なになに！？どうしたのお兄ちゃん！」

「あああああああああああもおおおおおおおおおおおおおお！！！」

遠ざかっていく馬車から聞こえるパトさんの声。
小脇に抱えたお姫様の声。
聞こえないなぁ。
今の俺の意識は香ばしい匂いとタレでテカテカ光った旨そうな串に刺さった焼き鳥に使われている。

「おっちゃん！席ある！？」

「ん？なんだあんちゃん、小奇麗な嬢ちゃん連れてデートか？」

「そんなとこだな」

「そうかそうか！てめぇ普通の客の倍の値段で食わせてやるよ！」

「ははっ！男の嫉妬は見苦しいぞ禿げ！いいからとっとととここの料理全部持ってこいよ！」

「なんかいきなり罵倒し始めたよこの人達」

暖簾を潜って席に着くと屋台のおっさんのイメージを裏切らないが朗らかな笑顔で罵倒してきたので、俺も机をバンバン叩きながら罵る。

「・・・・」ニヤッ！

「・・・・」キラリッ！

黙ってにやつく俺達を不思議そうに見つめる姫様。

「調子に乗るなよこの野郎！幸せになって死ね！」

「黙れおっさん！奥さんでも見つけて家庭でも作れ！」

「仲いいね、２人とも」

ランチタイムと言うほど上品ではないが、中々楽しい食事になりそうだった。

「おいしー！おじちゃん！これおいしいわね！」

「だろ！嬢ちゃん良くわかってんじゃねぇか！」

「しかし塩加減が絶妙だな」

そんなこんなで楽しい食事は続き、最初は馴れない庶民の味に戸惑っていた姫様も一口食べれば焼き鳥の虜となった。
更には次々と串が積まれていき、未だそのペースが衰える事は無い。
姫様、ちっさいのによく食うな。
やっぱ宮廷料理とか食ってっと胃が膨らむんだろうか。

「ふぅ・・・・ふぅ・・・・。ターシャたん、疲れちゃったすよ」
「ターシャたん言うな」
「あ、ターシャたん、なんかおいしそうなお店があるっすよ」
「うん？そうだな、いい匂いがする」
「漏れが奢っちゃうんで一緒に食べませんかターシャたん？」
「ターシャたん言うな。そろそろ腹も空いてきたしいいか」

他の客が来たのか、暖簾の外から声が聞こえてきた。
なーんか聞き覚えのある話し方だなー特にネットで、と思いつつも俺は特に気にしてなかった。
なぜなら姫様の口についたタレを俺がフキフキしていたから。
こちらに眼を瞑って顔を突きだす姫様に、ファーストキスを奪われたことを思い出しながら不覚にも萌えた。
しかし、俺の意識は強制的に暖簾を潜って来た存在へと移しざる得なかった。

「熱気・・・！？」

いきなり駆け抜けるムァッとした空気。
ズングリとした巨体、額から玉のように流れる水滴、何重にも積み

重ねられた肉壁、その周囲が歪む程の熱量。
元の肥満化が問題となっている現代社会では対して珍しくないがこの世界では庶民も王様も忙しいのか引き締まった人しか見てなかったから久しく忘れていたこの体型・・・・！
メタボだ、メタボリックシンドロームだ！！！
そいつが席に着くと、ズンッ！と重々しい振動が伝わってくる。
こんな奴もいたのかこの世界・・・・・・・・・あれ？
こいつの服に書かれた文字・・・・、日本語じゃね？
『大器』って達筆な字で書かれたシャツが汗を滲ませ大きく引き伸ばされている。
つか『大器』って、良いセンスしてんじゃねーか。
いやいや、そうじゃない。
今疑問に思うべくは、隣で凄い勢いで食ってるくせにマナーはしっかりしてるこの男の存在だ。
日本語なんて代物がこの世界にあるってことは、何か変に屈折した理由が無ければ導き出される答えは一つ。
・・・・・・・・・こいつ、救世主か？

「おい豚野郎、あまり近づくな暑苦しい」

「えええええええええええええええええええ！！？ターシャたんヒドス？！」

「ターシャたん言うな、抉るぞ」

「・・・・・・サーセン」

このダメさ加減・・・・！

間違いねぇ・・・こいつ救世主だ！

「・・・・・・・・」

ま、どうでもいいか。
同郷と言っても俺が住んでた地域では見たことない奴だし、これが美衣とか身内だったら声かけるがあいにく俺は他人が大嫌いだ。
過去の経験とかも含め俺はあまり他人と眼を合わせて会話することを避ける。
だってなんか自分が悪いことした気になってくるから、大抵してるけど。
そんな訳で俺が奴に話しかける理由はない。
今は食事と姫様の無邪気な笑顔を楽しむべきだろう。
姫様が実は頭の良いお子様で俺に凄まじい敗北感を与えてくることを忘れられる時間なのだから。

「あ、おっちゃん俺次塩で１０本頂戴！」

「親方殿、漏れ塩で１０本所望っす！」

「む・・・・？」

「ブフ・・・？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

互いに一瞬だけ視線を交わすと、示し合わせたように同時に逸らす俺とメタボ。

「おっちゃん、やっぱ俺２０本で」

「漏れは３０本お願いしまっす！」

「５０本」

「１００本」

「１５０本！」

「２００本！！」

ドンッ！席を立って睨みあう俺達。

「ああ？あんだ豚ぁ、てめぇ喧嘩売ってんのか？」

「チミこそ食事中に席を立つとは、マナーがなっていないんじゃないかい？」

「屋台にマナーなんつーお綺麗なもんはねぇよ。意地汚いこと言ってなぁ、流石メタボ」

「ピグッ・・・！ほ、ほほほほぉう、普段なら僕も許してあげるんだけどね。タイミングが悪いなぁ・・・・！」

チラッとその肉体の影に隠れていた誰かに視線を送ったそいつに、俺は何となく言いたい事を悟った。

「なるほど、女か。メタボも無駄に肥えている訳では無いという事だな・・・」

「デブはメタボなのではない、グルメなのだ・・・！」

「いいだろう！その覚悟、見せて貰う！」

再び席に着く俺とメタボ・・・いやさふとっちょ！

「「大食い対決だッ・・・・・！」」

仁義なき不退転の戦いが、今切って落とされた。

次回に続くかどうかは未定！ｂｙ作者

**おまっ・・・！魔法なのか超能力なのかどっちかにしろよ！**

「ぐ・・・ぅえぇ・・・ごくっっっ！！はっ！どうだメタボ・・・！」

「モグモグもぐもぐモグモグモグ・・・・」

「なん・・・だと・・・・！」

「ブハハハハハハハハハハ！！どうしたんだい？もう限界か？いいよいいよ？僕が全部食べてあげるからさぁｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「うぜぇえええええええええええええええええええええええええええ」

「ちょっと運動している程度で腹の面積の半分以上が胃の僕に大食い勝負を挑むなんて・・・、愚かの一言っ！！！」

「ちっ・・・・これだけは使いたくなかったんだがな・・・・」

「んん？負け惜しみかい？それなら鼻に串刺してザル踊りでもして貰おうかな？」

「新陳代謝・・・・強化っ・・・・！」

「ブヒッ・・・・！？」

「モグモグモグモグモグモグモグモグモグモグ・・・・ゴクッ！！

おいおっさん！次持ってこい・・・・・！

「バ、バカな！？この僕が・・・・・追い抜かれている！？」

「身体強化の系統は微細に渡るが故に奥深く、そしてどこまで想像で勝負できるということなのだよ！ただ胃袋がデカイだけの皮下脂肪の塊には強化する部分が既に皆無だからなぁ！！！」

「ブ、ブタァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

「口ほどにもないなぁ！ハハハ！ハァッハハハハハハハァあアアぁンんん！？？」

「？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「え、何この人。いきなり悟りを開いたような顔で固まってるだけど」

「・・・・・・・・・・・うんこ、漏らしちゃった」

「oh・・・・・」

希望と恐れは切り離さない。希望のない恐れもなければ、恐れのない希望もない。――――――――――――――――――――ラ・ロシュフーコー

「・・・・・・あの、これ、一応買って来たんだけど」

「・・・・あ、ごめんね？初対面なのに服買いに行って貰っちゃって・・・・・・」

「あ、いや、そんなに気にしてないからさ・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・」

久留節（くるぶし）　谷雄（たにお）、今俺に中古っぽいズボンを手渡してきたメタボの名前だ。

いや、メタボなんて言葉は失礼だな。

メタボさんだ、メタボさんは大食い勝負で新陳代謝が上がるという事は便意もそれだけ近くなることを失念していた結果盛大に漏らし店から叩き出されたクソ野郎に下着を買ってきてくれた。

姫様とかメタボさんの連れの女の人からは正に糞に集るハエを見るような目でみられた。

ふっ・・・・だが驚くなよ・・・！

脱糞を人前に曝すのはこれが初めてではない・・・！！
・・・・・・・・・・・何に張り合っているんだ俺。
路地裏でスゴスゴと着替えを終え、何食わぬ顔で戻ってくる俺に気まずそうなメタボさん。
すると姫様がパタパタとやってきた。

「お兄ちゃん！パトさんが今屋台の人と損害賠償について話し合ってるよ！」

ズシャアッ！と崩れ落ちる俺。
流石にこれはギャグで済ますには事が広がり過ぎた、金払わすんは迷惑かけ過ぎやで俺ェ・・・・。
お姫様が鼻つまんでるのも倍プッシュだぜぇ・・・・。
シット・・・世界は俺を呪ってやがる・・・・。
だぁぁああああああああああああああああがぁああああああああああああああああああああああ！！！！！！
このままじゃぁ済まさせないのが俺ぇ！
限りない伏臭（アンリミデッド・キング・フレーバー）だ！！
こうなったらとことんやってやる！！

「ふっかぁああああああああああああああああああああああああああああっっっっつうぅうううううううううう！！！！！」

「ちょ、どないしたんウンコマン」

「俺の中に俺が戻ってきた、歌って踊ってロックンロールだ、メタ

ボさんさぁいくぜぇ！！」

「うん、落ち着こうか？」

「お前の音楽への熱いソウルにぃいいいいいいいいいいいいいい挑っ戦っ状ぉを叩きつける！！」

「・・・・・・・ほう」

「やらないか？この漲るリビドーを、俺達の文化の圧倒的な音楽性を、この世界の人達にっ！！」

「なるほど・・・・・その勝負、たぁしかに受け取ったぁ！」

「イエスッ！！受け取れ！！」

懐から通信魔方陣をいじくって作った声拡張魔方陣（マイク）を投げ渡す。

ノってくれると信じていたぞ同志（オタク）よ・・・！

マイクを手にしたことにテンションが上がっているのか、派手に上着を投げ捨てシャツだけになるメタボさん。

俺もそれに応えてずっと腰に掛けてた剣を外して放る。

「くぁ～こ・・・くぁ～こがっ！？なんだ！！あ、貴様！我ことは丁寧に扱えとあれほど・・・！」

クソ魔剣がその扱いにギャーギャー文句を垂れてくるが無視する。

こいつがとれたお蔭で食い潰されていた魔力が戻ってくる。

ククククク、こっちもテンション上がってきたぜぇ！！

「言い出しっぺがやってやんぜぇ！俺の歌を聞けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

自分な不利な状況を騒いでうやむやにする。
我が間部家に伝わる常套手段っすよ。

「あ、言い忘れてた、メタボさん」

「え？なに？」

「ついて・・・来れるか？」

「間違ってない・・・！間違ってなんか・・・ないんだから！！」

「ほぉーしがぁ！またぁたくこんなぁよぉるにぃ！ねがぁぃごとぉひぃとつ！」

「かなぁうならこのぉときぃよつづぅけとぉ！」

現在、大通りにてメタボさんと『星が瞬くこんな夜に』を熱唱中。
俺とメタボさんの歌唱力は無駄に高く、昼間っから大人数の見物客ができるほどの腕前だった。
メタボさん、さっきはキャラ付けの為に喋ってたんじゃないかってくらいイイ声だ。
姫さんとメタボさんの連れのお姉さまは俺達の後ろでノリノリで煽っているのだがパトさんが見当たらない。
見物客の向こう側からなんか怒声が聞こえてくるのは気のせいだろう。

「ほぉしぃがまぁたぁたぁあああああああああああくっっ！」

「こんなぁ！こぉんなぁ！よぉぅうるぅにぃいいいいいぃイイいいぃイイィイイいいいいいいイイッッッ！！！」

ラストを歌い上げ、ビシィッ！とポーズを決める俺達。
しばらくの静寂の後、誰からとも解らず拍手と歓声が響いた。
肩を若干揺らし、息切れしながらも笑っているメタボさんとハイタッチした。

「イエッ！！」

「ハッハァッ！！」

楽しい。
そう、楽しかった。
誰かと共に何かをすることが、こんなに楽しいものだと知らなかった。
俺の気のせいじゃなければ、メタボさんもそう思っているのだろう。
彼の眼から伝わる期待と不安と興奮は、俺も何故か手が震えているから解った。
こっちの世界の男の知り合いと言えばグラハムくらいだったが、メタボさんとは同郷ゆえか、趣味があっていたのか、仲良くなるのとは違う、もっと特別な意味で親しくなれそうだった。
そう、言うなれば・・・！

「魂（こころ）の強敵（とも）よ・・・！」

「魂（こころ）の強敵（とも）よ・・・！」

ここに、俺とメタボさんのソウルブラザーズとしての真の出会いが

果たされた。

「メタボさん！次は熱き魂を胸に！『未来への咆哮』でどうだ！！」

「おぅけぇいィいいいいいい！！どんとこいだぜ兄弟！！」

テンション上げマックスだぜぇ！！

「ちょっと通してください！！こらぁ！何やってるんですか！！あなたホントいい加減にしてくださいよ！！？」

パトさんの声が聞こえたような気がしなくもないが、気のせいだろう。

俺達の歌は、まだ始まったばかりだっ！！

「キシュ・・・ラ・・・・ラ・・・バ・・・・・ア？・・・・・・・アァアアァアァ！！・・・・ミ・・・チュぇ・・・ケェ・・・・た・・・・！」

ドゥオォオオオオオオオオォオオオオオオオオオ！！！

突然、轟音と閃光が俺達の声を掻き消しながら鳴り響いた。

「ッ！？」

「うっ――――――――――――――――――――――――――――――――！？」

まるでスタングレネードを喰らったような感覚。
そんな経験は無いのだが、この表現が的確だろう。
ルカ子の爆破魔方陣の経験が役に立ったのか、聴覚より先に視界が戻ってき・・・た・・・？
・・・・・・・・なんだ、これ？

「な・・・んだ・・・」

「フシェ・・・ル・・・ルルルルェ・・・バァ・・・・」

先程まで人混みのあった場所には、何かの焼き焦げた匂いと黒く炭化した何か。
それが人間であることに気付くのに数秒かかった。
もしモンスターの焼死体とか見てなかったらゲロ吐いていたかもしれない。
正に焔獄と呼べる空間の中心に、何事かを呟いている布切れを纏った巨影があった。
そのサイズと布上からでもわかるシルエットは人間の物ではないこ

とを悟らせる。
ゴキゴキッ・・・と不気味な音を発しながら今もなお変型していくソレと、以前も感じたことのある何かが削ぎ落とされていくような感覚。
そこまで来てようやく、人混みの中にパトさんが居た事を思い出した。
周りには呻き声も混じった焦土、最悪の結果が頭を過る。
自分の血の気が煮たっていくのがわかり、目の前の謎生物に跳びかかりそうになった時だった。
若干こちらに近い場所の焼死体が微妙に動いているのと、見覚えのある顔が目に入った。

「ッ！パトさん！！」

「う・・・ぁ・・・」

パトさんが生きているという事に安堵する。
見ると同じような人がチラホラ見えた。
だがまだ安心はできない、謎生物の変体が終わったのかその風貌はバケモノと呼べるものになっていた。
こいつが近くにいたのではオチオチ治療もできん。
一度深呼吸して頭の中身を切り替えた。
死ぬ覚悟はできたか、殺す覚悟はできたか、殺される覚悟はできたか、無残に、無駄に、無様に、無用に、無償に、無価値に、徹頭徹尾誤字無く遺憾なく断りなく、その命を投げ捨てに行く覚悟はできたか？

「・・・・・行くか」

「・・・待てよ兄弟」

ガシッ！とメタボさんに肩を掴まれる。

「離せメタボさん、おらぁ今気ぃ立ってんだ・・・・」

「ばっか、俺も行かせろって言ってんだよ・・・」

そう言って俺の横に立ち前回の初登場から考えられない程引き締まった表情のメタボさんは、バケモノを睨みつけ拳を握っていた。
俺は無言で拳を差し出すと、メタボさんは意図を察して拳をぶつけた。

「姫さん、ごめん。ちょっくら行ってくるわ、パトさんよろしく」

「あーもー、無事に帰って来てよー。怪我されると面倒だし」

「えっ、むしろ汚したいけど」

「ん？」

「んん？」

「・・・・・・なんの話だっけ」

「え、お前の貞操の話じゃないの？」

「違うよ！？」

シリアスを長く続けられないのが俺。

「タ、ターシャたん。じゃ、行ってくるっす」

「ターシャたん言うな。ま、あんまり心配かけるなよ」

「うっす」

・・・・・・あそこなんか妙にストロベリーな雰囲気が漂ってるな。
あれ？おかしいな、なんかお姉さまの顔が染まってる気がするぞぅ？

「待たせたな兄弟」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、うん」

「？どうしたんだ？」

「一つ聞いときたいんだけどさぁ、・・・・・・お前って童貞？」

「は？あんな負け犬共と一緒にしないで欲しいんだけど」

それを聞いた瞬間俺は身体強化を高速展開させブタ野郎を掴み揚げた。

「てめぇもしかしてヤったんか！？あの美人とヤったんか！？」

「うひょーｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

くっそ！なんてことだ！！
お前は友達になれるって信じていたのに！！
ていうかお前その肉に埋もれないってどんだけ立派なブツ仕込んでんだよ！！！

「ァアア・・・・アアァアアアァアァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

「うっせぇええええええええええええええええええええええええええええええええ！！！」

バケモノの叫び声が不快だったので、爆発で散らばっていたレンガを全力で蹴飛ばしバケモノの口にボッシュートさせた。
炸裂音と共に大きく仰け反るバケモノ、それ見てガッツポーズ俺。

「とりま、注意引き付けてここから離れっぞ！」

「ええ！？走るの苦手なんだけど！？」

「言うとる場合か！！セクロス出来るだけの体力はあるんだろうが！！」

「え、俺が上だと重いっつって乗って動いてもらったし」

「・・・・・・・・・・・てめ今なんつった？」

「マグロ野郎でサーセンｗｗｗｗｗｗ」

「殺してやる！ぜってぇ後で殺してやる！！」

「ふはははははははははははは負け惜しみざまぁｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

そう言って何故か身体強化した俺より早く逃げ去っていくメタボさん。

「あ！待てこらぁ！そしていつまでも痛がってねぇでとっとと追ってこいよカス！」

地面に転がってたレヴァンティンさんを拾ってバケモノに投擲。

「貴様いい加減にぃ――――――――――――――――――――――――！」と聞こえた気がするが気にしない気にしな〜い。

良い具合に俺達を追ってきたバケモノを引きつけながらぶち殺す算

段を思考する。
さぁて、楽しい楽しい殺し合いの始まりだ。

## おまっ・・・！魔法なのか超能力なのかどっちかにしろよ！（後書き）

主人公はこの世界に大分染まり始めたようです。

## 俺が戦闘をまじめに書くと思っているのか？（前書き）

人生・・・そんなもんですよ。

**俺が戦闘をまじめに書くと思っているのか？**

「へぃ！相棒！この辺の地理詳しい？」

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・任せて、僕が召喚された国の城下だしね飯屋なら大体把握してる・・・・！」

「使えねぇ！」

「うるさいよ！」

「他に覚えてるとこねぇのかよ！早くしないと宮崎作品の顔のない人ばりの動きで追ってくるアレに攫まんぞ！！」

「わぁとるわ！あ！そうだ！あそこなら広いし別宅らしいから人がいない！」

「よし！で、どこ？！」

「マイワイフの別宅」

「死ね！リア充死ね！くそっ、仕方ねぇ！そこまで逃げきんぞ！！」

「了解！！」

「つーかこれでも魔術使ってんのになんでお前ついてこれんの？」

「ご褒美の為なら、全力疾走（フルマラソン）だってやってみせる！！」

「さくら～ふぶぅ～きを～」

「流石に二十四時間は無理っ」

千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす。――――――――――――――――――――宮本武蔵

「「うおっしゃぁらぁああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」」

結構広い庭のある本当に人がいないのか疑問な宅邸の鉄格子をメタボさんと蹴破りながら傾れ込む。
後方からすげー勢いでタイラントさんが御入館。
いや、マジタイラントだから。
胸筋と顔のグロさが半端ないから。
あ、レバ剣が首に刺さっている。
んー２０ｃｍか・・・もうちょい刺さってると思ったんだけど、贅

沢だな。
対峙する余裕は奴さんの異様なやる気により不可。
動き続けながらの敵の見極めに戦術の模索か、まだ訓練より余裕あるなイケるイケる。
問題はメタボさんとの連携だよなぁ。
ソウルブラザーズっつっても出逢ってまだ二時間も経ってない、合わせろってのが無理っていう。
自分としては建物ブチ壊していいなら建物でやりたいんだけど・・・・・、

「自分建物でやることあるんで引きつけといて！！」

「なぁ室内せ・・・・・」

先越された！！
しかもこちらの返事も待たずに建物の中に消えていくメタボさん。
ええええええええええええええええええええマジすか！？
あれ正面対決とかバカじゃないの！？
一撃喰らえば骨折れるわ！！
レバ剣ないから魔力持ってかれないけど、俺が操れるマナの量ってそんな多くない訳で・・・・・。
タンクはデカイんだけど蛇口がストロー並みに細い、そんな感じ。
だから無駄に余ってる分はレバ剣が持っててるんだよ。
しかし俺に今奴を打倒し得る手札がないのは事実、冒険する程現実に叩きのめされてない。
ここはメタボさんを信じるしかないか、何をするかは知らんが。
やるっきゃねーか。

「かかって来な、てめぇの粗末なポークを日本人風味に醤油でボイルしてやんぜ！」

「ヴァアアアアアアアアアアアアアァアァアァアァアアアアアアァアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「っ！！なんだと！！」

俺は驚愕した。

振り向いた奴はボロイ布を何処に不法投棄したのか全身を露出していた。

それは時々振り返ってたから解っていたが、初めて全身を確認できたのは今だ。

そして俺は視線は奴のある一点を注目していた。

いつも疑問に思っていた。

「ベルセルクとかじゃモンスターにチンポついてたけど、この世界のモンスターってどうなんだろう」と。

今見える限りでは、奴の股には我らの水鉄砲を超えるアームストロング砲は存在していない。

毛もなくテカテカな筋肉質の身体をしているのだ、埋まっているということではあるまい。

・・・・・・・視えたっ！！！

あるぞぉ！エロゲ見た事あるぞ！

あの縦に割れて二つの穴のある代物は・・・間違いなくお『自主規制』！！！

なんと・・・あのグロくてムキムキなみてくれで・・・・・。

奴め、女か・・・・。

「ジェァアアアアァアァアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「うおっ・・・！」

すげぇ当たりくない感じの柔腕が俺の首を螺子飛ばそうと轟音付きで迫ってくる。
う～ん今回もデッドｏｒアライブだなぁと思いつつ、冷静に滑る様に身体を倒して事なきを得る。
勢いが止まらず真上を通過していくタイラン子さん。
興味本位と、神経が集まる急所だったよなぁという豆知識から、ケツに身体を倒した勢いを利用した回し飛び膝蹴りを打ち込んでみた。
膝に伝わる、メッサ堅いケツの肛門筋を掻きわけ捻じ込んで行く感覚。
こいつとアナルセクロスしたら俺のがもげるな。
閑話休題。
着地と同時に振り被られた拳を視認し、ギリギリのところでかわす。
左脇の服がゾリゾリ削られていく、冷や汗ものっす。
基本漫画みたいな動きだけど、これでも人間の出来る限界に根差してるからね？
現在のバキさんまで人外な動きはしてない。
身体強化した身体のスペックでも、五メートルを３歩で１秒。
全力疾走なら百メートル７秒行くだろうけど、咄嗟に動くだけならこんなもんだ。
十分に人間のスペックの限界に迫っているが、この肌の触れ合うギリギリの場面ではその速さでも足りないし心許ない。
受け止めるだけの防御力は俺は持っていないから。
技を駆使すれば一回くらいは全神経使い果てしてして可能だろうけど、足止めたら死ぬし集中してる時間ないしね。

てな訳で結局俺ができるのは、メタボさんの策が整うまで避け続ける事っと。

「ヴァロォオォオオオオオオオォオオオオオオオオオォオオオオオオオオ！！！」

「ふぅっ・・・！」

2、3歩離れた場所に後退した俺を正面で捉え、今度は低い姿勢に入るタイラン子。
げっ、タックルか！？
地面を抉る程の筋力で始まったタックル。
横に逃げたら腕に捕まり、前からは圧殺、下に逃げても抑え込まれて結果は同じ。
もうちょっと距離があれば違ったんだろうけど、この距離じゃ取れる選択肢は・・・・これしかないか！
俺は溜めなしで自分の身長ほどその場で跳躍した。
しかしそれでも目の前の肉弾頭からは逃れきることは出来ない。
空中に身を曝した俺はもう動くことはできず、そのままタイラン子のタックルに直撃し大きく弾き飛ばされ宅邸の窓を突き破った。

「っ・・・・ってぇ～・・・・・！」

ムクリと起き上がりながら、自分の身体の調子を確かめた。

「手足が全部震えてるぜおい」

立ち止まっていてもなおビクビクと動く自分の手足の筋肉に、タイラン子との生物差を改めて思い知った。
自分ではあれに勝てない、と。
対峙して感じたことを素直に受け止めた。
もしあの時身体を丸め手足で衝撃を吸収しながら後ろに跳んだ際の接触場所が悪かったら、そもそも跳んだ瞬間をあの勢いで殴り飛ばされたら、一撃で戦闘不能に陥っていたかもしれない。
戦える自信はあるが殺し合うには分が悪い。
こちらに決定打が掛ける。
これをどうにかしなければ、俺の負けは確実だろう。

そこまで考えてとりま建物の中に逃げ込むことにした。
すまんメタボさん、抑えきれんかったわ。
あんなん無理やて。
ちらっとぶっ壊れた窓から外を覗くと、タイラン子が俺の方を見たけどふいっと背を向け走り去っていくのが見えた。
げ、市街地の方に行かれるのは不味い、追いかけないと。

・・・・・・・ピタッ

「あり？」

突然停止し、再びこちらを振り向くタイラン子。
グッと姿勢を屈めたと思うと全力疾走でこちらに向かってきた。
ま、まさか・・・・！
俺は今だ消えぬ手足の痺れを無視して部屋を飛び出す。
それと同時にさっきまで俺が居た部屋の方から物凄い破壊音が聞こえてくる。
野郎・・・、まさかマジで飛び込んでくるとは！！
こら早いとこメタボさんと合流せんと・・・・！

「くそっ！ここまで熱心なストーカー被害にあったの初めてだっていう！！」

愚痴を零し、背中からの咆哮を聞きながら俺はこの状況を打開策を求めてメタボさんを探した。

## 俺が戦闘をまじめに書くと思っているのか？（後書き）

とりまキリがいいんでここまで

**ちくしょぉおおおおおおおおかっこいい戦闘の書き方がわかんねぇ！！（前書き**

ここは任せて貰おうか！！

**ちくしょぉおおおおおおおおかっこいい戦闘の書き方がわかんねぇ！！**

「あばばっばばばばばばばばばばばやべぇやべぇやべぇやべぇやべぇやべぇやべぇやべぇ（小声）」

「ゴフゥ・・・・・ゴフゥ・・・・・」

「いつの時代も女の方が強いけども！（小声）母は強しっつーけども！（小声）なくね！？（小声）反則だろぁあの生物兵器！！（小声）」

「フシュルル・・・・」

「パネェマジパネェ。（小声）くっそ・・・・メタボさんどこ居んだよ・・・！（小声）」

「フゴ・・・？」

「こっち見んなぁあああああああああああああああああああああああ犯すぞてめぇええええええええええええ（小声）」

「フゥ・・・・フゥ・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・ふぅ、ようやく」

「行ったみたいだな」

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！？」

「ばっか・・・！？」

「・・・・・・・・（チラリ）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ッ！！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ッ！！！！！！」

「・・・・・・・・（クルリ）」

「ぶっねぇえええええええええマジあぶねぇええええええええええええええ（小声）」

「驚かせんなよメタボてめぇえええええええええええええええええええええ（小声）」

ドアを叩け、さすれば開かれん。――――――――――――――――――――――――出典　聖書

「ＨＱ、ＨＱ、こちらクトウ。現在マウンテンゴリラの視覚外に逃れることに成功。その際、その巨体でいったいどこに潜伏していたのかメタボさんと合流に成功したオーバー」

「ＨＱよりクトウへ、こちらも準備が整った。速やかにメタボを連れてその場を脱出せよオーバー」

「てめぇ今まで何してやがった。こちとらマジで死にかけたぞオーバー」

「うっす、向こうで買い占めたＴＯＮＹの同人誌回収に行ってましたオーバー」

「えええええええええええええええええええええええええええあのバケモノ倒す策があったじゃねぇのかよ！！後何冊かこっちに寄こせよオーバー」

「読み直せ、そんな事実は俺は一言も告げていない。もう手に入るかわからない貴重な代物を脂ぎって汚れた手で触って欲しくないオーバー」

「ふざけんなぁあああああああああああああああ！！てめぇの玉（タマ）の為にこっちは命かけてんだよ！つーか脂ぎって汚らしいのはてめぇだろうが！」

「デブが汗っかきで何が悪い！」

「るせぇよボケ。その脂肪の塊引き千切るぞ比喩じゃなく」
「あ？やんのか？デブは運動不足だがイコール運動神経皆無じゃねーぞ？」
「黙れ肥満体、関節かければ動けねぇだろうが」
「・・・・・・プチッ！」
「・・・・・・プチッ！」

同時に殴り合いになる俺とメタボさん。

「いてぇ！くっそ鼻毛ひっぱるな！」
「うるせぇ！」

譲れねぇ。
ここは俺のプライドの為にも負けられない。
こうして何の意味があるかもわからない不毛な男たちの争いが始まった。

「三角締めぇ！」
「あだだだだ！その巨体でどうやったら関節技ができるんだ！？」

因みに俺はＴＯＮＹ絵だと興奮するけど抜けない派だ。
・・・・・・あの肉感はすげぇエロいんだけど、なんか圧倒されるんだよな。
絵画見てる気分になってくる。

「鉄山なんとか！」

「中途半端にいてぇ！」

そんな男たちの争いは、唐突に終幕を迎えた。

ドゴォン！

「うぉ！？」

「なんだ！？」

壁をいきなり吹き飛び掃除を頻繁に行っていないのか埃が宙を舞う。
あ、人がいないってホントだったんだ。
それより、一体何が！
・・・・・・・・いや、まぁ答えは解り切ってるんだけどさ。
あんだけ騒げばそりゃあなぁ。

「ウォォォオオオオオオオオオォォオオオオオオオオオオオオオオオォォオオオオオオ！！！」

でっすよねー・・・・・。

「あぁーっ！？」

絶望が目の前に現れたというのに、隣のメタボさんはさらに深刻な表情でタイラン子の足元を指差していた。
何事かとその指先に視線を移すと、そこにはタイラン子に踏み潰され無残に引き裂かれた紙袋とその中身達が・・・・・。
まさかアレは・・・・ＴＯＮＹ絵かぁあああああああああああああああああああああああああああ！！？
なんてことだ、こっちには糊もセロテープないんだぞ！
・・・・・・・いや、まだだ。
まだ終わってないっ！

「メタボさん！あれを回収するぞ！」

「どうするっていうんだ？あれだけ破かれては例え糊やセロテープがあっても・・・」

「バカ！この世界には、魔法少女がいるじゃないか！」

「ッ！！！」

「向こうじゃ不可能でもこっちなら可能かもしれないだろっ！？」

「おおっ！」

そう、この世界では俺達の世界にない技術、魔法がある・・・！
もしかしたら失われた物を復元することも可能かもしれない。
正直勉強とかマジたるいけど、貴重なＥＩ（エロ・アイテム）の為なら睡眠時間だって惜しもうじゃないか！
それだけの価値が思春期男子にはあるんだよ！

「という訳でお前が囮になってくれ！」
「君は奴を引きつけてＴＯＮＹ絵は僕に任せろ！」
「てめぇ・・・」
「お前・・・・」

そんな俺達はソウルブラザーズ（笑）。

「グルァアアアアアアアアアアアアアアアァァアアアアア！！」

タイラン子が火を吹き出した、今まで散々無視していて怒ったのかしら。

ちょ、火の勢いつよっ・・・！

「うおおおおおおおおおおおおおお！？？」

「おおおおお！？」

メタボさんと左右に別れて横っ跳び。
その間レーザービームみてーな炎が突っ切って行った。
起き上がってみると炎の通った場所は綺麗さっぱり焼失しており、
でけー穴が空いた壁からは天気の良い空と太陽が見えた。
俺と同じように倒れこんでいるメタボさんと顔が合い、どちらともなく頷き一言。

「「流石にこれは無理」」

選択したのは逃亡。
は？殺し合い？なにキチガイなことといってんの？
全ては命あってのモノ種だろ.jk。
カッコ悪くても生きてればそれでいいじゃない。

「フゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ・・・」

「締めた！発動後の硬直っぽいぞ！今のうちに空いた穴から飛び降りんぞ！」

「ちくしょォオオオオ！跡形も無く燃え尽きた！」

躊躇いなく飛び降りたメタボさんの後から俺が続く。

「リバウンド」

「ええ！？」

しかしどういう理屈か地面から跳ね上がって来たメタボさんの頭突きを顎に喰らって着地失敗。
背中を強打した。

「あ、ごめん大丈夫？」

「てっめ・・・ゴホッ・・・メタ・・ボ・・！」

衝撃で息が詰まったが、なんとか呪詛だけは吐き出した。
何この不思議生物、今どうやって跳ねやがった？

「ああ、僕の救世主の特殊能力っぽい感じでね。痛いの嫌いだからなんか物理属性に対してこんな風に脂肪で覆われてる場所が衝撃を完全に逃がしてくれるんだ。限定版ゴムゴムの実的な？」

「お前そんな能力あんなら盾になれよ」

「だって恐いじゃん」

「アレの正面に曝された俺の方が恐怖で寿命が縮むわ」

その時頭上が微妙に陰った。
確認する必要も無くタイラン子さんが飛び降りてきたのだと直感した俺はメタボさんを引っ掴んでその身を盾にした。
結構な衝撃と汗臭い若干ヌメッた脂肪が押し付けられたがなんとかタイラン子のボディプレスを防ぐことに成功した。
グェッ、と悲鳴が聞こえたが俺が耐えられたので多分大丈夫と判断した。
半信半疑だったが、メタボさんより遥かに体重があるはずのタイラン子を押し返して浮かせたことから相当の弾性があるようだ。
この隙にメタボさんを利用して再び押し潰されるまで脱出させて貰おう。
秘儀・・・発頸もどき！！
説明しよう！要は突き飛ばしてである！詳しい原理は知らん！

「ぐはっ！」

呟き込みながら真上に弾き飛ばされていくメタボさん。
・・・・・・・・・・・・。
やっべぇえええええええええええええええミスったぁああああああああああああああああ。
本当は真横に弾き飛ばして俺も反発利用してタイラン子避けるつもりだったけど焦って体勢を変えずにやっちまった。

ガッ！

このまま無残に踏み潰され死亡という未来は、予想に反してタイラン子の顎に直撃したメタボさんによって防がれた。
仰け反ってバランスを崩し、憶えのある体勢で地面に激突するタイラン子。
とりあえず立ち上がり、余程ダメージを受けたのか未だ起き上がらないタイラン子を驚愕の眼差しで見つめる俺。

「・・・・・・・・け、結果オーライって事で」

「済む訳ねぇだろ！！」

「いってぇ！？」

鼻血を出したメタボさんが俺に拳骨を振り下ろした。
身体強化してるのに結構痛かった。
てか無事だったんだね。

「無事じゃねーよ！僕鼻血とか人生で初めて出したよ！」

「お前、それくらいで済んだならいいじゃん。俺なんか右目視力落ちてんだぞ、身体強化で補えるけど」

「親父にもぶたれたこと無いんだぞ！！」

「俺は親いねーよ」

互いに遠慮なく罵声を交わし、無事を確かめた。
メタボさんとはまだ会って一日も経っていないというのに、その気の遣わなさはルカ子たちより勝っていた。
やっぱ同性だと違うよなぁ。

「グォォオオ・・・！」

そうこうしている内にタイラン子が起き上がり始めていた。

「ちっ、しぶとい野郎だぜ」

「あ、あれメスだぜ」

「マジで！？いや、それはいいわ。それでどうする？このままじゃジリ貧だぜ？」

「・・・・・・手はある」

あんまし使うなって師匠達に注意を受けてる奴が。
しかしこのままだと本当に危ない。
何もできないまま死ぬくらいなら、全部使ってから死んでやる。

「・・・・そっか、なら任せるわ。攻撃はなんとかする」

「・・・・死ぬなよ？」

「バーカ、マイワイフから言明されてんだ。死ねるかってんだよ」

ニッ、とニヒルに笑って見せるメタボさん。
その巨体は僅かに震えている。
痛いのが嫌いって言うのは、本当なんだろう。
救世主ってのは結局自分のトラウマを力に変えているような存在だから、俺はメタボさんの恐怖が如何ほどかちょっとは理解できるつもりだった。
そして、その恐怖を抑え込んで自ら進み出た勇気と覚悟も。

「・・・・・・・あんたすげぇよ（ボソッ」

「なんか言ったか？」

「やるんならとっとと逝けリア充っつったんだよ」

互いに拳をぶつけ、目前の標的を捉えた。
ダメージが抜け立ち上がった奴の身体は明らかに隆起している。
その分のプレッシャーも半端ない。
上等だコノヤロウ。
決着を着けようじゃねーか。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9230u/

俺、不器用ですから

2011年10月12日16時19分発行